
今日も明日も。

壬生一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も明日も。

【Nコード】

N3833I

【作者名】

壬生一葉

【あらすじ】

大人に憧れる20歳はたちの頃。 出会つべくして出会い、落ちるべくして落ちた恋。

1

落とし穴に落ちようと思って、落ちる人は居ない、先ず居ない。

けど、気付かないうちに落ちてる事がある。

それは、「恋」のお話。

2

2

出会いは、入社式のこと。

あたしは専門学校を卒業し、インテリアの内装材を扱う商社に入社した。

名前を呼ばれ、配属先の辞令を受ける。

「あおやまかなで青山奏。本社、総務部経理課に配属とする。」

「はい。」

その事例を読み上げていたのが、あたしの上司にあたる穂積智志。同期の女の子が、式が始まる前に”イケメン”と小声で言ってるのが耳に入った。

あたしには、高校時代から付き合ってる彼氏が居た。だから、穂積さんを一人の男性として意識する筈もなかった。

「青山さん、じゃあ給湯室、案内するね。」

総務部の先輩の、西野千鶴さんが優しい笑顔で新人のあたしを迎えてくれた。

「皆、コップは決まってるね。朝だけ、コーヒーを出すんだけど。廊下に出て、直ぐのところに給湯室があった。」

「ここは、総務の役職の人達のしかないのね。事務員と情シスの人たちは勝手にやるからさ。」

オフィス街の中の12階建てのビル。うちの会社が6、7階の2フロアを借り上げていた。

「・・・西野さん、この可愛いうさぎキャラのコップは？」

「穂積さん。ウケルよね、奥さんに持たされたんだって。」

デキル男と専ら噂の穂積さんが、このうさぎちゃんを使ってコーヒーを啜る姿はいかなものか。

あたしはトレイに、役職者5名分のコーヒーを用意し、デスクに戻った。

座席の関係で最後に穂積さんにコーヒーを差し出した時、あたしは思わず声が上ずった。

「失礼しま・・・コーヒーです。」

穂積さんがあたしを見上げて、眉間に皺を寄せた。

「笑うとこじやない。」

「・・・ぶっ・・・すみません・・・くっくう。」

イケメンなのにデキルのに、うさぎちゃんって!!!

あたしはトレイを戻しにきた給湯室でも笑いを飲み込む事が出来なかった。

「・・・青山さんって笑い上戸なんだね？ふ。しかし、思いつきり穂積さんの前で笑ったのは貴女が初めてだよ。」

職場の雰囲気慣れた頃、ゴールデンウィークに突入。

久々に彼氏の遠藤幸成とデートする時間が取れた。

土日は会社が休みなものの、慣れない通勤ラッシュや気疲れでとても幸成とどっかに出掛けるなんて気力は出てこなかった。

「もう就活でしょ？」

大学3年になつたばかりだが、企業の青田買いが激しくなっていて2年でも内定をもらつてる人間も居るくらいだ。

あたし達はカフェでランチを取っていた。

「うん。奏はどう？仕事。」

「仕事自体は難しいことはないけど、人づきあいとか何だか疲れるね。先輩の女の人は皆良い人ばつかで良かったよ。総務だからさ、お局様のなおばちゃんとか居たら怖いじゃん？」

ストローでアイスティーの中の氷を適当にいじった。

「・・・メールとか減つたよね。」

幸成の態度が会った時から沈んでる雰囲気は感じてた。この一言も、これから始まる沈む話の布石だ。

「俺たち4年付き合ってたけど、これ以上進んでもお互いにとってプラスにはならないと思う。」

「学生と社会人は違ふと思うし、何だか奏が遠い人間になつちやつたみたいなんだ。」

「俺も就活、頑張るからさ。奏も仕事、頑張れよ。」

「別れたからつて、じゃあ急に口も聞かないとかは嫌だからさ。」

「友達」？・・・そうしようよ。」

幸成の息もつかせぬ別れ話は、それこそ遠いところから聞こえてくるみたいに耳に届いた。

テーブルに伏されていた会計票をスマートに手に取り、あたしの目の前から消えた幸成。

ガッシャーン

どっかで何かが割れる音がして、あたしの耳に現実が戻ってきた。

あたしは慌てて、店を出て幸成の姿を探した。

街を暫く彷徨って、幸成のハンチングらしきものが見え、人混みを掻き分けて近づこうとした。

確かにその後ろ姿は幸成だった。

でも、それはあたしが付き合ってた幸成では、既になかった。

幸成の隣には、幸成の顔を愛しそうに見上げる女が居た。

「・・・そうしたこと・・・。」

あたしは踵を返し、涙を堪え喧騒に飲み込まれようと必死になった。

3

「これ、小口申請しといてくれる？青山。」

結構な束の領収証を穂積さんから渡された。手に取ると、束ごとにポストイットで”交通費”や”会議費”などと明記があった。

「いつまでに？」

「今日中にやってくれば良いよ、青山。」

穂積さんは、書類を見つめテンキーを叩いていた。

とにかく忙しい人。高卒でこの会社に入って、14年。ノンキャリアから役職にまで就いたデキル男。

穂積さんを信頼してる上司も部下も多いようだ。

あたしもその一人だ。

入社して一カ月が過ぎた。最初の一週間位は西野さんについて庶務的な事をこなしていた。ところが”お試し期間”が過ぎた頃、穂積さんはあたしにも色んな仕事をさせてくれた。

本部ではない営業所に配属された同期の女の子に聞いたら未だに、お茶とコピーと伝票整理しかやらせてもらってないと言っていた。穂積さんは言った。

「社内では新人でも、お客から見たら会社の一部だからね、早く一人前の仕事をして欲しいんだ。」

そう本部に配属された新入社員に、聡明に語った。

あたしは本部に来れた事に感謝した。

「青山さん、ランチ行く？」

「あー今日はコンビニ行きます。」

西野さん達先輩はよく外ランチしてるけど・・・毎月どうやってやりくりしてるんだろ・・・。

専門学校卒業と同時に一人暮らしを始めたあたしとしては、親の仕送り2万円もらっても家賃、光熱費、食費と、結構な出費に、給料日が待ち遠しくして仕方ない。

「あ俺もコンビニ行くよ、青山。」

あたしがお財布を持ちオフィスを出ようとしたその後ろに、スーツの上着に袖を通しながら穂積さんが近付いてきた。

「階段で下りようよ。青山。」

「あ、はい。元気ですね、穂積さん。」

「・・・歩けよ、下りくらい。」

「はい。」

数段前を下りる穂積さんがリムレスの眼鏡を外し、上着の左胸ポケットに挿し入れた。

「あれ、眼鏡無くても見えるんですか？」

「乱視があるからボヤけるんだけど、全く見えない訳じゃないんだ。青山は？目良い？」

「あたしはコンタクトです。本当は花粉症なんで眼鏡にしなさいって眼科の先生には言われてるんですけど。」

オフィスの外に出ると、太陽の光が眩しかった。

あたし達二人はコンビニに向かって歩いた。徒歩2分といった所だ。

「穂積さんは愛妻弁当とかじゃないんですか？」

あたしは思わずニヤついた顔で聞いてしまった。

「うちのかみさんは、俺より忙しく働いてる人だからねー、料理とかはたまにしかしないよね。」

穂積さんは苦笑いをした。

コンビニはお昼を買う社会人たちで溢れ、戦いにさえ見えた。

「へえー奥さまは何してる方なんですか？」

「雑誌の編集長。」

穂積さんは、玉子サンドとツナのおにぎりを取った。

あたしは群れの中に入り込めないでいた。

「穂積さん、先行っていいですよ。」

買うべき物を手に入れた戦士は退却！と思い、そう言ったあたしの手
手に戦利品をもたらしてくれた穂積さん。

「俺、マルボロライトね。」

あたしはレジに並び、玉子サンドとツナのおにぎりとマルボロライ
トの金額を支払ってコンビニの外に出た。

お店の入り口で煙草に火を点けようとしていた穂積さんは、レジ袋
の中からマルボロライトだけを抜き取って、軽く手を上げ、駅前へ
と続く道を歩いていった。

オフィスの机の上に、サンドイッチとおにぎりを二つ並べて、繁々
と見つめた。

「大人だなー……。」

ぼそっと独り言を言ってみた。

「インチキくさーいっ!!」

アルコールの循環が良い珠紀が真つ赤な顔をして、あたしの話に水を差した。

「インチキ・・・って。」

「すみませーん、モスコもう一杯くださーい! 珠紀は?」

「あたし生中。」

専門を卒業してから親友との飲み会。参加者は珠紀と優衣とあたし。今の酒の肴は「穂積智志」。

先日のコンビニでのスマートな親切の話をしたところ、珠紀はインチキだと言いつつ放った。

「仕事が出来て地位があつて顔もそこそこ良い上に、親切って有り得なくない?! 相当、女喰ってるね、そいつは。」

優衣は唐揚げに付け合わせのレモンを絞った。

「奏はさ、遠藤と別れたばっかで今、心がぼっかりしてんのよ。だからちよつと優しくされてフラつとしてんのよ。騙されない事だね。」

あたしは梅酒のグラスを空けた。

「フラつとしちゃいけないの? 別に好きとかじゃなくて、憧れですよ、憧れ!」

「そついうのあつても良いよね。」

優衣が珠紀の前に生中を置き、小皿に唐揚げを取り分けた。

「だよな? 優衣。」

「あたしもさー、朝の電車でね、毎日会う男の人が居るんだけど。あ喋った事は無いんだよ? だけどね、居ないとあれ、どうしたのかな? とかさ、気になったりしてね。」恋”じゃないけど、心が浮足立つ感じ? 無いよりはあつた方が良いよねえ。」

「解るー!!」

あたしは優衣に抱きついた。

「ま、しっかり者のあんたが”不倫”とかはしないと思うけどね。」
珠紀があたしの肩をポンと叩いた。

「不倫なんかしないよ。そんなのー。今は仕事頑張る！」

あたし達3人は専門に入学してからずっと仲良くしてる。

卒業して住む所がバラけたから、頻繁には会えないけど永く付き合い合える友達。

緊張の社会人生活の中で唯一、心が解きほぐされる時間かもしれない。

「西野は？今日休み？」

「あ、はい。体調不良って。」

「そつかあー・・・うーん。金田は、今日西東京に行っちゃってるだっけ？」

穂積さんは、オフィス内を見回しながらあたしに話しかけてきた。

「はい。どうしたんですか？」

「どうしても今日中に今月の売上まとめたいんだよね。ああ・・・悪いんだけど、今日残業出来る？青山。」

「はい、大丈夫です、やらせて下さい。」

関東に6の営業所があり、そこから毎日データで送られてくる売上を帳票に打ち出し、経理の端末へ入力する作業がある。

いつもは慣れて作業の早い西野さんが任される事の多い仕事だ。

「船橋と柏のデータは入ってるみたいなんだけど、他のところが届いてないから催促して。解るよね、青山？」

「はい。」

定時の17時30分を過ぎて始めた仕事は、結局21時を回って終了した。

「ハアー・・・終わった。」

「お疲れ、青山。」

あたしがデータ入力してる間、穂積さんは小口や経費のデータを整理していた。

「穂積さんは終わりました？」

「うん大体ね。後は明日来てやるかな。急にさ、事業部長に月曜に使うからって言われてね。助かったよ、青山。」

「小口の方、手伝いましょうか？」

7階の穂積さんとあたしのデスク上以外、電気が消されていて、窓にぼつんと二人の影が映し出されていた。

「良いよ、大丈夫。それより本当に今日、予定とか無かったの？金曜だよ？青山。」

「家に帰っても金曜ロードショー見るだけですよ。」

あたしはデスクの上の書類を片付け始めた。

「あ、そう。じゃあちよつと飲みに行こうか？」

会社から少し離れた場所にある地下のバーは、「P A U S A^{パウザ}」と言った。

重い木製のドアを開くと、そこにはあたしが未だ経験した事の無い大人の世界が待っていた。

ライトダウンされた店内の数ヶ所に小さな水槽が置かれ、仄暗く光を放っていた。

カウンターと、スタンディングと、ハイテーブルが有り、ほぼ満席だった。

バーテンダーがグラスを丁寧に拭きながら穂積さんに笑顔を見せ、カウンター席を促した。

穂積さんはあたしが腰掛け易いようにハイチェアを回してからネクタイを少し緩め、あたしの右側に腰を下ろした。

「何、飲む？カクテルだったら何でも作ってくれるよ、ねえ庄司君？」

シヨウジ君と呼ばれた若い男の人は又笑顔で頷いた。

「あ、じゃあキールをお願いします。」

「渋っ。ちよつと意外。俺はジンライム。あとチーズの盛り合わせとナッツ、くれる？庄司君。」

「かしこまりました。」

あたしの膝の上に置いてあったバッグを何も言わず、自分の右側の空いてるハイチェアに置いてくれた穂積さん。

カウンターの上にリキュールの瓶が幾本も並び、シヨウジ君の後ろには色々なお酒が手に取られるのを待っていた。

後ろに目をやると、穂積さん位の年齢の男の人や、あたしよりは年上の女の人達が沢山居た。

煙草の煙が蔓延した店内、お酒や香水の匂いが目や鼻を刺激した。知らない世界に居る、ただそれだけで気分が高揚した。

「今日はお疲れ。」

「お疲れ様です。」

あたし達はグラスを傾けた。

「穂積さん、常連さんなんですね。」

「このオーナーが高校の時の同級生なんだ。最近、渋谷に2号店出したから、こっちにはあんまり顔出してないみたいだけど。」

「へえー。」

あたしは乾いて、グラスに口をつけた。

クリームチーズの乗ったクラッカーを手に取る。穂積さんはピスタチオの殻を剥いていた。

「俺、青山の面接官の一人だったよ、覚えてる？」

「えっ?!」

「去年は人事課の方も兼任してて・・・入室してきてね。『本日は面接の機会を頂き有難うございます』って言ったの、青山。」

半年前の事。スーツを着たおじさん達に面接されたものの、緊張のあまり、内容はおろか面接官の顔など記憶に残っていなかった。

「横浜営業所が拡張の予定だったから、そこに行くかもだったんだけど、総務部長も青山を気に入ってね、本部に来てもらう事になったんだ。あ、これは他言無用だよ。酒の席の話。」

あたしはクラッカーを流し込むようにカクテルグラスを空けた。

「同じもの？」

すかさず穂積さんが聞いた。あたしは頷いた。

シヨウジ君も心得た様に空いたグラスを下げ、直ぐに新しいものを作り始めた。

「最近の子は割と早く辞めたりするから、青山には長く勤めて貰いたいな。期待してるからさ。」

あたしは穂積さんを見る事が出来なかった。

嘘みたい・・・。

デキル人が、あたしに”期待している”と言った。

仕事を頑張ろうと思ってる矢先に、こんなエールはないよ!

それから、穂積さんと仕事の話やプライベートの話をした。
終電にギリギリ乗ったのは覚えてるけど、駅からどうやってアパー
トまで帰ってきたのか記憶に無かった。

4

「青山、今日もコンビニ行く?」

「マルボロライトですかあ?」

あたしは笑った。

時計の針が正午を回り、穂積さんがうさぎちゃんのコップを片手にパシリを依頼してきた。

「あ、そう。後で請求して、青山。あー山ちゃん、これ間違っ
てない?」

あたしは財布を持ってオフィスを出た。

外ランチに行く途中の西野さん達と階段で一緒になった。

「青山さん、今週の金曜日、合コンあるんだけど来る?」

「合コンですか?・・・うーん、今は良いです。」

「彼氏と別れたって言ってなかったっけ?」

「暫く男は良いかなって。仕事覚えたいんで。」

西野さん達が笑った。

「いくつよ?!」

「あ、でも穂積さんと最近、良い感じじゃない??」

金田さんが言う。

「確かにい。喰われたか。」

あたしが西野さん達に喰われそうな勢いだった。

「違いますよ!」

「穂積さんってさ、彼女が居るって噂はいつも、ない?」

「あるある!」

「やっぱり彼女居るんですか?」

あたしも前のめりに会話に参加した。

「だって非のつけどころのない男じゃん。奥さん居たって、穂積さ

んと付き合いたいと思う女は居るよね。」

「え？金田さんもですか？」

1階まで到着しても、あたし達は話を切り上げる事が出来ず、エアコンの効いたロビー内で立ち止まった。

「入社した時は思ったけどねー。大人の男に憧れる時期じゃん。でもさ、穂積さんがあたしを相手にする訳ないじゃんって思ったなら、普通に”憧れ”だけで終了したよね。」

「しました！」

「それに噂で聞いたけど、同期の女の人が穂積さんに告った時も、社内でそーゆー事したくないみたいない感じで断ったらしいよ、あーコレ結婚前の話だけど。」

「出世に響くからでしょ？それは感じるー。やっぱりノンキヤリでここまで来るには、実力の他にも上の信頼無いと無理だよねえ。」

あたしは改めて、女子の情報収集力に感嘆した。

「あ、じゃああたしコンビニなんで。」

「うん、またねー。」

あたしは又お昼の戦場にやってきた。ちょっとした気合いを入れて、おにぎりのコーナーに足を踏み入れる。

わっ

あ痛っ

押さないですよっ

戦いに敗れた戦士は、レジの前に立って煙草と季節違いな肉まんを注文した。

・・・もう初夏だったのに、肉まん蒸かしてて良いの？

オフィスに戻ると、穂積さんはキャビネットの前で書類を見ていた。

「煙草、買ってきましたよ。机の上に置いておきますね。」

「おおサンキュ。・・・って何で、暑いのに肉まん？」

「・・・聞かないで下さい。」

あたしは、肉まんにかぶりついた。穂積さんは大笑いをした。

コンコン

壁を小突く音が聞こえた。

黒のパンツスーツを着こなした営業開発部の木下響子主任が立っていた。

「穂積、これ目、通しておいて。」

”穂積”だつて・・・。もしかして穂積さんに告った同期の女の人つて・・・。

「・・・肉まんつて？」

木下さんの一言に又、穂積さんが笑った。

あたしは肉まんをお腹の中に一刻も早く取り込んでしまいたかった。

「あ、ねえP A U S A 2行つたよ。桐生君、穂積が未だ来てくれないつて言つてた。今日でも行かない？」

「今日？あー・・・水嶋と飲みに行く約束してんだよね。」

「えーあたしも行きたい。行つていい？」

「あ、そう。じゃあ水嶋に連絡しておくよ。」

「無理だつたら社内メールでも入れておいて。」

「了解。」

木下さんが、あたしの近くまで歩み寄つてきたので、あたしは最後の一口を詰め込んで見上げた。

「貴方が青山さん、だよな？」

あたしは立ち上がった。

あたしよりも遥かに大きくて、端正な顔立ちのデキル女の人って感じの木下さん。

「あたし営業開発の木下響子。宜しくね。」

握手を求められたので、あたしはハンドタオルで手を拭き、軽く握つた。握り返された右手に軽い痛みを感じた。

・・・間違いなく、木下さんが穂積さんに告つた女性だろう・・・。

木下さんが6階に戻った後、あたしは穂積さんに聞いた。

「木下さんって穂積さんと同期ですか？」

「あ、そう。女で残ってるの木下だけかな。」

「木下さんって独身ですか？」

「・・・そうだけど。それ本人に言ったら、仕事やりにくくなるからな、青山。」

あたしは深く頷いた。

「いらつしやいませ。」

あたしの顔を見ると庄司君が笑顔を見せてくれた。

流石、客商売だなあ。2度目のP A U S A来店なのに、あたしの顔をちゃんと覚えていてくれたようだ。

あたしはカウンター席の端っこに座った。

「こんばんわ。」

あたしは挨拶をした。

この前は常連の穂積さんと一緒だったから、招かれた客って気分だったけど、バーに20歳の女が一人で入るのってちょっと勇気がいった。

この辺で飲めるところって言ったら、新歓の時に行った居酒屋と此処しか知らなかったから、思い切つて来てみた。

「こんばんわ。今日はどうしますか？」

「じゃあキールを。」

「かしこまりました。」

時間も18時のせいか、お客の数が少なかった。

邪魔にならない程度のBGMが今日はあたしの耳に届いた。

「どうぞ。」

そう言つて庄司君がキールをコースターに乗せ、バーのスタッフがあたしの後ろから一品料理を差し出した。

あたしはそのスタッフを見ると、笑顔を返すだけ。

改めて庄司君を見ると、やっぱり笑顔を見せて

「食事をしてから飲む方が良いですよ。」

と言った。

目の前にはトマトソースのニョッキが温かい湯気を発し、食されるのを待っていた。

あたしは庄司君の心遣いが嬉しくて満面の笑みを返し、それを戴い

た。

「んん、美味しい！」

「ありがとうございます。」

今日は木下さんの事があつて気持ちが落ち着かなかった。何だか、あらぬ事で圧力をかけられた感じが心を乱した。

美味しい食事を摂ったら、ホツとした。

あつと言う間にニヨツキを平らげると庄司君があたしを見て言った。

「美味しそうに食べますね。この前は随分、緊張してたようにお見受けしましたけど。」

「だって美味しいから。あ、あたし実はバーとか来たの初めてで・・・。今日も来ていいものかどうか考えちゃったんですけど・・・。」

庄司君は成程と言った顔で口角を上げ何度か頷いた。

「あたし、穂積さんの部下の青山奏です。」

「庄司です。いつでもいらして下さいね。女性のお客様は大歓迎です。」

庄司君がしつかりした口調で対応をするので、穂積さんと歳が近いのかと思つたら未だ25歳だと云う。

元々、ホテルへの就職を希望していて専門学校でも観光学科を専攻、バイトでP A U S Aに入つてバーテンダーと言う仕事に興味を持ち、店を任されるまでになったそうだ。

「努力家なんだー、庄司君って・・・。って”君”って言っちゃった。庄司さんか。」

「良いですよ、君で。僕も奏ちゃんって呼ぶ事にしよう。」

店内が活気を見せ始めた。

あたしは黙つて庄司君やスタッフ達を目で追つた。

笑顔を絶やさずに給仕するサービス業。ファーストフード店や居酒屋では感じられなかった”プロ意識”を見せつけられた。活力を貰えた気がした。

「庄司君、チエツクお願いします。」

「今日は良いですよ、リピートで来てくれたサービスです。」
あたしは首を振って、バッグから財布を取り出した。

「駄目。あたしは美味しかった食事とカクテルを提供してくれた庄司君達にしっかりと支払いをしたいの。」

一瞬、庄司君はじつとあたしを見つめて、「では、3800円になります」と笑顔で答えた。

「ご馳走様でした。」

「又いらして下さいね。」

帰り際スタッフの女の子にもそう笑顔で見送られた。

「お疲れ様です、総務の青山です。今日の売上データ、伝送して貰えますか？」

各営業所に電話連絡をして、データ待ちである。

西野さんが一人でやっていた仕事を、あたしも半分任せられることになった。

元々、西野さんは総務部人事課に所属してる人なので、いずれは経理課であるあたしが一人で請け負う仕事になると思っていると穂積さんに言われた。

「助かるー、青山さんの仕事の覚えが早くて。これ実は結構、面倒くさいんだよねえ。」

西野さんが帳票を打ち出しながら、本音を漏らした。

「じゃあ青山さん、横浜と柏と船橋ね。」

「はい。これは明日の午前中まで良かったんですね？」

「そうそう。」

あたしは3つの営業所の帳票を見やすいように、線を引こうとペンスタンドから定規を取ろうと顔を上げた。

斜め前の席、いわゆるお誕生日席の穂積さんと目が合った。

「・・・何か？」

「え？・・・あ別に。」

穂積さんは手元に視線を落とした。あたしは仕事を続けた。

「あれ、青山さん、お弁当？」

西野さんが外ランチに出る際、あたしの後ろを通り過ぎると言った。

「節約しようと思って。」

「そうなんだー、偉ーい。どうしたの？どっか旅行とか？」

「へへ、まあ・・・。」

給料も安いなか、P A U S Aに行く為には節約も必要かなと思いはじめた事だった。

嫌な事があつたり、仕事で失敗をするとあそこに行くと元気が貰える。

今日はお給料日だから、1週間半振りにお店に行こうと決めていた。

定時に上がり、あたしは足取りも軽くP A U S Aに向かった。

いつものように庄司君や神谷さんがあたしを迎えてくれた。

「お疲れ様。」

「お疲れ様です。」

何も言わずともキールと軽食が出てくる。

お客さんが少ないオープンしたてのこの時間は、庄司君も神谷さんもフレンドリーに話をしてくれるし、あたしの話も聞いてくれる。

「今度、バーベキューやろうってスタッフで盛り上がってるんだけど、奏ちゃんも来ない？」

「バーベキュー?! ええあたし、やった事ない。」

「奏ちゃんは食べるだけで良いよ。江木ちゃんと庄司君が何でもやってくれるから、ね? 庄司君。」

江木ちゃんは調理担当なので、あまり話をしたことはない。無口で気の良い人らしい。

「桐生さん、来るって?」

「起きたら来るって言ってたけど。」

神谷さんが苦笑いをしながら庄司君の質問に答えた。

神谷さんは、オーナーの桐生さんの彼女なのだそうだ。穂積さんの高校の同級生の桐生さん。未だ会った事はない。

お店のドアが開き、神谷さんは接客でこの場を離れた。

「あたしも行っていいの?」

「おいでよ。大勢の方が楽しいから。」

「じゃあ行く。何かあたしに出来る事があつたら言ってね。おにぎ

り位なら作れるよ。」

あたしはチーズリゾットを口に運んだ。

「んーやっぱり美味しい！」

庄司君の視線に気づいて、手を止めた。

「江木ちゃんにこの姿、見せてあげたいよ。」

「え？」

「僕、奏ちゃん程ご飯美味しそうに食べる女の子、見た事ないよ。」

「……えー……何か恥ずかしいなあ。そんな風に言われたの初めて。へへ。」

25日だからなのか、お客の入りが早く店内はあつと言つ間に満員になった。

もうカウンターの席しか空いてないという時に、ドアは開かれ穂積さんが顔を見せた。

「いらつしやいませ。」

「青山。」

「あ、お疲れ様です。」

あたしは会釈しようとした。すると後ろに木下さんと山本さんの姿が見てとれ、立ち上がった頭を下げた。

あたしの隣に穂積さん、木下さん、山本さんと順に腰を下ろしていった。

明らかに木下さんの視線が鋭く光っていた。

3杯目のキールをオーダーしたばかりで、今直ぐに席は立てない状況だった。

あたしは何だか急に頭痛を覚えた。

「庄司君、あたしブルドッグ。穂積が連れて来たの？こんなバーに、こんな若い子を？」

穂積さんが答えるよりも早く、庄司君がこう言った。

「良いお客様ですよ。」

あたしが顔を上げると、庄司君はグラスを磨きあげ、木下さんに向

かつて微笑んでいた。

あたしはそれを見て、あたしも此処に居て良いんだあと安堵した。美味しくキールを飲み干して、庄司君に声を掛けた。

「3800円です。」

「ご馳走様でした。美味しかった。」

あたしはお金をカウンターに置き、200円のお釣りを待つ間、穂積さんに

「お先に失礼します。」

と声を掛けた。

「あ、ああ。」

神谷さんがお釣りを持って来た。

「いつも有難う。じゃあさっきの話、又今度来た時に日にちとか決めようよ。」

「あ、うん。解ったー。」

あたしはハイチェアを下り、庄司君に手を振った。

「又来てね、奏ちゃん。」

「うん。」

木下さんという刺客に不意に出会ってしまったものの、やっぱり気持ちよくPAUSAを後に出来る。

庄司君のお陰だなー。

外はもうネオンで眩しかった。

5

梅雨明けが宣言され、総務部で納涼会が行われる。

例年、新人が幹事をやるらしく、あたしが幹事という事になってしまった。

総務部の新人はあたし一人しかいないのに……。しかも、今夜つて。

あたしはお昼休み、早々にお弁当を片付けてネットで、お店を検索していた。

「俺も手伝おうか？青山。」

何時もの定食屋から戻った穂積さんがあたしの後ろでパソコンの画面を覗き込んだ。

吐息がかかるような距離で、大人の男がつけてる香水が鼻についた。

「良いです！大丈夫です。分かんなかったら西野さんか金田さんに聞きますから。」

あたしはインターネットをクローズした。

「……あ、そう。」

穂積さんに関ると、木下さんの攻撃がこっちに向かってくる。仕事以外でなるべく、接点をなくしたかった。

「……でも、今のあたしの態度は良くない……。」

穂積さんが席に座ると同時にあたしは立ち上がり、穂積さんに向かって謝罪した。

「すみません。穂積さんをご親切で言っただけなのに。」

食事を終えた男性社員が続々とオフィスに戻ってきた。

「……ごめん、俺も今拗ねた。大人げなかった。」

穂積さんはバツの悪そうな顔をしていた。

”拗ねた”って……。

それから、あたしにしか聞こえないくらいの声で、こうも言った。

「木下の事。嫌な思いさせて悪かった。」

気づいていて知らない振りをしなかった穂積さん。

「前にもちよつと話したけど、面接の時から青山を買ってる上の人間が多い。実際仕事も出来るんで青山の評判が良い。木下は女性でありながら営業主任にまでなった努力家の人間だ。今まで注目されてきた。けど、その注目が青山に移り変わろうとしてる。それが気に入らないんだ、彼女は。」

「……はい。」

あたしは、それだけじゃないと思ってる。穂積さんの下で働いてるあたし自身が、木下さんは気に入らないんだと思ってる。

穂積さんがそれに気づいてない訳ないと思うが……。

「根は良い奴なんだよ。」

穂積さん。

その優しさは、時に毒にしかならないですよ。

木下さんは完全なる穂積ジャンキーになってる。

「東口に、『炙り屋』って居酒屋があるんだ。あそこ、この前初めて行ったんだけど良かったよ？青山。」

「……ありがとうございます。」

あたしは又、インターネットを開いて『炙り屋』を検索し、電話番号を控えた。

定時の30分前にお店に予約を入れ、無事に15名分の席を確保出来た。

「青山君、良いお店じゃない。」

総務部長のテカったおでこにネクタイが巻かれていた。

もうそろそろお開きという時間で、部長クラスは殆ど出来上がって

いた。

「ねえ本当ですよー。このお店、最近出来たんじゃなかった？青山さん、センスある！」

「あ、ここはほづ……。」
穂積さんの名前を言いかけて穂積さんに視線をやると、口の前で人差し指を立てていた。

会計を済ませ、カラオケに行く人、2軒目に行く人、帰る人と各々で散らばった。

あたしは気が張って殆どお酒も飲めず、食べ物も食べれずだったのでPAUSAに行くことにした。

「PAUSAに行くの？」

気づくと横に穂積さんが居た。

「あ、はい。」

「俺も行くのかな。良い？青山。」

「え何で聞くんですか？穂積さんが教えてくれたお店じゃないですか。」

「俺より、もう行きつけてる感じだから。庄司君とも仲良いみたいだし、青山。」

「あたし専門学校以外で初めて出来た友達かもしれないです。」

「……友達？」

「え？あ、はい。」

そこから会話は途切れて、PAUSAに到着した。

21時近く、お客も多かったがウィークデーなので満席という程では無かった。

「いらつしゃいませ。」

あたしは何時ものように指定席のカウンターに座ろうとした。すると、穂積さんがあたしの手首を掴み、ハイテーブル席へと導いた。

カウンターの中の庄司君もびっくり顔だった。

「テーブル空いてるんだし、たまには良いでしょ。」

先に穂積さんが、あたしに対面する形で席についた。

自然とあたしは、カウンターに背を向ける状態となった。

神谷さんがさつとオーダーを取りに来る。

「いらつしゃいませ。奏ちゃんはキール？穂積さんは、ジンでも？」

「今日はハーバーのダブル、水割りで。」

「かしこまりました。奏ちゃん、お腹は？」

「ちよつと空いてるの。何か食べたい。」

「了解、江木ちゃんにヘルシーなの作ってもらつよ。」

「ありがとう。」

あたしがカウンターの方に目をやると、恐らくあたしのであろうキール用のグラスが出されていた。

「穂積さん、今日はありがとうございました。お店、皆喜んでましたね。」

「うん。」

煙草を口に加え、目を細めて火を点けた。ネクタイを緩め、それを外す。

スーツ自体が大人の雰囲気醸し出してるのに、仕草の一つ一つがそれを又誇張している。

直ぐにお酒が運ばれてきた。

穂積さんのウイスキーが綺麗な黄金色で、グラスの氷が音を立てた。

「ウイスキー美味しいですか？」

「うまいよ？飲んでみる？」

あたしはちよつと考えてから、首を横に振った。

穂積さんは目で笑つてから、煙草の煙を燻らせた。

「煙草、美味しいですか？」

「はは、これは美味くはないかな、青山。」

「穂積さんって、それ癖ですよね？何々って言った後に、名前言う

の。」

「え？名前？」

「何とかだよ、青山。とか言うの。あれ、無自覚？」

「・・・そうかなあ。意識してなかったけど。」

神谷さんがあたしの前に、カフェオレボウルを差し出した。

「江木ちゃんの豆腐スープです。」

「あ良い香りー。」

「ごゆっくり。」

神谷さんは穂積さんにも軽く会釈して、この場を去った。

「桐生に会った？」

「あ、未だお会いした事ないです。いただきます。」

あたしは両手を合わせ、目の前のご馳走にありつく事にした。

一口。

あつたかい。体ポカポカしてきた。

「美味しそうに食べるね、青山。」

「ははは、それ庄司君にも言われました。江木ちゃんが作るもの、

全部美味しいんですよ。」

穂積さんは頷きながら、煙草を灰皿でもみ消した。

あたしがあつと言う間にスープを片付けた頃、穂積さんのグラスも

空になっていた。

「あ、同じもの頼みますか？」

「・・・良いよ、今日はこれで帰るから。青山はゆっくりして行き

なよ。」

「え？もう帰っちゃうんですか？」

穂積さんはあたしの頭を子猫を撫でるようにして、溜め息交じりに

こう言った。

「女の子が男にそんな事、軽々しく言うもんじゃないよ、青山？」

あたしはそう言われて、自分が発した言葉の重大さに気づいた。

勿論、そんなつもりで言った言葉じゃない。

未だ一杯しか飲んでないのに、って、ただそう思っただけ・・・。

あたしは顔から火が出る思いで、顔を上げられなかった。

すると穂積さんの大きな手が、ポンポンとあたしの頭を叩いた。

「俺だからセーフ。世の中には厭らしい事しか考えてない男も居るんだから、気をつけなあ。」

ハイチエアーを下り、カウンターの庄司君に声を掛けた穂積さん。

庄司君があたしを一瞬見てから、穂積さんから支払いを受け取った。

穂積さんがあたしに軽く手を上げて、お店を後にした。

あたしはハイテーブルの上に、頬をつけ頂垂れた。

・・・本当だよ。

そこらへんのしょーもない男だったら、あたしから誘ったって喰われかねなかった。

穂積さんが大人で、紳士で、上司で良かった。

テーブルから立ち上がるキールのカシスが、華やかに赤を放った。

会社。行きたくない・・・。

どんな顔して穂積さんに会ったら良いの？

「おはよ、青山。」

オフィスビルに入る一歩手前の信号待ちで、穂積さんに声を掛けられた。

あたしはバツが悪かった。顔もまともに見れない。

それを直ぐに察知した穂積さんは、鼻で笑った。

「もしかして昨夜の事、未だ気にしてる？別に良いじゃん、これから気をつければ良いんでしょ？」

あたしは穂積さんを見上げた。

「今日も仕事、頑張りましょうよ、青山。」

信号は青に変わり、穂積さんは軽い足取りでビルの中に消えていった。

あたしも一つ息を吐いて、「仕事仕事」そう言葉にして気合いを入れた。

6

「え？何、来れないって？！わざわざ銀座まで出てきたのに？」

あたしは東銀座の東劇の前で、珠紀に電話を繋いでいた。

彼氏が急に会いたいと言ってきて、あたしとの映画より、そっちを取るらしい。

歩きなれないヒールも、見なれない街も、今にも雨が降りそうな怪しい雲行きにも、酷い仕打ちを受けてるようだった。

到底、一人で映画を観る気分にもなれない。

でも板橋から出てきて、とんぼ返りする気にもなれない。

結局あたしはデパートの立ち並ぶ銀座2丁目辺りをぶらつこうと決意した。

よく歩く池袋とは全然違う。

活気はあるけど、”雑”じゃないって感じ？

年配の品のある夫婦や、黒づくめなのにやたらお洒落な女性とか・

数多くのブランド店はとても、あたしが気軽に立ち寄れる雰囲気じゃないけど、その雰囲気の中を歩いてる自分が居る。

くすぐったい感じ。

気持ち晴れてきたあたしとは反対に、空はアスファルトに雨をもたらしただ。

あたしはバッグから折りたたみ傘を出すよりも早く、コーヒーシヨップの軒先に駆け込んだ。

前髪に滴が滴っている。それを掃って、傘を取り出そうとしていると、思わぬ声を聞いた。

「青山?!」

シヨップの入り口から声がして振り返ると、私服姿の穂積さんが居た。

思わず頭から靴の先まで舐めるようにチェックしてしまった。

穂積さんの手招きに釣られ、コーヒーの香りが漂う店内に入った。

道路に面する窓際でコーヒーを飲んでいた穂積さんが、走ってくるあたしを見つけたようだ。

あたしは空いていた椅子の上にバッグを置き、そこからミニタオルを出し顔や手の雨を拭きとった。

穂積さんが持っていた黒のカーディガンをあたしの肩にかけてくれた。

「え!良いですよ、カーディガン濡れちゃいますよ!」

あたしは慌てて、それを返そうとする。

「コーヒー買ってくるから、座ってて。」

穂積さんが頑なで、あたしは前の合わせに目をやった。

白いコottonのシャツは急な雨にうたれ、うっすらと肌の色まで映し出していた。

あたしは両手を胸の前でクロスさせるように重ね、椅子の上で小さくなった。

大粒な雨が窓を叩いた。

「ラテで良かった？」

カウンターのテーブルに湯気を携えたカップが置かれた。

黙って頷くあたしの隣で、穂積さんはただ静かに、読みかけだった新書のページを捲った。

穂積さんのその優しさに、又助けられた。

誰かと時間を共有してるのに、言葉も視線も交わさない。

それでも、それが窮屈でも苦痛でもないなんて・・・。

ラテが半分程、無くなった頃、あたしは穂積さんに目を向けた。

穂積さんもあたしを見ていた。

あたしは視線を外し、カップを両手で包んだ。
もう温かくはなかった。

今ぶつかった空気は、何？

心音が早まるのを聞いた気がした。

「・・・カーデ、クリーニングに出して返しますね？」

「ああ。それで帰れる？」

あたしはコクリと頷いた。

「今日はどうしたの？誰かと会う約束だったの？」

「あ、はい。友達と映画を観る予定だったんですけど、彼氏と会う事になったからってドタキャンされて。」

「ああそう。」

「はい。」

何だか落ち着かない。

「ほ、穂積さんは？」

「かみさんが銀座で仕事しててね。終わったら、ご飯でも食べて帰ろうって言うから来たんだけど。長引いてるみたいだな。」

時計を見る仕草をした。

「奥さん、何してるんでしたっけ。」

「雑誌の編集者、編集長か。エヴリってワーキングウーマン向けの雑誌、創刊した本人。」

本屋で目にした事はある。

まだまだ手にする事はないと思っていた雑誌の編集長が、穂積さんの奥さん・・・。

スマートな振る舞い

高そうな時計

完璧な男

銀座で夫婦で水入らず

デキル妻

それが現実。

急に、西野さんと金田さんとの会話が走馬灯のように蘇った。

「奥さん居たって、穂積さんと付き合いたいと思う女は居るよね。」

「大人の男に憧れる時期じゃん。でもさ、穂積さんがあたしを相手にする訳ないじゃんって思ったら、普通に”憧れ”だけで終了したよね。」

そうそう。

終了だよ。

穂積さんの携帯がカウンターの上で震えた。

あたしはバッグの中からお財布を取り出し、500円を震える携帯の傍へ差し出した。

穂積さんから目を逸らし、カーディガンの合わせを抑え席を立った。

「青山……。」

耳を塞ぎたかった。

雨は、さっきより弱まっていた。傘の花が咲く、街の雑踏に身を隠した。

帰りの地下鉄を待つ間、あたしを穂積さんが包んでいた。

香水の残り香がさも、そこに穂積さんが居るかのよう錯覚させた。

「こんなの羽織ってるからじゃん？」

あたしはボソツと言った。

今まで、何とも思ってたなかった。尊敬する上司、ただそれだけだった筈。

ちよつとした勘違いだよ。

何、急なドキドキ？

相手は32歳。年の差12歳。既婚者だし、完璧な奥さん居るし。違う違う。

「違うから！」

同じように電車を待つ人の目が刺さった。

とても平静を保てる状態でないあたしは、PAUSAに足を運ぶ事に決めた。

「・・・奏ちゃん。どうしたの？今日、休日出勤だったの？」

神谷さんがあたしを見る早々、そう言った。あたしは首を振って、いつものカウンターに座った。

オープンしたばかりのこの時間で、お客はあたし一人だった。

「土曜だから混んでるのかと思った。」

「土曜は大抵、一軒行った後に此処に来るって感じかな。キール？」

「・・・マルガリータにしようかな。」

「どうしたの？」

神谷さんがあたしの顔を覗き込む。

カウンターの奥の庄司君もじつとあたしを見つめていた。

「やだなー。たまにはあたしも違うの頼むよー。」

「・・・庄司君、マルガリータだって。」

庄司君は、氷を入れたシェイカーにテキーラを注ぐ。メジャーカップがメトロノームのように振れた。

庄司君があたしのオーダーで、シェイカーを振るのは初めてだった。いつになく真剣な面持ちでシェイカーを振る姿に見入ってしまった。カクテルグラスに注がれた白雪のカクテル。

「どうぞ。」

あたしは一口飲んで、間髪入れず次の瞬間には、グラスを空けた。

体が一気に火照った。

神谷さんも庄司君も、尋常ではないあたしを見守っている。

・・・酔って、何も考えられなくなれば良いと思った。
でも駄目だ。

ここで酔ったら、庄司君達に迷惑がかかっちゃうや・・・。
家で缶チューハイでも飲んで飲んで飲みまくって、倒れた方が良く・・・。

「ごめんなさい。やっぱり今日はこれで帰ります。えっと、お財布・・・。」

あたしがバッグの中をかき回していると、神谷さんが

「酔いたくて来たんでしょ？良いよ？それで。つぶれたら、あたしの家に泊めてあげる。」

そう言っただけでウインクした。

「奏ちゃん、真面目すぎんよ。会社でも此処でも”イイコ”なんですよ。PAUSAはイタリア語で”休憩”。頑張ってる自分を休ませてあげて良いんじゃない？」

「・・・休憩・・・。」

あたしは泣きなくなる気持ちを堪えた。

頑張ってる・・・。

あたし頑張ってるよね。

「・・・ハーバー、ダブル、水割りで。」

この前覚えたばかりのお酒のオーダーに、庄司君は応えてくれた。

何で酔いたいのか、それは神谷さんも庄司君も詮索してこなかった。差し障りのない程度の会話をして、今度のバーベキューは、桐生さんのお家でホームパーティーになったって話をした。

本当に途中から、何も考えられなくなった。

手の感覚が鈍って、ウイスキーで満ちたグラスを何とか持ち上げた。髪を耳に掛けると左腕から、穂積さんの香りがした。

・・・眠りたい・・・。

あたしは両腕を枕代わりにして頭をもたげた。

穂積さん・・・。

遠くの方で神谷さんの声が聞こえた気がした。

どれくらいか眠りから覚めたのか、上体を起こすと、自分がベッドに居る事に気づいた。

胸がムカムカして、誰かに頭を叩かれてるみたいだった。

もう一度布団に倒れ込むと、茶色い長い髪の毛が目に入った。

あたしはよく考えた。

自分の家じゃない。

女性らしい華奢な体が寝返りをうった。

「・・・ん。あ・・・奏ちゃん。」

「神谷さん・・・。」

神谷さんが起き上ったので、あたしももう一度起きる事にチャレンジしてみる。

「あ、良いよ。無理しなくて二日酔いでしょ？」

Tシャツとハーフパンツというラフな格好に、似つかわしくない抜群のスタイルがカーテンの隙間の太陽に浮かび上がった。

長髪をゴムでまとめ上げ、振り返る。

「今、お水持つてくるよ。」

部屋のドアを開けたまま出て行く。そこからキッチンに立つ神谷さんが見えた。

あたしはベッドに腰を掛けた。

自分もＴシャツとハーフパンツの姿なのに気づいた。

「・・・カーデ・・・。」

あたしは頭を押さえながら辺りを見回した。

あたしのシャツもスカートも、穂積さんのカーディガンも見当たらなかった。

神谷さんがコップに水を汲み、戻ってきた。

「はい。お水。」

「あ・・・ありがとう。・・・神谷さん、あたしの洋服・・・。」

あたしはコップを受け取りながら聞いた。

「何て顔してんの。」

神谷さんはそう言いながら、あたしの隣に腰掛けた。

「・・・奏ちゃん。あたしも庄司君もお店ではお客様のプライバシ

ーに自分からは突っ込んで聞かない。」

神谷さんと目を合わせてるのが怖かった。

「今こうして此処に居るのは、あたしの友達の奏ちゃんだと思って、

あたしは言うよ。」

あたしは何かを言いたかったけど声にならなくて、小さい子がイヤイヤをする様にただ頭を振った。

「穂積さんを、好きになるのはどうかと思う。」

違うよ、違うよ、神谷さん。

あたし、穂積さんを好きな訳じゃない・・・。

尊敬してるだけだよ。頼れる上司なだけだよ。

そうやって口に出して否定したいのに、それが出来ないでいる。すると神谷さんがあたしの髪を撫でながら言った。

「・・・ごめん、奏ちゃん。起きぬけに説教みたいな事、言っちゃって・・・。ただ辛い思いするのは、奏ちゃんだと思って・・・。和真君、あ、オーナーの桐生和真ね。奥さんも子供も居たの。」
それは衝撃の告白だった。

神谷さんと桐生さんが付き合ってるというのは聞いていた。

けど、桐生さんが既婚者だったというのは初耳だった。

神谷さんがPAUSAにスタッフとして入って、桐生さんと出会い恋に落ちてしまった。

・・・神谷さんは桐生さんが妻子持ちだと当初、知らなかったとか。桐生さんは神谷さんと関係が出来るまで、妻子がいる事を知らせなかった。

加えて、神谷さんを愛してるけど子供に罪はない、奥さんとは離婚しないと切り切った。

神谷さんは桐生さんをズルイと思った。

けど、桐生さんが傍に居ない自分は想像できないと、あたしに言った。

「・・・でも和真君はやっぱり、ズルイのよ。奥さんにバレるのが怖いからP2をオープンさせて、あたしと距離を置いた。」

神谷さんの家からの帰り道、あたしは電車に揺られながら考えた。

よっぽど、桐生さんの事を愛してるんだろうなあ。

自分を愛してると言った男が、愛してもいない妻の元へ帰っていくのを黙ってみてるなんて・・・。

しようと思ってた”不倫”じゃない。

なろうと思ってた”愛人”じゃない。

それでも、手に入れる事の出来ない人をいつつも待ってる。

神谷さんの辛い気持ちを思うといたたまれなくなっ、泣きたくなかった。

あたしは穂積さんのカーデが入った紙袋の取ってを強く握りしめた。

大丈夫。
あたしは未だ、そうじゃない。
憧れの域を脱した訳じゃない。

7

月曜定例の朝会が終わり、席に座ろうとすると7階のフロアの入り口の壁をノックする音が聞こえた。

殆どの社員が腰を下ろしかけたという状況の中、営業開発部の木下さんが凄い形相で、あたしの元へと歩いてきた。

「青山さん、貴方先週の金曜日にサーバーの営業開発のファイル開きっぱなしで帰ったでしょう?!」

あたしは慌てて、サーバーのファイルを開いた。

営業開発部のファイルが、あたしの名前で『編集集中』となっていた。確か、山本さんから頼まれて営業開発部の売上金額の訂正を行ったのだった。

サーバー内のファイルは共有ファイルなので、誰かが開いていると勿論、他の人間は開くことさえ出来ない。

あたしは頭が真っ白になった。

木下さんが何かあたしに向かって言ってるのは判るけど、自分がミスをした事実だけが重く重く押し掛かっていた。

フロア全員が事の成り行きを静観している。

木下さんが仕事に関して、自分にも他人にも厳しいのは周知の事実だ。

あたしの目の前の席の山本さんが何か言いたそうにしていた。

見兼ねたように穂積さんが木下さんとあたしの間割って入った。

「木下。すまない、大変申し訳ない事をした。」

「申し訳ないどころじゃないわよ！こっちは今日の午前の会議に使うおうと思つてたのよ？！土曜にわざわざ休日出勤までして議案、作るうと思つてたのに！」

益々、自分のした事の重大さを思い知らされた。

「きの……。」

「申し訳ありませんでした！」

あたしは頭を下げた。

「今後こういうミスは二度といたしません！本当にすみませんでした！」

「青山……。」

木下さんは溜め息をついた。

「……解つたわ。今回は、社内に関する事だから大目に見るわ。

でも次にこんなくだらないミスをしたら、あたしは貴方を許さないわよ。穂積、貴方も上司なんだから監督責任よ。」

そう言い、木下さんは総務部を後にした。

社員の緊張が一瞬にして解けた。

西野さんがあたしの肩を叩いて

「……大丈夫？」

と聞いた。あたしは頷いて、穂積さんにも謝罪した。

穂積さんが

「今後は気をつけるように。」

と静かに言った。

社内いつもの活気が戻った。

あたしは、先週に頼まれていた仕事の続きを始めた。

時計の針が正午を指すのが酷く遅く感じた。

西野さんが朝の出来事を気にしてか強引にお昼に誘ってきた。

「青山さん、この前オープンしたばかりの和食屋さんがあるんだけど、そこ行かない？」

その気遣いに応えたいとは思ったけど、とてもそんな気にはなれなかった。

あたしは一生懸命笑って言った。

「今日、お弁当、力作してきちゃったんですよ。すみません、せっかく誘ってもらったのに。」

「・・・ん、そっか。じゃあ今度一緒に行こうね。」

「はい。」

社員の殆どがフロアを後にした後、あたしは机の引き出しからお弁当を取り出して立ち上がった。

穂積さんがささず声を掛けてきた。

「何処行くの？青山。」

「え？あ、お弁当食べに、近くの公園でも、行こうかなって・・・。」

「

公園？」

穂積さんが顔をしかめた。

この辺りに公園なんて無いのを知ってるからだ。

あたしは足早にフロアを出た。

階段を上り、上がった。

逃げるように歩き続けた階段も、途中から、目の前がぼやけて良く見えなかった。

屋上のドアの手前で、足が止まった。

声押し殺すように、泣いた。

ドアに寄り掛かる。左の手の甲を唇に押し当てた。

何であんな初歩的ミスを……。

「うー……。。」

「……何で。」

穂積さんの声がして、階段を上ってきているのが見える。

あたしは泣いてる自分を何処かに隠してしまいたかった。

目の前に、穂積さんの苦しそうな顔があった。

……穂積さん？

穂積さんの両手があたしの両耳の辺りをかすめてドアについた。

あたしは息を飲んだ。

「何で一人で泣くんだよ、青山。」

あたしの額に穂積さんの吐息がかかる。

そして又あの香水だ。

何も考えられない。

穂積さんが、あたしの涙を覆い隠すように、あたしを抱き締めた。

どうしていいのかわからなくなった。

穂積さんの体温が流れ込んで、息が苦しくなった。

「……ほ……。づ……。。」

穂積さんがあたしの両肩を掴んで、体を離れた。

「ごめん。」

穂積さんは顔を背け、あたしから距離を置いた。

あたしは一気に力が抜けて、その場へとしゃがみ込んだ。

「ごめん。」

穂積さんは又、同じ事を言って階段を下りた。

何？

何で？

あたしが泣いたりしたから？

あたしは上腕を強く掴んだ。

此処に確かな力を感じた。

8月になって、グツと暑さが増した。

あたしはミニタオルで首の汗を押さえる。

今日は神谷さんと待ち合わせをして、桐生さんのお家に行くところ。最近、P A U S A には行ってない。

神谷さんに忠告されてから正直、行きにくかった。

神谷さんからのメールのタイトルも「明日来れる？」だった。

「おはよ、奏ちゃん。」

「神谷さん、おはよう。」

「・・・この前は、ごめんね。あたし、おせつかいだったね。」
あたしは首を振った。

「庄司君にも言われたの・・・。奏ちゃんが最近来ないのは、あたしが何か余計な事言ったんじゃないかって・・・。」

「・・・神谷さんが桐生さんの事、話してくれたのは良かった。」

あたし達は、駅構内を出て桐生さんのマンションへと向かった。

「ただ、正直あたしにも良く分からないの、神谷さん。」
「・・・うん。」

それからは、今日のホームパーティーの事を話した。

桐生さんのマンションは最上階にありバルコニーが広く、そこでバーベキューが出来るらしい。

流石バーを2軒も経営出来るほどの人なのだと思った。

けど、会うのはちょっと怖い。

ズルイ男なのだと判っていて、初対面した時にあたしは臨機応変に対応出来るだろうか。

オートロックを神谷さんが簡単に解除する。

「神谷さん、桐生さんの奥さん達も居るの？」

「まさか！奥さん達は奥さんの実家に帰省してるの。・・・奥さん達が居るのにあたしを呼ぶなんて自殺行為でしょ？」

最初のドアを押しあける神谷さんの背中が、泣いてる。

あたしにはそう見えた。

EVの中で今日のパーティを楽しもうと、神谷さんは色々とあたしに話し続けた。

あたしには、震える気持ちを紛らわせようとしてる様にしか見えなかった。

ドアの横のインターホンを押し、名を名乗ると「どうぞ」と男の人の声が出た。

玄関には、いくつかのブーツとスニーカー、赤いピンヒールが綺麗に並んでいた。

あたしは一瞬、体を硬くした。神谷さんもそれを注視しているのが解った。

あたし達以外に女の人は居ない筈。

長い廊下の先のドアが開いて、男の人の声がした。

「よお。」

初めて会う男^{ひと}。桐生さんだろう。

段々、桐生さんが近付いてきた。

想像してたより、悪そうな人だった。

アッシュ色の髪に、耳にはヘリックスが4つも開いていた。

気持ち悪いほど痩せほそつた手があたしへと伸びてきた。

「噂の奏ちゃん。会えて嬉しいよ。」

求めに応え、右手を差し出した。

笑った顔を見ると、神谷さんの愛してる人なんだなと思えた。

「もう始まるから、おいで。」

桐生さんは神谷さんの肩を抱いて、奥の部屋に飲み込まれた。

あたしもサンダルを脱ぎ、それに続いた。

開いたドアの向こうに、庄司君の横顔が見えた。

あの泥酔した日以来だから、顔を会わせづらい……。

庄司君があたしに視線をくれ、何だか切ない表情を見せた。

窓から夏の陽射しが差し込んで、その部屋の観葉植物がまるで野外

かのような気にさせた。

窓の向こうにあるバルコニーに、見覚えのある顔を見つけた。

動かない。

足が一步も動かないの。

神谷さんが、振り返ってる。

バルコニーのその人もあたしを見ていた。

そして、その人の横に居るショートカットで長身の女の人も視線を

投げかけてきた。

「穂積だろ？奏ちゃんを店に連れてきたの？」

「こんにちわ。」

バルコニーから、その女性が笑顔であたしを迎えていた。

「穂積美帆子です。穂積が何時もお世話になってます。」

眩しくて眩しくて、目を瞑りたくなる程の笑顔だった。

あたしに挨拶をしてから隣に居る穂積さんにも又、笑顔を向けたミホコさん。

それは極自然で、あたしは刹那呼吸を忘れた。

窓際のレースが揺れて、あたしは我に返る。

軽く頭を下げて

「穂積さんの部下の青山奏です。初めまして。」

と、口角を上げて、その台詞を言った。

笑えていただろうか。

ミホコさんが笑顔を返した。

「奏ちゃん、何飲む？」

隣に庄司君が立っていた。

「・・・今日は何が出来るの？」

あたしは庄司君とキッチンカウンターに連れ立った。

幾つかのリキュールとウオッカ、ウイスキーがあった。

「じゃあスクリュードライバー貰おうかな。」

「かしこまりました。」

あたしは背中に穂積さんの気配を感じてた。

振り向きたくないと思った。

「奏ちゃん、本当にカクテル詳しいね。これ見ただけで僕が作れる

物、判るんでしょ？」

「前に付き合ってた彼氏がね、一時期カクテル作るのにハマってて、あたしもちよっと覚えたの。」

グラスの中で氷が音を立てた。

「じゃあ問題です。ウォッカとオレンジジュースを混ぜる事を何と
言うでしょうか。」

「”ステア”する!」

「正解。じゃあこれプレゼント。」

と言って庄司君がステアしてくれたスクリュードライバーをあたし
に差し出してくれた。

「ありがと。でも変な感じ。いつも白シャツ着てお酒出してくれて
るのにな。」

庄司君は、今日は年相応に見えた。

ピンクのTシャツに細身のジーンズ。腕にはごつめの時計とプレス
レット。

乾いた喉を潤した。心がそわそわして、あたしは右手の指輪を意味
もなく、着けたり外したりした。

「奏ちゃん、何飲んでるの?」

懲りもせず又あたしは固まった。

ミホコさんが、あたしの右隣に並んで立っていた。

恐らく木下さんよりも身長は高い。そして全てが完璧な程のスタイ
ル。

小さな顔も、スラリと伸びた手足も、カウンターに軽く乗せている
そのしなやかな指も。

「これ何だっけ?」

あたしのグラスを覗き込んでミホコさんは聞いた。

「あ、スクリュードライバーです。」

「美味しい?あたしもそれにしようかな。」

庄司君がバーテンダーの顔で答える。

「美帆子さんはお止めになった方が良いですよ。オレンジテイスト
が良ければ、カシスオレンジお作りしましょうか?」

「奏ちゃん、お酒強いんだ?へえー意外!じゃあ庄司君に任せる。」

あとジンライム。」

ミホコさんはお酒が強くないんだ。
あたしはグラスを空けてしまった。

「・・・空腹で飲んじゃ駄目だって言ったたる。」
後ろから声がして振り返ると、江木ちゃんがお皿にチーズとクラッカーを用意してくれていた。

「はい・・・。」

あたしは叱られた子犬みたいにクラッカーをかじる。

「可愛いー！」

急に抱きすくめられて、あたしはクラッカーを落としてしまった。
良い香りがした。

ミホコさんがあたしの頭に頬ずりする。

「智志から、しっかり者って聞いてたけど、素で可愛いー！」
ソファに座る穂積さんが視界に入った。

どんな顔をしているのかは遠すぎて見えなかった。

ミホコさんは何時までも、あたしを離さなかった。

バルコニーで江木ちゃんと神谷さんがお肉を焼いて、庄司君はキッチンでお酒を作っていた。

あたしは美帆子さんの隣に座っていた。座らされていたと言った方が正しいかもしれない。

お酒が大分回ってるようで、あたしの腕に絡めた左腕を放してくれないのだ。

「奏ちゃん、エヴリイ読んら事あるう？」

「う、ごめんなさい……。未だ。」

「えーやだよー。読んれよー。奏ちゃんちに定期購読で送っちゃおーっと。」

「美帆子、止めるって。」

穂積さんが、向かいのソファから腰を上げた。

「良いじゃーん。奏ちゃんらってワーキングウーマンじゃねー。」

「はあ……。一応。」

美帆子さんの勢いに圧倒されて、あたしはお酒もお肉にも有りつけず、お腹が鳴った。

ぐーギョルギョル……

あたしは顔が赤くなるのが自分でも判った。

「す、すみません。」

美帆子さんからあたしを解放してくれたのは、桐生さんだった。

「奏ちゃん、あっちで食べといでよ。」

「あ、はい。」

あたしはお腹を押さえて、バルコニーへと出た。

バルコニーに出してしまうと、桐生さん達の声は聞こえてこなかった。あ、美帆子さんがソファに倒れてしまった。

……。本当にお酒弱いんだなあ。

多分、今ローテーブルに乗ってるグラスに半分程残ったカシスオレ

ンジは、最初の1杯目。

「大変だったね。」

神谷さんが同情の声を掛けてくれた。

「美帆子さん、本当に弱くて、お店来てもノンアルコールか専らウーロン茶の人なんだよね。」

江木ちゃんもあたしにお肉や野菜の乗ったお皿を突き出してきた。

「ありがと。」

あたしの嗅覚は刺激され、又お腹が鳴った。

無口な江木ちゃんが噴き出すように笑った。

神谷さんも笑って、あたしも笑い出してしまった。

庄司君がグラスを4つ、両手で器用に持ってバルコニーへとやって来た。

穂積さんが美帆子さんにタオルケットをかけてあげるのが見えた。

庄司君があたしに手渡したグラスは、見た目はただのソーダだった。鼻を近づけると、ライチの香りがほのかにした。

空腹のあたしに、酔いがあまり回らないよう軽めのものを用意してくれたようだ。

何時ものメンバー、何時もの時間に、あたしはやつと平常心を取り戻せた。

「ちよつとー庄司君、これ何入れたのよ?!」

神谷さんがグラスから口を離し、顔をしかめていた。

「奏ちゃん、問題。あれは何のカクテルだと思う?」

神谷さんのグラスの色は、トマト色。

「ブラッディメアリー?」

「正解! 佑香さん、タバスコ嫌いなんだよね。」

「最低ー!」

江木ちゃんも、自分に渡されたグラスを覗き込んだ。思わず、あたしもそれに倣った。

「庄司、ウイスキーと氷、頂戴。」

啞え煙草で桐生さんが、バルコニーに顔を出した。

「はい。」

庄司君が室内へと戻って行った。

「奏ちゃんは、本当にうちのスタッフと仲良いんだね。」

桐生さんは煙に目を細めた。

「良くして頂いてます。」

「・・・ふーん、真面目だねえ。庄司と付き合っちゃえば？」

桐生さんは突然にそんな事を言った。

キッチンからする動作音も一瞬、止まった。

桐生さんは庄司君の方を見て、更に続けた。

「なあ庄司、今、女居ないんだろ？」

この人は一体、どういう思考回路をしているんだろ・・・。

「居ませんけど、そういうノリは奏ちゃんに失礼ですよ、オーナー

？」

庄司君は桐生さんの発案をさらっと流した。

「へいへい。庄司も真面目だな。あ、ごめんね、奏ちゃん。俺ちよ

っと酔ってるみたい。」

どれが本当でどれが嘘なのか。

この人は読めない人だと思った。

あたしは思わず、神谷さんを見た。

神谷さんは別の所を見て、白けた顔をしてる。

きつと桐生さんは神谷さんにも、こういう態度をするんだろっ。

「お似合いじゃね？穂積？」

ソファに座る穂積さんにまで、その質問は及んだ。

「あ？ああ。」

あたしの鼓動が又早まるのを聞いた。

穂積さんと目が合った気がして、あたしは怖くなった。

「あ、あたしトイレ行ってくる。」

リビングに戻り、自分のバッグを持って洗面所に入った。

あたしは訳もなく手を洗いだした。

直ぐに戻るのも気が引けた。手持無沙汰になったあたしは、首に巻いたストールを巻き直そうと、それを一度外した。

「！」
鏡の向こうに、桐生さんが音もなく立っていた。

それは突然の出来事。

ストールを持ったあたしの右手を操り、桐生さんはあたしの口を塞いだ。

左手の自由も奪われた。

桐生さんの唇があたしの左の首筋をなぞった。

「んん。」

あたしの声はくぐもって音にさえならない。

目の前に恐怖が見えた。

そして、桐生さんの妙に長い舌があたしの頬も捕らえる。

恐怖に耐えられず、あたしは目を瞑った。

生暖かい舌が又あたしの首を這い、厭らしく音を立てた。

それも長い時間に思えた。

桐生さんは遊びに飽きてか、あたしの両手を放した。

あたしは、鏡の中の桐生さんを見た。

笑ってた。

この人・・・おかしいよ・・・。

「そういう顔もするんだー。」

あたしは玄関のドアに逃げ道を求めた。

その晩、神谷さんからメールが入った。

神谷さんに言える訳もない。

鏡に映った簡単には消すことの出来ない痕を眺めて、悔しくて涙が零れてきた。

行かなきゃ良かった。

行かなきゃ、美帆子さんに会う事も、神谷さんの愛する人を軽蔑する事もなかった。

あたし、何してんの・・・。

8

1時間程前、木下さんが営業開発部の事務員が二人ともおらず、手が足りないからとあたしが急遽代わりの事務員になる事になった。6階で仕事するのは初めてだった。

電話は引つ切り無しに鳴り、大きな声も飛び交うなど、活気がある。うちの会社の顔とも言える営業開発部と情報システム部、広報部混在のフロアだ。

正直、助かった。

お盆明けの今日、穂積さんは桐生さんのマンションから急に帰ったあたしに理由を尋ねたそうにしていた。

それから上手く逃れる事が出来た。

「青山さん、これお昼までに作っておいて。」

「青山さん、ここに電話して納期の確認。」

「青山さん、西東京の楠原さんのスケジュール聞いて。」
木下さんから容赦なく、仕事を頼まれた。

最初は敵視しての意地悪かとも思えたが、多忙でそんな事も考えられない程だった。

一段落がついたのは、定時を過ぎた18時頃だった。

「ふうー・・・。」

大きな溜め息が思わず出てしまった。

木下さんの視線を感じてあたしは慌てて、姿勢を正し口元を押さえた。

「お疲れ様、青山さん。助かったわ。」

「いえ、お疲れ様です。」

あたしは席を立った。

「貴方、営業事務の方が向いてるんじゃない？」

木下さんは書類とデスクトップを交互に見ながら言った。

あたしが返答に困っていると、もう一度「お疲れ様」と言った。

木下さんはお盆前のあたしのミスについてチクチク言うような事はなかった。

むしろ今日に至っては、普段総務部に居るあたしに仕事を任せてくれたと言って良かった。

木下さんに対する心象は良くなった。

仕事に熱心な人と一緒に仕事が出来るとて事は、やっぱり良いことだと思った。

一度総務部に顔を出してから帰ろうとすると、西野さんに丁度すれ違った。

「あー青山さん、お疲れー。下、大丈夫だった？」

「あ、はい。一応何とか。」

あたしは苦笑いをした。

「穂積さんが話あるって言ったよ。」

「・・・何だろ、あたし何かやつちやっただかな。」

「別に怒ってる風とか、そんなんじゃないかなかったけど。じゃお先。」

「はい。」

あたしは”どういう自分”を演出しようかと考えた。

7階に戻ると、穂積さんは自分の席に座っていなかった。

辺りを見回すと、社長室のブラインドの向こうに穂積さんを見つけた。

暫くその場で待ったが、話は終わりそうになかった。

あたしはホッとして、更衣室に向かった。

キャミの上にカーデを羽織る。ロッカーの小さな鏡でさえ、それを見つけるのは容易だった。

3日前に桐生さんに付けられた”痕”。

今でも薄らと色が残っている。制服のシャツを着ていれば全く問題ないが、ノーカラーだと隠しきれなかった。

あたしはストールを首に上手に巻きつけた。

無意識に首元を抑え、会社を後にする。

ロビーの自動ドアが開き、外に吐き出されたあたしを知った顔が待っていた。

「・・・庄司君。」

「どうしたの？」

「待ってたんだ。」

庄司君は制服ではなく、私服だった。

「お店は？」

庄司君はそれには答えなかった。

「ちよつと歩かない？」

「・・・うん。」

あたしと庄司君は、特に当てもなく歩き始めた。

この前の突然の帰宅の理由を聞かれるのだとあたしは身構えていたが、庄司君の口から出てきたのは全く別の話だった。

「P A U S A、辞めたんだ。」

「え?!」

「前々から、僕の腕を買ってくれてるお客さんが居てね。資金を出すから、そこでバーテンダーとしてやらないかって・・・。」

あたしの立ち止まる足に気づいて、庄司君は大通りの道から中に一本入った。

あたしもそれに倣う。

「オーナーには勿論話は通してある。池袋では佑香さんがあそこに立つ事になってるよ。」

「・・・わざわざ、それを言いに？」

「僕は奏ちゃんの連絡先、知らないからね。凄く鼻屑にしてくれたし、直接話しておきたかったんだ。」

急な事で、何て言っているのか・・・。

「そお・・・おめでどう、だよな。ごめんね何か急過ぎちゃって。言葉が出てこないや。」

悲しそうに庄司君は笑った。

「赤坂だから、なかなか来る事ないと思うけど、名刺渡しておくね。」

「うん、ありがとう。」

ジューズの自動販売機の明かりで、名刺を読み取る事が出来た。あたしが名刺から顔を上げると、未だ庄司君は悲しそうな顔をしていた。

「・・・オーナーに何かされた？」

核心を突く質問が、あたしに恐怖の記憶をもたらした。

両手で力強くストールを掴んだ。

あたしの表情が質問に答えたのだろう。庄司君は頭を振った。

悲しそうに見えたその訳は、あたしの答えを予測していたのだろう。

「・・・あは、だ、大丈夫。大したことされてない。本当。心配しないで。もう平気。」

「奏ちゃん。」

「本当だよ。だって神谷さんの付き合ってる人でしょ。冗談だと。」

「奏ちゃん。」

庄司君の声が、あたしを包んでしまった。

「ごめん。」

「・・・ごめんって・・・何で庄司君が。」

あたしは大通りに戻り、駅に向かって歩き出した。

「奏ちゃん！」

庄司君の足音があたしを追ってくる。

あたしは足を速めた。

「奏ちゃん！」

庄司君はあつと言う間にあたしを追い越して、立ちはだかった。

「もうPAUSAには行かないよね？」

勿論、行ける訳もない。

あたしは必死の庄司君の目から、逃げる事が出来なかった。

頷くだけで精一杯。

「・・・青山？」

庄司君の目があたしを通り越して、声の主を見据えた。

我に返つて、此処が会社の近くである事を認識する。

「庄司君、何してるんだ？」

靴音が近付いてきた。

庄司君が、あたしの左手を握り、穂積さんに向かってこう言った。

「デートですよ、穂積さん。」

あたしは振り向く事もせず、庄司君に身を任せる事にした。

あつたかいこの手が、今のあたしには必要。

夜の帳がおりても、あたし達は池袋の街を彷徨うように歩き続けていた。

手を放すタイミングを逃してしまった手は、未だずっと繋がったまま。

「・・・オーナーは面白おかしく生きたいと思ってる。」
雑音の中から庄司君の声が聞こえた。

「俺は好きな事やって死ぬんだって、知り合った時から言ってる人なんだ。」

あたしはストールを押さえた。

「オーナーは、僕をからかったんだよ。」

庄司君があたしから手は放した。そして振り返った。

「奏ちゃん。」

「・・・。」

開きかけた口を一度閉じて、又あの顔をして庄司君は言った。

「元気で。」

あたしは庄司君の背中を見送る事しか出来なかった。

9

「おはようございます、コーヒーお持ちしました。」

あたしは穂積さんの机にうさぎちゃんのカップを置いた。

「ありがとう。」

「・・・昨日、西野さんから穂積さんが探してるって聞いてたんですけど・・・何か？」

勝手に帰宅した上に、あの状況を見られていて苦しい質問だと思っ
た。

「ああ仕事を頼みたかったんだけど、間に合ったんだ。もう良いよ、
青山。」

「はい。失礼します。」

「これ社内便で各所に回しておいて、青山。」

「はい。」

穂積さんは自分の机の端に書類を置いた。

気のせいだろうか。今迄だったら、ちゃんと手渡ししてくれ
気がする……。

あたしは立ち上がり、それを取ろうとした。机の上でバランスを失
った書類が床へと落ちた。

同時に穂積さんも拾い上げようとする。

穂積さんは素早く上体を直した。結局、書類はあたしが拾った。

やっぱり気のせいじゃない。

昨日のあたしの対応に腹を立てているのだろうか。

上司に用があると言われて帰るのは、失礼だよね……。

あたしはこの前、仕事でミスをして反省をしたばかりなのに又一人
信用を失ってしまったのかもしれない。

……って言うか、穂積さんに用事があると聞いていて、帰ったあ
たしが今迄のあたしじゃない。

穂積さんを意識し出してから、あたしは穂積さんを頭の中から追
出そうとしてきた。

あの雨の日から。

内線が鳴った。

「はい、経理課です。」

「ああ芳野です。穂積君に来るように伝えて。」

「はい、かしこまりました。」

あたしは受話器を静かに置いて穂積さんに伝言を伝えた。

「穂積さん、社長が社長室でお待ちです。」

穂積さんはあたしを見ることなく立ち上がり、その足で社長室へと向かって行った。

あたしは唇を噛んだ。

帰りの更衣室で、着替えを済ますとあたしはオフィスの中に携帯を忘れていた事に気づいた。

取りに戻ると、総務部には穂積さん以外いなかった。

あたしの足音に穂積さんは顔を上げた。

「青山。」

「あ、あの携帯忘れて。直ぐ失礼しますので……。」
言い訳がましく、デスクの引き出しを引いた。

キーボードがカチャカチャと音を立てる。それが止まる。

「……庄司君と付き合ってるんだ？」

「え？……あ、いえ、そうじゃないんです。」

昨日は桐生さんの話の最中に、穂積さんがあたし達に気づいた。

穂積さんの友達でもある桐生さんの事をどうこう言える訳もなく、その場をやり過ぎたかっただけだ。

「ごめん、プライベートな事だった。帰って良いよ。」

……穂積さんは完全に誤解してる様子だった。

でも否定する必要もないけど……。

「美帆子さん、素敵な人ですね。キャリアウーマンだと思ってたから、あんなに可愛い感じの人は思ってたんです。」

この台詞、穂積さんを直視しては言えないあたし。

返答もなく、あたしは穂積さんに背中を向けたままオフィスを後にした。

後味悪い……。

ビルを出ると、大粒の雨が降り出した。

何だコレ……。

総務に置き傘があるけど、それを取りに行く自信は無い。

でも濡れて電車に乗る勇氣も無い。

もうちょっと待ってみようかな。

ビルのロビーにちょっとした休憩スペースが設けられている。そこで雨が小降りになるのを待つ事に決めた。

「青山さん？」

雨に濡れた木下さんが外出先から戻ったようだ。

「お疲れ様です。酷い雨ですね。」

「傘、ないの？会社行けば誰かが置いてる傘あるんじゃないの？」

「……小雨になったら駅までダッシュしようかなって……。」
無理な言い訳じゃないよね。

「そお。じゃあ。」

木下さんは素っ気なくEVへと行ってしまった。

ガラス張りのロビー。傘を持たず走ってる人が何人も居た。

もしかして、更衣室に誰かビニ傘置いてるかも、と思いついたあたりは、7階迄上がるうと立ち上がった。

待っているEVの扉が開き、人が吐き出され、その中に穂積さんの姿があった。

穂積さんもあたしに気づいた。

「青山……。」

後続の人に穂積さんは押され、あたしの体に軽くぶつかった。

「ごめん、大丈夫？青山。」

「あ、はい。」

「……傘、持ってないんでしょ？」

「え？」

「木下が、青山が此処に居るって。」

木下さんが？

穂積さんは持っていたビニ傘を一本、あたしに渡してくれた。
わざわざ？

「ありがとうございます。」

「・・・青山、雨女なの？」

銀座 コーヒーショップ 穂積さんのカーデ 一瞬の交錯

次々にキーワードが頭の中を駆け巡った。

「・・・ち、違います。じゃあ本当に失礼します。」

あたしは、走った。

穂積さんのあたしの名を呼ぶ声を反復していた。

”青山”

土曜日。部屋の掃除を徹底的にやった。

キッチンもトイレもお風呂も、ピカピカにした。

余計な事に支配されず、何も考えずにいたかった。

その疲労が、あたしの気分をスッキリさせてくれた。

狭いベランダに干してあったビニ傘を綺麗に畳んだ。

ソファの上に、穂積さんの黒のカーディガンが綺麗に折りたたんで置いてある。

もう半月近く、穂積さんの物があたしの家にある。

会社とは関係ない所で服を借り、それを会社で返すのには抵抗があった。

しかも大っぴらに返すのも、どうなんだろう。

そんな事を考えていたら、返しそびれてしまった。

穂積さんも特に催促はしてこない。

穂積さんもしかしたら、言いにくいのかも……。

そんな事を考えていたら、宅配便が届いた。

エヴリーの最新号だった。

差出人は勿論、美帆子さん。

あんまり上手とは言えない手書きのメモ付き。

奏ちゃん

元気？この前は酔っ払って、鬱陶しかったよね？（笑）

これに懲りずに今度はご飯でも食べよう。

約束の（覚えてたよー）エヴリー送るね。

穂積美帆子

微笑ましくて、メモを何度も読み返した。

美帆子さんの人柄が手に取るように解る。

駄目だよ、奏。

穂積さんは、駄目。

思考と行動は反比例して、あたしはカーデを抱き締めてソファで眠りに就いた。

翌日あたしは特に予定もなく、池袋に出た。

デパートで買う気もない服を見て、香水売り場で立ち止まった。

美帆子さんも良い香りの香水使ってたな。

多分コレという香水をテスター紙に吹き付けた。

やっぱりコレだ。

あたしも香水つけようかなー。

女性向けの香水を幾つか、試してみた。

どれも良い香りだけど、どれが自分に合うのかは正直、判らなかつた。

「あ。」

あたしは穂積さんの香水を見つけた。

暫く眺めて迷った挙句、キャッシュヤーに向かった。

「袋は要らない」とシールの貼られたミニチュアの香水をバッグに仕舞う。

浮足立つ自分を抑えきれない。

バッグの中が気になって、前を見ていなかったあたしは誰かとぶつかった。

あたしはバッグを手離してしまい、中身が床に散らばった。

「す、すみません！」

あたしは謝りながら、その誰かに目をやった。

その男の人は、先ずあたしが散らかした床の上の物を拾ってくれていた。

財布に携帯、黒い小さな小箱。

あたしも慌てて、しゃがみ込む。目が合った。

あたしの、持ち物を受け取ろうと出した手が止まる。

「穂積さん・・・何で。」

「青山。」

あたしは穂積さんの手の中の、小箱を真つ先に取り上げた。バッグに押し込む。

絶対見たよね。

気づいた？

「ごめんなさい、本当に。」

あたしは財布と携帯も取るうとした。

穂積さんはあたしにそれを渡してから立ち上がった。あたしも立つたが合わす顔が無かった。

沈黙を見かねて穂積さんが口を開いた。

「買い物？」

「あ、はい。」

「もう帰るの？」

「あ、はい。」

「この後、時間ある？」

「あ、はい。」

あ……。今何て言ったの、穂積さん。

「そお、じゃあ、お茶しよう。おいで、青山。」

穂積さんの言葉は、絶対に聞こえた。

デパートの3階のティールームで、二人はテーブルを挟んで向かい合わせに座った。

足元にバッグを入れるバスケットがあったが、あたしは膝の上でバッグを抱えていた。

お店の人が紅茶を二つ運んできた。

効きすぎる冷房が、あたしの上がりきつた体温を下げつつあった。穂積さんも考えあぐねているようだった。

あたしの持ってたあの香水を見たからに違いない。

「穂積さんは今日はお買い物ですか？」

あたしが切り出した。

「ちよつと、やり残した仕事があつて来たついでに……。傘を見

てたんだ。」

傘。
穂積さんがあたしに傘を持ってきてくれた事が思い返される。無理。こんな状況で穂積さんと対面してるなんて……。あたしは固形シュガーをスプーンに乗せ、カップの中に沈めた。熱い紅茶の中で、ゆっくりと形を溶かし、目には見えなくなった。あたしはティースプーンを必要以上にカップの中で泳がせた。

解ければ良いな。あたしの気持ちも、誰にも見られなければ良い。

「さっきの香水・・・どうするの？」

あたしはカップを持つ手を止めた。

穂積さんは、テーブルの下に目をやっていた。

「ど、どおって・・・。」

どう答えれば差し障りがなく話が済むのか、頭の中を回転させる。スパイラルな状態だ。あたしは思考力も言葉も失った。

カチャ。

穂積さんがカップに触れる音がする。

「・・・傘を見てたんだ。」

あたしは穂積さんを見上げた。

カップが空中で行き先を探している。

「青山に似合う傘を見た。」

青山に似合う？あたしに？

「買おうかどうかどうしようか散々迷って止めた。」

「・・・・・・・・。」

「俺がそんな事していい立場じゃない、そうやって思い留めた。」
穂積さんがソーサーにカップを戻した。

「・・・でもあれ見たらさ・・・俺期待するよ？」

大きな右手で口元を隠して、あたしからは視線を避けた穂積さん。
”期待”って？

・・・嘘。

あたしの心臓は強く跳ねて、底知れぬ感情が湧き上がって、目頭が熱くなるのを感じずにはいられなかった。本当なの？今、穂積さんが言った言葉？

「何か言って？青山。」

縋るような甘えるようなその表情。今あたしだけに向けられてる。

・・・本当じゃなくても良い。

嘘だって良いよ。

あたしの名前を呼んで。

「好きなの。」

あたしは涙で霞んだその先に香水の小箱を見た。

「穂積さんが。」

「・・・ハアー・・・やべー今、俺の方見ないで。」

顔を上げてしまった。

穂積さんは顔を赤くして、腕を組み何処か全然違う場所を見ていた。あたしはちよつと笑った。

今あたしの目の前に居るのは上司の穂積課長じゃなくて、ただの、あたしが恋をした男の人に過ぎない。

”言霊”なのかな。

『スキ』と言葉にしたら、少し楽になった。

その感情はさも昔からあったかのように、あたしの中の当たり前の気持ちだった気さえしてきた。

10

カップの中で冷めてしまった紅茶を飲み干すのを躊躇った。

これを空けてしまえば、この時間が終わってしまう。

そう思うとカップを手にする事が出来なかった。

穂積さんが時計を見た。顔を上げる。

「・・・そんな顔しないでよ、青山。」

「え？」

「この後どっか食事にも行く？」

「良いんですか？」

あたしは上気した。

穂積さんが笑う。

「青山は、思った事が結構顔に出るんだな。」

あたし達はデパートを出た。

見慣れた街に、あたしは急に怖くなった。

穂積さんから距離を置いて歩いた。

「青山？」

隣に居ないあたしに振り向く。

「・・・誰かに見られたら・・・。」

「俺は仕事で池袋に来た。青山は池袋で買い物。偶然会ったから食事をした。今日はそれで良いんじゃない？」

「・・・はい。」

良いのかな。変な噂が立つたら、穂積さんの立場が・・・。

「そういう挙動不審は、余計怪しまれる。」

穂積さんがあたしの横に立って、あたしの顔を覗き込んだ。

「・・・ですね。」

穂積さんがそう言ってるんだもん。そうだよ。

「明日仕事だし、俺も車だから、ちゃんと食事にしようか。」

「はい。」

駅から近いイタリアンのお店であたし達はご飯を食べた。

あたしがお店に入って、店内を見回したのは言うまでもない。

それにつけかえ穂積さんは凄く落ち着いて、昨日までのあたしに対する態度とそう変わりはない様だった。

・・・慣れてるのかな、こういう事。

会社の女の子と付き合った事がないだけで、彼女が居なかった訳じ

やないんだろうな。

ってあたし、何でこんな日にもう下げる事考えちゃうんだろう……。

「……百面相だね、青山。」

「え?!」

「何か想像出来るけど……かみさん以外の女の人と二人で食事した事はあるよ、正直言っとね。」

やっぱり……。

「信じてくれないかもしれないけど……今日ほど、浮かれてる自分にちよつと吃驚してるよ。」

穂積さんが小さく笑った。

自然と、あたしも笑みがこぼれた。

あたしはフオークにスパゲッティを絡めた。

「食べ終わったら、青山の携帯教えて?」

「……はい!」

ここから、あたし達は始まる。

背負うべきものは沢山ある気がした……。

昨日の夜はあんまり眠れなかった。

デパートで穂積さんと会った時から、お茶、ご飯、駅で別れる迄を擦り切れる位思い返していた。

携帯の画面に表示された『穂積智志』の名前と番号。

会社用の番号とは違っていた。

穂積さんの名前をあたしの携帯に登録してあるのは、不自然な気がして名前の変更をした。

『うさぎ』にした。

自分で笑った。穂積さんに話したら、何て言うかな。

朝の満員電車も気にならない程、あたしは別世界に居た。

改札を出て構内を歩いていると、西野さんに会った。

「おはよう、青山さん。」

「あ、おはようございますっ!」

「・・・何か月曜なのにテンション高くない?」

「・・・もう直ぐお給料日なんで・・・えへ?」

「あ、そうだね。お給料って言えさ、此処だけの話なんだけど・・・」

人事課の西野さんの”此処だけの話”は、少し驚きだった。

売上が落ちてきた新宿の営業所が閉所するらしい。

営業マンを営業開発と、横浜、西東京の営業所に分けると言う案があったが、使えない営業は要らないと木下さんが突っ撥ね、新宿の営業マン数名がリストラになりそうだという話だった。

木下さんの態度に新宿の淀川所長がご立腹になり辞めるって言いだして、正社員の事務の子も新宿以外なら通えませんかかって辞めるらしい。

「だから今、人事の上の人とか忙しそうだよ。うちの会社さ、9月の異動つてないのが普通なんだけど、今年はやるみたい。」

「・・・木下さんも凄い事言いますね？」

「そうなんだよー。淀川所長つてさ、今の社長と同期で入った人でさ、木下さんも今回ばっかはヤバイんじゃないの？つて金ちゃんとも話してたんだよね。」

制服に着替え、オフィスに入ると穂積さんが何時ものようにパソコンの前で黙々と仕事をしていた。

「おはようございます。」

至って普通の部下のテンションで挨拶をする。

穂積さんはあたしに顔を向けて「おはよう」とだけ言った。

あたしはそれから給湯室に向かう。

ハァー穂積さんは普通だなー・・・緊張してるのはあたしだけか・・・。

「あ、金田さんおはようございます。」

「おはよー。今日あたしやるから良いよー。今日早起きしてお弁当作っちゃってー何時もより早く会社来たんだよね。」

「あ、じゃあ一緒にお弁当食べましょうよ。」

「勿論。」

うさぎちゃんのカップが、どうしてもクローズアップされる。

廊下から大きな足音が聞こえてきた。

振り返ると西野さんが凄い形相をしていた。

「木下さん、船橋に異動つてー!!」

「は?！」

「今、木下さんがミーティングルームから出てきて怒号上げて6階に下りてったの!」船橋に行くぐらいなら、こんな会社辞めますよ!」つてー!!」

「え？で、どうすんの？社長達は、淀川所長取って木下さん切るとして事？！」

「そついう事でしょうよ。」

西野さんと金田さんの会話に、あたしも発言した。

「・・・穂積さんは木下さんの事、止めないんですかね？」

「ああ・・・穂積さんかあ。穂積さんもこれまで色々木下さんの事庇ってきたからねえ・・・。今回はどうかな。」

「辞める事を止めたとしても、木下さんの船橋行きに変わりは無いからね、きつと。それは木下さんのプライドが許さないんじゃないの？」

8月30日、社内メールで大々的な異動が発表された。

9月30日を以て新宿営業所を閉所とす。それに係わる下記の者の配置転換が行われますので、お知らせ致します。

淀川晃一 新橋営業所長に就任（前 新宿営業所長）

水嶋 温 本社営業開発部長（前 新橋営業所長）

海藤博次 本社営業開発部主任（前 本社営業開発部長）

佐々木裕也 本社営業開発部（前 新宿営業所）

浅川竜彦 本社営業開発部（前 新宿営業所）

野宮小太郎 横浜営業所（前 新宿営業所）

斉藤慶介 西東京営業所（前 新宿営業所）

木下さんは本当に会社に辞表を出してしまった。
穂積さんにメールを送信した。

”木下の事については、色々思う事はある。”

それが返信だった。

9月を迎え、会社はバタバタとしていた。

営業所閉所、異動と、データの変更をしたり顧客管理の変更その他諸々。

内線が鳴り、受話器を上げる。

「はい経理課です。」

「水嶋です。穂積さん居ます？」

「はい、お待ちください。」

穂積さんに代わる。砕けた口調で話し出す穂積さん。

水嶋さんとは同期で本当に仲が良いらしい。

西野さんが言ってた。

水嶋さんのこれまでの尽力とか勿論あるけど、今回の営業開発部の部長就任は穂積さんの口添えが絶対あった筈だつて。

「俺に言うなつて！・・・解った！解った、後で届けてもらうからえ？それと？持って来いよ、んなもん！」

電話を切った後、穂積さんは脱力してた。

「・・・青山、悪いんだけど、ここにあるもの一式揃えて水嶋んとこに持っていつてくれない？」

結局、水嶋さんの言い成りになつてる穂積さんが可愛かった。

「はい、お持ちします。」

穂積さんはもう一度メモに走り書きをしてから、あたしに手渡した。メモ紙の下の方に『水嶋、了承済み』と大きく丸で困ってあった。

その他には、電卓やボールペン、マウスパッドと至って極普通の事務用品名が記されていて、そこだけ話が繋がっていない。

了承・・・。

穂積さんとあたしの事を知ってるという意味？

あたしは穂積さんの方を見た。

穂積さんもあたしの疑問に答えるように、こう言った。

「そういう事。青山。」
あたしは一瞬戸惑った。
二人で、守りあっていく筈の秘密をこんな簡単に人に、話してしまえるものなの？

仕事の合間に水嶋さんの事務用品を揃え、お昼近くになって6階へと下りて行った。

「・・・お疲れ様です。」
木下さんが在籍していた時とは雰囲気は違っていった。

水嶋さんを中心に、その場でミーティングをしている様だった。

「こんなに一ヶ月で上げるんですか？」

「新宿で持ってたお客が、ここにも来てるんだよ？やるんだよ。」

「水嶋君、新宿から来たばかりの佐々木と浅川も居るんだから、こつちのやり方も勉強してもらわ・・・。」

「海藤主任、自分も新橋からの異動です。その自分が長になったんですから、今迄のやり方に固執しないで頂けますか。」

海藤さんは何も言えなくなってしまった。

「・・・32歳の若さで営業開発部の部長になっただけの事はあるんだな・・・。」

「ではミーティング終わり。13時から佐々木と浅川は俺と面談ね。」

あたしに気づいた水嶋さんは片手を挙げた。

「持ってきてくれた？青山さん。」

あたしは水嶋さんの机に歩み寄った。

「あーありがとありがと。俺ね、ゲルインキのボールペンじゃないと駄目なんだよね。」

「水嶋さん、事務用品の在庫は7階のキャビネットに納められてて、必要ならそこから勝手に取って行って下さい。」

「あ、そうなんだ。了解です。じゃ、お近づきの印にランチでも行こうか、青山さん。」

「は？え？え？」

あれよあれよで水嶋さんはあたしの肩を抱き、EVへと乗り込んでしまった。

時計の針は正午5分前だった。

「困ります！」

「たまには良いんじゃないの？13時より前に仕事始めれば問題ないでしょ？」

「……。」

仕事の顔とプライベートの顔は丸つきり違うタイプの様だ。

1階のロビーへと下りる。

「青山さん、一つ言っておきたいんだけど、あいつは軽い男じゃないよ。」

あたしは立ち止まる。

「君達がこれからやるうとする事は簡単な事じゃない。」

水嶋さんが振り返った。

「昨日の夜わざわざ家に来て、君との事を言いに来たんだよ。……これからの事に、俺が必ず必要な駒だと思っよ。」

穂積さんが、水嶋さんに……。

「……何があっても、あいつを信じてやって欲しい。」

胸が苦しくなつて、涙が零れ落ちそうになった。

EVから続々と人が降りてくる。

「青山さん、俺蕎麦好きなんだよね。何処か美味しいところ知ってる？」

あたしは水嶋さんの隣に駆け寄った。

水嶋さんにしか聞こえない声で、あたしは誓って言った。

「信じます。」

9月も中旬を過ぎると、夜の空気が冷たくなった気がした。あたしはベランダから洗濯物を取り込み、ソファの上で綺麗に畳んでいた。

あたしが会社から帰宅したこの時間に、大抵穂積さんからのメールが届く。

土日にとっか行けるとか、そんな普通な事が出来ないあたし達を繋ぐのは、この端末。

「・・・あれ？」

あたしは携帯を確認する。電波も大丈夫だし、時間も18時半。メールが来ない。

今日も帰り際、社長室に呼ばれてたから、きつと忙しいんだろう。営業開発の売上が思ったより鈍いようだった。穂積さんが最近よく難しい顔をしてる。

・・・愚痴でも何でも良いから、話して欲しいのにな。

メールも電話もない金曜の夜。・・・もうすぐ明日になろうとしてる。

こんな事は初めてだった。

急に不安が襲ってきた。もしかして、あたしとの事が誰かにバレたとか・・・。

焦燥感を抑えきれず、あたしは6畳の部屋を右往左往した。

そんな時に携帯が震えた。

穂積さんからの電話だった。

「も、もしもし?!」

『・・・青山?』

「は、はい。」

『今から青山んち行っていい?』

「・・・え?!うち?」

穂積さんから返答は無い。

パジャマの自分を確認した。

「い、良いですけど、何時に。」

『良かった。』

今度はドアをノックする音が耳に届いた。

「え?!」

まさか。

あたしは、小走りにドアに近づきドアスコップを覗いた。

誰の姿もなく、渡り廊下の壁が見えるだけだった。

携帯を又耳に当てる。

「穂積さん?」

通話終了の音が聞こえてきた。

あたしはドアを押し開ける事を決め、解錠する。

ドアを開け、左側に人影を確認する。

穂積さんが疲れた顔で、でも少し笑った顔を見せた。

あたしは此処にいる穂積さんを見てもなお、今ここに起きてる事が半信半疑で仕方なかった。

穂積さんがあたしんちに居るなんて・・・。

「お邪魔します。」

そう言つて穂積さんは靴を脱いだ。

「あ、はい。」

穂積さんの脱いだ靴を履きやすいように並べ、あたしも穂積さんに続いた。

煙草とお酒の匂いがした。

誰と一緒にだったのかな。

「水嶋と飲んでたんだ。」

「え?」

穂積さんがソファに腰を下ろした。携帯を上着の内ポケットに仕舞

い込む。

「今、誰と飲んだのかなって思わなかった？」

「お、思いました。だから吃驚して……。」

穂積さんは笑った。

「お水、飲みますか？」

「うん。」

あたしは小さな冷蔵庫を開けてペットボトルを出し、コップに注いだ。

自分の手を見て、パジャマだった事を思い出す。しかも素っぴん。

あたしはローテーブルにコップを置き、そそくさとクローゼットからパーカーを取り出し羽織った。

「ごめんね、もう寝るとこだった？てか寝てた？」

「寝てない、です。何かDVDでも観ようかと思ってたくらいで……。」

「青山はどういうの観るの？」

あたしはテレビの下のラックから、一本取って穂積さんに見せた。

「へえーこういうの観るんだあ。」

「主人公がダメダメなんですけど、最後には仲間と勇敢に戦うんですよ！プライムってのが又格好良いメカで……。」

穂積さんは頷きながら、あたしの話聞いてくれてた。

「……ごめんなさい。こんな話、面白くないですよね。」

「何で？俺、青山の事知りたいよ？」

時々、穂積さんはさらっと、こっちが恥ずかしくなるような事を言っただけ。

「見ようか、これ。」

スーツの上着を脱いだ穂積さんに、あたしはあの黒のカーディガンを差し出した。

「……ああ。」

あたし達はソファに並んで座って、テレビの音量を微妙に下げてD

V D観賞を始めた。

不思議。穂積さんとこんな時間を過ごせるなんて……。

……あたしの家に来るなんて、危険な事だよね。

何かあったのかな。何か。

画像が目映るだけで、内容は頭に入ってこない。

あたしは穂積さんを見た。穂積さんがあたしを見てた。

デジャヴ……。

そうだ、銀座のコーヒショップで会った時に、こんな事があったんだ。

「……あの時、青山への気持ちを確信したんだ。」

確信……？

「面接で会ったって言ったでしょ？それから印象に残ってて、一緒に仕事したりして勝手に意識して……。」

穂積さんが観てもいないテレビ画面を見た。

「あんな偶然なかなか無いと思うよ？あんな広い街でさ、急な雨で、俺が居た店の前に青山が雨宿りしに来るなんて。」

「……うん、ですよね……。」

奇跡のような偶然だったと思う。

「俺、本読んでたの、覚えてる？青山。」

「覚えてますよ。で、あたしはカップで手をあつたためたんです。」

「……何て言ってるのか。それが当り前の時間みたいに思えたの、俺が居る隣に青山が座ってる。」

「あ、あたしもです！心地良いつて言うか、何も話さなくても繋がってるみたい……。」

穂積さんがあたしを引き寄せて抱き締めた。

あたしも小さな体で、穂積さんを包んだ。だって、そうするべきだと思っただから。

11

唇が触れただけのキスを交わして、あたし達はロフトの上の小さな布団に入った。

隣に体温がある。

それだけで、安心して眠りに就ける。あたしは穂積さんの左腕に掴まるような形で夢の中へと落ちて行った。

朝、小鳥の囀りで目が覚めた。目を開けると、そこに穂積さんが居た。

左手で頭を支え、あたしを覗き込むようにしていた。

「いつから・・・？」

「大分、前かな。」

穂積さんの右手があたしの髪に触れた。

「・・・青山・・・今、会社の事で色々あつて頭を悩ませてる。木下の事も・・・。」

「はい。」

「けど今は話せる状況にない。だから、俺が話をするまで不安になるかもしれないけど、待っててくれる？」

あたしは頷いた。

聞き訳の良い女を演じるつもりじゃない。

穂積さんがあたしに、待ってて欲しいと言うから、あたしは待つだけ。

「経理の青山です。売上データ送って貰えますか？」

いつもの作業をして、日々を過ごした。

各所から上がってくる領収書の整理をする。

あれ、開発がない。内線をダイヤルする。

「もしもし経理課の青山です。あれ、吉岡さんは……。」

軽い調子の水嶋さんの声が返ってきた。

『青山さん。吉岡なら、席外してるけど、何？』

「開発の今月の領収書頂きたいんですけど……。」

『あー。俺がハンコ押さなきゃいけない奴？』

「そうです。」

『ごめん、俺の机。今押しとくから、ちょっとしたら取りに来

てくれる？』

「はい。」

今日も穂積さんは社長室と自分の席の往來を繰り返していた。

一日一回はメールをくれた。

それは他愛もないメールだけど、忙しい中でもあたしを忘れずにあたしの為のメールを打ってくれた、それが愛おしく思えた。

10月になって、夜が透明感を増して木の葉がアスファルトに舞った。

「あつたかいの食べたい、俺。」

あたしは水嶋さんに誘われて、穂積さんと3人で居酒屋に来ていた。

「でもビールなんですな。」

空かさず突っ込みを入れてしまうあたし。

水嶋さんと居ると全てが笑いの方向へと行ってしまふ……。

あたしは穂積さんのお猪口に熱燗を注いだ。手酌しようとする穂積さんが啜え煙草をしたまま、あたしのお猪口に徳利を傾けた。

あたしは軽く頭を下げた。

「お前ちゃんと食べてんの？何か痩せない？」

「あんまり食べてない気がする。」

確かに顔が少しほっそりした。家で美帆子さん、ご飯作ってないのかな……。

「体が資本！って事で俺、焼き鳥盛り合わせとお薦めサラダとお新香ね、お姉さん。青山さんは？」

「あたしは……エイヒレ。」

穂積さんが笑った。

「相変わらずチヨイスが渋い。」

「酒、強いんだって？前に庄司君が言ってたよな？」

水嶋さんが穂積さんに問いかけた。

庄司君……。どうしてるのかな。P A U S Aにも行ってない。

神谷さんからのメールも返信しないせいか、もう来なくなってしまう。つた。

「俺だろ？青山が酒強いつて言ったの、水嶋。」

「……そうだったと思う。」

水嶋さんはあたしの方を向いて笑顔を作った。

この二人本当に仲良いんだ。思わずあたしも顔が綻んだ。

穂積さんとこんなにゆっくり話が出るのも、お酒と一緒に飲むのも久しぶり。

運ばれてきたサラダを適当にお皿に分け、配膳する。

「今日は二人に先に話しておきたいことがあるんだ。」

あたしは箸を置いた。

「……水嶋にはちょっとだけ話してた事だけど、本決まりになった。11月1日付で辞令が出る。」

辞令？

「総務部長の岩根さんを横領の罪で告訴する。」

「横領？」

あたしは声にして聞き返してしまった。

水嶋さんが

「決まったんだな。」

と言った。穂積さんが頷いてから、あたしを見た。

「俺が新しい総務部長に就任する事になった。」

総務部長？

「岩根さん、全部認めたの？」

「社長と副社長が雁首揃えて、岩根さんちに行つたんだつてよ。」

「家に？」

「そう。奥さんも同席させて。で、こっちが揃えた書類とか出して、やったのかつて聞いたら、泣きながらやりましたつて……。」

「お前の前の経理課長とか気付かなかつたの、穂積？」

「前の課長が辞めて、俺が経理と人事の兼任やり始めた時から、ちよこちよこやつてたらしい。兼任だからチェックが甘くなると踏んでたんだろ。……実際甘かつたし……。」

放心状態。

横領とかつて、そんなのテレビの中でしか聞いた事ない言葉だった。

「どれくらい？」

「3年間で500万近いんじゃない？」

「……岩根さんつて、相当長く総務居る人でしょ？丸く収まんなかつたの？」

「小さい会社なら良いけど、うちは親族以外の株主の居る一応中堅企業なんでね。ちゃんとやりますつてとこ、見せないといけないみたいだよ？」

「裁判とか起こす方が面倒じゃねー？500万だつたら何とか返せるんじゃないの？」

穂積さんが煙草を揉み消しながら首を振った。

「奥さんが株で失敗、子供の私大の学費。自分の給料で賄いきれないから、会社の金に手付けたんでしょ。今の岩根さんに返済能力は無いよ。」

「は……そんな事が身近で起こるとはね。……青山さん大丈夫？」

あたしは名前を呼ばれて、現実には引き戻された。
そんな事があつたなんて……。

「お前が部長ね……。功労賞つてどこか？」

あたしは水嶋さんを睨んだ。

「水嶋さん、功労つてどういう事ですか！穂積さんがどんな思いでいると思つんですか?!」

一斉に視線を浴びた気がして、あたしは声のトーンを少し落とした。
「総務と一緒に仕事してる人を疑うなんて、誰だつてやりたくないじゃないですか。」

「……うん、そうだ、ごめん。穂積。言葉を間違えた。」

「いや……。青山が言ってくれたから救われたよ……。」

穂積さんはお猪口に手を掛けて、そう言った。

「正直しんどかつたんだ。4月に専任になつて金の流れがおかしいと思つて調べ始めて、岩根部長の名前が浮上して……。調べれば調べるほど疑う余地も無くなつた。正義を語るつもりはないけど、見過ごすのも出来なかつたんだ。」

「……お疲れつていふのは未だ早いんだろうな。」

「そうだな。」

あたしは、徳利からお酒を注いだ。

「又忙しくなる。」

穂積さんが真つ直ぐにそう言った。

「気をつけて帰れよ。」

居酒屋を出て、水嶋さんは駅へと向かつた。

穂積さんとあたしは並んで歩きだした。

「この後どっか行く？」

穂積さんが聞いてきた。この居酒屋の近くにPAUSAがある事に二人は気づいた。

「……庄司君、店辞めたんだつてね？」

「……前に聞きました。」

「赤坂のお店には行ったりした？」

あたしは首を振った。穂積さんは安堵の色を見せた。

「庄司君のところには行かないで欲しい。」

「え？」

「何の障害もない恋愛が出来る庄司君とは会って欲しくないんだ。」

又穂積さんはさらつと言った。

あたしは気恥ずかしさを隠すように、それを茶化そうとした。

「嫉妬やきもちですかあ？」

あたしは笑って穂積さんを見上げた。穂積さんは怖いぐらいの真剣な眼差しをあたしに向けていた。

「いけない？俺が庄司君に嫉妬すること？」

「嫉妬やきもちって……。」

穂積さんはあたしの頬を手でなぞった。

あたしを動けなくしてしまふ魔法の手。

誰が見てるかも分からないこの街で、あたし達は長い長いキスをした。

11月にメールの辞令があり、岩根部長の件も人事部の辺りからちよつとずつ情報漏洩が始まった。

それからが、酷い毎日の始まりだった。

朝何時ものように給湯室に向かうと西野さんと金田さんがコーヒを用意していた。

「おはようございます。」

変わらぬ挨拶をするあたしに対して二人の表情は固かった。

「・・・青山さんも、岩根部長の事、穂積さんと調べてたの？」

「え？」

「だとしたら・・・穂積さんの味方って事よね？」

「味方って・・・あたしもこの前のメールで知って吃驚したんですけど・・・。」

穂積さんから、そう口止めされていた。

「そっか。なら良いんだけど。ちよつと穂積さん、やりすぎじゃない？って殆どの人言ってるんだよね。」

「やりすぎ？」

西野さんと金田さんが目を合わせる。

「だって今迄一緒に仕事してきた部長をさ、蹴落とした訳でしょ？！それで自分が取って代わって総務部長じゃ、厭らしいじゃんね？」

「ねえ?!」

・・・蹴落としたって・・・あたしは両手を強く強く握り締めた。

「社長にチクるんじゃないかってさ、先ず岩根部長に言ってる何とか丸く収めるべきだったんじゃないの？」

「そうそう、そこまで出せたいのかーっつーの!」

「ちよ」

後ろで壁をノックする音と共に声がした。

「おはよー。社長達コーヒー待つてるんじゃないの？」

西野さんと金田さんがヤバイって顔をして、給湯室を後にした。

「・・・よく堪えたね。青山さん。」

「水嶋さん・・・。」

水嶋さんの顔を見たら、あたしは苦い思いを思いつきり表情に出した。

「あたし・・・悔しい・・・。何であんな掌返すような事・・・。」

「残念ながら世の中、正しい事をした奴を、全ての人間が評価する訳じゃない。」

それが又悔しい。

穂積さんがどんな思いでいるかも知らないくせに、その時その時だけで批評をする。

「真面目にやってる事を、どうして認めないんですか！」

あたしは、目にいっぱい涙を溜めていた。

会社で泣くのははしないと、社会人になる前から決めていた。女が仕事場で涙を流すのはズルイと思ったからだ。

「・・・青山さん。君はここで賢い振舞いをしなくちゃいけない。

君がもし、穂積の味方になって、さっきの彼女たちを敵に回したとしよう。総務部の女性は君達3人だけだ。どれだけ仕事やりにくくなるか知れない。しかも、それに耐える君を、穂積はどんな思いで見守ると思う？」

「・・・。」

「穂積が又、苦しむだけだよ。前に言ったよね。これからの君達に俺は必要な駒だつて。」

水嶋さんはあたしの肩を優しく2回叩いた。

「今は耐える。とにかく仕事の事だけ考えろ。それでも今みたいに嫌な思いしたら俺に言つて？その件に関しては俺が引き受けるから。俺は、君達の味方だよ。」

ズルイと思つたけど、涙は零れてしまった。

そんな優しい事を言われたら、堰き止めてはおけない程のいっぱい

の気持ちが溢れ出てしまった。

・・・穂積さんは色んな事を見据えて、あたしの何歩も先を歩いているのかもしれない。

経理の仕事がやりにくくなったのは確かだった。

ある営業所は、週毎に送ってくる筈の経費の領収書を月末近くになつて送つてきたり、売上データの催促をすると

「すみません、うちは仕事遅くてー。」

と嫌味を言う。又それを言うのが、営業所長なのだ。

穂積さんは、総務部全体を見る立場になつたので殆ど、経理の仕事はしなくなつた。

山本さんとあたしが定時を過ぎて、何とかこなしていると言つた状態だった。

西野さんも金田さんも経理の仕事を手伝つてはくれない。

17時半を過ぎると、外は真つ暗だった。

「・・・はあー・・・終わんねー・・・。青山さん、どう?」

「今やつと、領収書の整理が終わつたんで、入力です・・・山本さんは?」

「これから入力して、試算表出すとこ・・・。何で俺らだけ、こんな目に合わねーといけねーんだよ、つたく。穂積さん、今日接待だつてよ!」

総務部長になつてから、社長や副社長、常務なんかと何処かの会社の接待に行く回数が増えていた。

あたしは、山本さんのこの愚痴には軽く付き合う事に決めている。

穂積さんの為だと、あたしは言い聞かせる。

水嶋さんの言つていた通り、あたしの立場が劣勢になると穂積さんが悩みの種を抱えるだけだ。

穂積さんのやつた事は間違つてなかつたと、あたしは思うし、時間がかかつてても他の人にも納得して欲しい。

「おーお疲れー。山ちゃん、青山さん。」

「水嶋さん、どうしたんスか？」

「営業開発の奴らと飲みに行つてただけど、会社に携帯忘れてたの気づいて中抜けー、したら7階電気点いてたから、寄つてみた。」

「飲みつスかー、良いつスねー。俺久しく飲んでないつスよお。」

「何だよ毎日残業してんの？」

「そうなんですよー、なあ青山さん？」

「はあ。」

「穂積知つてんの？」

「さあ、もう俺ら関係ないみたいな調子ですよ。社長付きみたいになつてますから、今。」

「おー今の穂積に俺から言つとくよ、山ちゃん。」

「・・・やばいつス。勘弁して下さい！」

「それつて今日やらないと駄目なの？」

「来週締めがあつて給与計算もあるんで、出来れば今日でこれ終わりたいんですよ。」

「青山さんの方も？」

「はい。」

水嶋さんが穂積さんが座つていた椅子に腰を下ろした。

「穂積一人居ないだけで、二人の負担がかなり変わったつて事？」

「俺はそうですけど。青山さんの方は西野とかが全然手伝わなくなつたんで、青山さん未だ知らない仕事もあるのに相当忙しくなつたと思います。」

「・・・ああ青山さんつて、未だ一年経つてなかつたんだよな。錯覚するよ。知らない仕事はどうしてんの？」

「前の見て確認してから、山本さんにも確認して、それでも解からない時は穂積さんに社内メールとかで聞きます。」

「・・・誰か此処に回せないの？」

「誰も来たくないでしょ、今は。」

山本さんが言った。

あたしは入力を始めた。

山本さんもそこで話を切り上げた。

「こんなの見て、じゃお疲れって言えないんで、何か手伝うけど、俺が出来ることある？」

「・・・二人とも入力なんで、大丈夫です。後は何とかあります。」
山本さんが水嶋さんの申し出をやりわり断った。水嶋さんも納得した様だったが、帰りづらそうだった。

「・・・じゃあさ、終わったら呼んで？俺6階で、仕事してるから3人でタクシーで帰っちゃおうぜ。俺が小口申請すれば角も立たないでしょ？」

そう笑いながら、水嶋さんは6階へと下りて行った。

「じゃあやりますか。」

「はい。」

それからあたし達二人は経理ソフトへの入力を黙々とこなした。キーボードの音だけがフロアに響いていた。

入力が終わって、時計を見たら21時近かった。

「青山さん着替えて6階に行きなよ。俺ももう直ぐで終わる。」

「あ、はい。解りましたー。」

山本さんより先にオフィスを後に着替えを済ませると、営業開発部に向かった。

「お疲れ様です・・・。本当に仕事してた・・・。」

「青山さん、もしかして寝てると思ってたんじゃないの？」

水嶋さんが悪い顔で笑った。

「思っていました。」

「酷い・・・俺も結構苦労してんよ、営業所と本部じゃ客層が違うし、何より木下がやってた以上の事やらないといけないからね。」

「・・・そつかあ、何だか凄い同期ですね。穂積さん、水嶋さん、木下さん。デキル人達じゃないですか。」

あたしは疲れ切ってて、自分の喋り方がやたらトロイ事に気づいた。

「穂積と木下が居たから俺も此処まで、やってこれたんだと思うよ。」
水嶋さんが机の上の書類を片付け始めた頃、山本さんが階段を下りてくる音が聞こえてきた。

3人が乗ったタクシーが池袋駅周辺を出ようとする辺りで、あたしの瞼は完全に落ちてしまった。

「え？青山さん?!」

遠くに声が聞こえた。タクシールン中あつたかい……。

「家どこ?!山ちゃん知ってる?」

「し知らないっす。た、確か板橋……。」

車の暖房と微妙な振動があたしを夢の中へと誘ってしまった。

随分と良い気持ちであたしは眠っていて重い瞼を開けると、左側に居た筈の山本さんが居なかった。

あれ?

あたし……。

右側に思いつきり体を預けて眠っていた体を起こし、目を見開いた。

「お疲れ。」

「水嶋さん!うわっす、すみません!!」

「家何処?青山さん。」

「あ、中板です。」

「運転手さん、中板まで。」

「はい。」

外はネオンと車のライトが光っていた。

「山ちゃんが亀戸だって言うから、先に行ったの。今、池袋方面に戻ってる途中。」

水嶋さんが一つ欠伸をした。

「……すみません。」

「何で謝るの?疲れてんの解ってるから。」

水嶋さんは腕組をして外を見ていた。

あたしも左側に移ろうと少し腰を浮かせる。

「……穂積にはこの状況ちゃんと伝えるよ。君の為じゃないよ。過労で倒れられても会社としても困るからね。」

「でも・・・経理を手伝う人なんて居るでしょうか。」

「居ないよ。穂積の代わりは誰も出来ない。あいつがやるんだよ、青山さん。」

「でも・・・今は、総務全体見る人だから。」

「全体見て、経理課の能力に不足を感じれば、あいつがそこを埋めるしかないでしょ。」

「能力不足・・・？」

「今迄残業してた？・・・してないよね。って事は以前より、落ちてるって事でしょ。それは明らかに人手不足で起きてる事だよ。山ちゃんでも青山さんの落ち度でもない事。」

「・・・嫌がらせも勿論あるけど、山本さんとあたしが全力で仕事をしても、ほぼ毎日残業してる。」

あたしは自分の力不足が悔しかった。

「穂積がね、君を面接した時の話をしてね、すげー出来そうな子が4月に来るよって言ったのを思い出すよ。」

あたしは水嶋さんを見た。

水嶋さんはずっと流れる景色を見て話をしていた。

「実際、本部に来て君の仕事振りを見てきたけど、穂積が期待して育ててきたのが良く解ったし、君の頑張りには目を見張るよ、青山さん。」

「・・・ありがとうございます。」

「今でも十二分に頑張ってるよ、青山さんは。大丈夫、焦らないで、この調子で頑張って。」

「・・・水嶋さんは、あたしが欲しい言葉を知ってるみたいに、絶妙なタイミングでそれをくれる人。」

「俺が青山さんを好きになるとか、穂積、思っていないだろうな。」その台詞の後に、水嶋さんはあたしの方へと顔を向けた。

いつもの冗談言ってる顔じゃなくて、あたしは返答を詰まらせた。水嶋さんが悪戯顔で鼻で笑った。

「なったらボッコボコに殺ラレそうだから、なんねーけど。」

あたしは脱力した。

「でも、穂積が君を本気で好きになったのが解る気がするよ。」
水嶋さんは又、窓の外を見て、こう続けた。

「俺ね、本気で好きだった人が居ただけで事故で死んじゃったの。それから何かね、失くすのが怖くてね、本気で人、好きにならない体質になっちゃったんだよね。」

いつも陽のイメージしかない水嶋さんの過去。

今、人の事考えるほど余裕もないけど、水嶋さんが本当に幸せになれば良いなど、あたしは思った。

無言の時間が長く続いてタクシーはあたしのアパートの前で止まった。

「ありがとうございます、今日は。」

「いえいえ、お疲れ。又明日会社でね。」

タクシーの料金は深夜料金に割り込み、既に8000円以上の金額が映し出されていた。

1
2

「青山さん、昨日大丈夫だった？」

あたしが席に着くと直ぐに山本さんが声を掛けてきた。

珍しく穂積さんが、あたしの斜め前の席に座っていた。

「おはようございます。・・・すみませんでした、起きたら山本さん居ないんで吃驚しました。」

昨夜は直ぐにお風呂に入って寝てしまった。朝の電車で穂積さんには、メールを打った。

「水嶋さんの肩にずっともたれて寝てて声掛けても全然起きねーん

だもん。」

「山ちゃん、この試算表これでオッケー。それから、これは仮払いにしておいて。」

あたしの机に置いてあった領収書の束も、穂積さんのチェックが入っていた。

「ポストイットの貼ってある所は直しておいて、青山。それから買掛の支払表、作成済み？」

「はい。」

「それチェックするから、共有ファイルにバックアップしといて。請求書も机に置いて、今日中にやっておく。」

「はい。」

「じゃあこれから、出掛けてくるから。」

穂積さんがオフィスを後にして、山本さんがあたしの隣に来て書類を渡す振りをして小声で言った。

「水嶋さん、穂積さんに何か言ったんだろ。俺らの今週分の仕事殆どチェックしたっばいよ。さっきパソのタイムカード見たら、

5時に出社になってたし。」

「何て言っただんでしょうね。」

「な。同期でライバルで友達って、何か良いな。」

あたしは頷いた。

あたしもあたしなりのペースで頑張ろう。

午前中はあつと言う間に過ぎて、あたしはコンビニにお昼を買いに出た。

ロビーで水嶋さんの背中を見つけて、あたしは声を掛けた。

「水嶋さん、昨日は有難うございました。」

「ああおはよう青山さん。」

「穂積さんに、何て言っただんですか？」

「え？」

「今日穂積さん、朝早く出勤してあたし達の仕事、殆どチェックし

てくれてましたよ?」

「あ、そうなの?それはそれは。」

結局、水嶋さんは何て言ったかを教えてくれないまま、あたしより先を歩いた。

残念。

「今度は、水嶋さん?」

あたしの後ろで小さく笑う女の人の声がした。

振り返ると、西野さんと金田さんが財布を抱えて、あたしの横を通り過ぎようとしていた。

「どういう意味ですか?」

あたしは聞いた。

「穂積さんの次は、水嶋さんと仲が良いんだなと思って。」

金田さんが、嫌味な顔つきで言い放った。

あたしは唇を噛んだ。

どうして、この人達はこういうレベルでしか人を見ないんだろう。西野さんと金田さんがビルを出る後ろ姿をあたしは苦々しい気持ちで見送っていた。

その先に、水嶋さんが見えた。

水嶋さんが立ち止まって、こっちを見てた。

西野さん達がその水嶋さんの前を、慄くように、足早に通過した。

何人かの人達が何事かと言うように、振り返ったり立ち止まったりしていた。

水嶋さんが、あたしの元へとゆっくり歩いてきた。

あたしの顔を見るなり、少し悲しそうな表情を見せた。

そして徐に、水嶋さんは右手の親指であたしの唇をなぞった。

あたしは何が起きたのか理解不能で固まった。

「血、出てる。」

水嶋さんの親指に血が付着していた。あたしは慌てて自分の口を覆い隠した。

ポケットから出したミニタオルを、水嶋さんへ差し出す。

「これ使って下さい。」

水嶋さんは、親指のあたしの血を舌で舐め上げた。

「みず……。」

そして本当にビルから、街へと出て行った。

午後になり、会社が変に浮ついていた。

あの一部始終を見ていた社員の誰かが、誰かに話したのだろう。

さつきから山本さんもチラチラ、あたしを見ていた。

あたしは仕事に集中しようと必死になった。

それでも、ひそひそと聞こえる小声全てが、水嶋さんとあたしの事を噂しているようで、心が乱れた。

丁度調べる事が出来、7階の外れにある資料室へと逃げ込んだ。

資料室の鍵を乱暴に解錠し、ドアを後ろ手で力強く閉めた。

・・・あたしは手の甲で、唇を強く擦った。

水嶋さん、何であんな事……。あれじゃ、周りに誤解される。

資料室のドアがノックされ、「青山？」と声がした。

穂積さんの声。あたしは振り返り、ドアを開けた。

穂積さんは、資料室に入るなり電気を消し鍵を締めた。

保存箱を陳列する為の大型スチールラックが何個もあり、資料の入
出庫を記帳する為の小さなデスクが置いてある資料室。

採光も少なく、一気に室内が暗くなった。

いつ会社に戻ったのだろう。

あたしは穂積さんに背を向け、ブラインドの掛った窓際へと足を進
めた。

直ぐ後ろで穂積さんの足音もした。

「青山。」

あたしは立ち止まる。振り返る事は出来ない。

「青山。」

さっきのとは声色が違っていた。あたしは俯いたまま振り返った。

穂積さんがあたしの顎を持ち、顔を上げさせた。

「血が滲んでる。」

あたしはそれを振り切った。どうしても穂積さんを直視できない。

「何かあったの？」

「・・・知らない？・・・でも何れは耳に入る。」

「お昼に行く前に・・・。」

「うん。」

「昨夜水嶋さんにご迷惑をお掛けしたことで謝ろうと思って声を掛けたんです。」

「うん。」

「それを見てた西野さん達が・・・。」

「うん。」

「あたし悔しくなって、いつも好き勝手な事ばかり言う西野さん達の事考えたら悔しくって、気付いたら・・・こんなになって・・・。」

「うん・・・やっぱり、嫌な思いしてたんだな、青山。」

あたしは穂積さんを見上げた。

「・・・俺の為に我慢しろって、水嶋に言われた？」

水嶋さん・・・。

「・・・ん。」

「あいつ優しいからな。言いそう。」

そう言う穂積さんの顔も優しかった。

二人は本当に仲良いんだなあ・・・。

水嶋さんが、あたしの唇に触れて拭った血を舐め取ったなんて話・・・。

「でも余計な事もしてくれたみたいだな。」

「！」

穂積さんの親指が、あたしの唇に触れた。

知ってる・・・噂聞いてたんだ。あたしは身を固くした。

さっきの事が思い出されて、記憶を閉ざすようにあたしは目を強く閉じた。

穂積さんがあたしに軽く触れる位のキスをした。

それから”あたし”を確かめるように抱きすくめる。

「明日さ、1泊で旅行行こっか、青山。」

「え？」

「青山と一緒に居たい。」

体を少し離して穂積さんのその目を見たら、何だか小さな子供みたくに見えて、愛おしくて仕方なかった。

あたし、やっぱり、この人じゃなきゃ駄目。

穂積さんじゃないと、やだ。

土曜日10時きっかりにあたしのアパートの下に、穂積さんの車が停車した。

小さな黒の外車だった。いかにもつぼくて、格好良いと口にしてしまった。

あたしは小さな旅行バッグと共に車に乗り込んだ。

「おはようございます。」

「おはよう、青山。」

車は直ぐに発信し、練馬インターから高速へ進入した。

「何処行くんですか？」

「温泉旅館。温泉とか、好き？」

「好きですよー、専門の時の友達と一回行っただけですけど。」

穂積さんは微笑ましそうにあたしの話聞いてくれた。

「穂積さんは、今迄旅行は何処行ったりしました？」

「今日は敬語、止めない？」

「え？」

「二人で会う時くらい、良いと思うんですけど？」

「・・・は、うん。でも・・・うん、敬語言わないようにする。」

「はは、そうして？青山。」

時々、事故渋滞にハマったりしつつ、車は関越道を走り抜けていた。ビルの景色が開け、木々が多くなり、田畑が見え始めた。

仕事が少し落ち着き始めたから時間が取れたって穂積さんは言ったけど、これから岩根部長の民事裁判も始まるし、今日のこの時間は穂積さんがあたしの為に作ってくれた時間なのだと思う。

疲れてるんだろうけど、それを全く見せなかった。

「次で一回止まるうか。」

「はい。あ、うん。」

穂積さんが又笑った。穂積さんのこの笑顔、久しぶりに見た気がし

た。

赤城高原サーブエリアへに着き、車を降りると穂積さんは、軽く伸びをした。

あたしもシヨルダーバッグを肩に掛け、車を降りた。

天気も良くて、空気が美味しかった。

「ちよつと寒いけど、気持ち良いー！空気、美味しいね。」

穂積さんがあたしを見て、優しく笑ってた。

「？」

「うん美味しい。お腹はどう？」

「空いたー！何か食べたい。」

あたし達は並んで歩くと、どちらからでもなく自然に手を繋ぎ、歩き出した。

あたし達の事を知る人なんて此処には居ない。

「チヨコ食べたい。」

「チヨコって・・・それコンビニで良くない？」

「小腹に甘い物ですよー。あー・・・又使っちゃった。」

「ふっ。あ肉まん売ってるよ、半分こしようか、青山。」

「あ食べたーい！」

売店で肉まんを一つ買って、あたし達は外のベンチでそれを食べ始めた。

「いただきます。」

かぶりつくあたし。手もあつたかいし、体もあつたまってきた。

11月も後半に入り東京よりも、群馬は格段寒かった。

「夏の始まりにさ、青山、肉まん食ってたよな、あれ笑った。」

「あ、あつたあつた。そんな事。確か、人に負けておにぎりとか買えなくて、レジ前で思わずオーダーしちゃったんですね。」

「そんな事だろうと思った。」

あたしよりも先に穂積さんは肉まんを食べ終え立ち上がり、遠くを見渡した。

あたしは肉まん片手に立ち上がり、穂積さんの隣に立った。

穂積さんに倅い、あたしもそうすると、さっきまで気づかなかつたのが嘘みたいに目前に雄大な山々が広がっていた。

「・・・凄い。凄ーい！あれって谷川岳？」

「うん、凄い。」

あたしは暫くそれに見とれていた。

自然と文明が混在してる。不思議だった。

「俺、青山のそついうとこ凄ーいと思う。」

「え？」

穂積さんが又ベンチに腰掛けた。あたしもそれに続いた。

「美味しい物を美味しいって顔して食べるとこ、空気が美味しいって気付く事、景色が綺麗だとそれを愛でる事。」

「だって、そう思うから・・・。」

「それ、皆が皆当たり前に持つてる感情じゃないんだよ？青山。そつなの？」

「・・・そつ？かな・・・？」

「うん、持ってたけど忘れる大人も居るしね。」

「穂積さんは？」

「・・・忘れかけてたかも。青山に会わなければ、そんな風に思える自分も居なかったかも。」

「忙しくてそう思える時間がないだけかもしれないよ？忘れたんじゃないよ、きつと。」

「・・・ふ、そつなのかなぁ・・・そつだな、そつかも。」

「そつそつ。」

自販機でコーヒーと紅茶を買って、車に又乗り込んだ。

体は完全に冷えていて、ペットボトルの紅茶をあたしは両手を暖めるように包み込んだ。

「^{かなで}奏。」

あたしは声のした方を見る。穂積さんがキーを回し、エンジンが回転を始めた。

「良い名前だな。」

穂積さんがあたしを見た。

穂積さんがあたしの名前を呼んだ。初めてあたしの名前を口にした。胸がいつぱいになった。

「本当は名前で呼びたいんだけどね。」

「・・・青山って呼ばれるだけでも、嬉しいですよ？あたし。」

「そっか。じゃ行こうか。」

「うん。」

何だか泣きたい気持ちになった。名前を呼ばただけで、こんな感情が湧き上がってくるなんて・・・。

あたし穂積さんをこんなに好きなんだなって思い知らされた。

ラジオから定番のクリスマスソングが流れてきた。

「もう直ぐクリスマスなんだな。」

って穂積さんが言った。

去年のクリスマスは幸成と一緒に居たんだっけ・・・。たった一年前の事なのに遠い昔の話に思えた。

「何か欲しい物とか、ある？」

あたしは首を振った。

「ない、かな。」

「少し考えてみて？」

「うん。」

あるけど、それは強請っちゃ駄目なんだよね。解ってる。解るけど、こんな素敵な時間をくれたら欲張っちゃうよ。

「穂積さんは？ある？」

「・・・ない、かな。」

ハンドルに軽く片手を宛がって遠くを見て、あたしと同じ答えを返した。

「仕事どう？いや大変なのは解ってるんだけど・・・。」

「大変。でも頑張れる。穂積さんも頑張ってる事思ったら、あたしも頑張れる。山本さんも凄く頑張ってるよ？」

あたしはドリンクホルダーのコーヒーを手に取り、プルタブを引いた。

そしてホルダーに戻す。穂積さんがそれに手を伸ばした。

「ありがとう、青山。」

「正直、山本さんがあんなに頼れる先輩だとは驚きです。」

「それは同感だな。入って4年・・・うん、良い仕事っぷりだと思う。」

「山本さん、それ聞いたら喜ぶと思う。」

「でも俺の文句も言ってる？」

「・・・えへへ？」

「言うね、あいつは。でも、そうやって発散出来てるって事なんだよね、山ちゃんは。」

「うん、口で言うほど思っていない感じがする。あ穂積さん、水嶋さんにもっと経理の仕事見ろーとか言われたの？」

「え？水嶋に？」

ちらつとこつちに視線を投げた。

「うん、だって一昨日残業するあたし達を見兼ねて、残業してるって事は明らかな人手不足だって、山本さんとあたしに倒れられたら困るから、穂積にちゃんと言っとくって・・・。」

「何にも言われてないよ。」

「じゃあどうして昨日の朝、早く出勤してたの？最初から来る予定？」

「・・・メールに青山の寝顔の画像が送られてきたんだ。」

「え?!」

「ほら、タクシーの？その5分後に山ちゃんの寝顔も送られてきたの。」

「山本さんも？」

穂積さんは口の端を少し上げた。

「改めてね、あー俺二人に無理させてんだなって・・・俺のやった事って、どうだったの？って・・・。」

「間違ってる。穂積さんのした事は間違ってる。」

「・・・水嶋もそう言うってくれた。だから俺も自分がやった事信じて、今迄以上に仕事やらないとって思ったんだ。最近ちょっと気持ち揺らいでたんだけど、引き締まった。」

水嶋さんもそういう風に穂積さんの背中押してあげてたんだ。

「あたしも頑張る。」

「力強いけど、青山は十分頑張ってるよ。」

「水嶋さんと同じ事言うー。」

あたしは笑った。

「水嶋？」

「うん、水嶋さんって本当にあたし達の強い味方な気がする。」

「・・・うん、そうだな。」

車は湯沢インターで降りた。

旅館のチエックイン迄、時間があつたので蕎麦屋で少し遅い昼食をとつた。

「美味しいー！こんなに美味しいお蕎麦食べた事ない！」

「あ本当だ、これ美味しい。」

「ね。」

あたし達にはこういう時間が少な過ぎる。

穂積さん、あたしが欲しいのは、穂積さんとの時間だよ。

チエックインした旅館は門を潜ると古き良き日本と言つた風情のある宿だつた。

「いらつしゃいませ。」

女将やフロントスタッフが笑顔であたし達を出迎えた。

穂積さんとあたしがどう見えているのか、少し気になった。

穂積さんが記帳を済ませ、部屋へと案内される。

純和風なお部屋で、日本庭園が目の前に広がつていた。

「わーきれー・・・い・・・。」

あたしは直ぐに窓辺に足を進めた。

「当館の自慢の庭園になります。」

スタッフの女性がそう説明した。

「穂積様、お食事はお部屋にお持ちいたしますが、お時間はどういたしましょうか。」

「少し早いけど、17時半位でも大丈夫？」

「ええ、ご用意させて頂きます。」

「じゃあそれをお願いします。」

スタッフが部屋から下がり、穂積さんはあたしの傍に歩み寄つた。

「お風呂、行ってきて良いですか？」

あたしの顔を覗き込んで笑顔で聞いてきた。

「勿論。運転、お疲れ様でした。あたしも運転出来れば良かったんですけど。」

「……。前、見えないでしょ？」

「……。失礼ですよ、穂積さん。」

あたし達は笑った。

それぞれに温泉を楽しみ、夕飯時には日本海の魚や季節の山菜を頂き、贅沢な時間を過ごした。

「日本酒、初めて飲んだけど美味しいかも。」

「新潟で飲むからってのも、あるんじゃない？」

「そうかも。友達に酒好きが居るからお土産に買って帰りたい。」

「水嶋にも何か買って行かないとな。……今日水嶋と温泉に来てる事になってるんだ。」

美帆子さんについた嘘。

「そっか。」

スタッフの人がお膳を下げて居る間、あたし達は窓際の掘り炬燵の中に身を寄せた。

「炬燵つて、ほっこりする。」

あたしは窓の外を見ながら、そう呟いた。

「では失礼致します。」

部屋は、二人の空間になった。

急に静寂が襲ってきて、あたしは持て余すように立ち上がり、障子を全開にした。

「……雪……。」

「え？」

穂積さんもあたしの傍で、降り出した雪を確認した。

ゆっくりと舞うようにそれは落ちてきた。

雪はどんどん空から舞い降りた。

庭園に落ちると雪は白色透明になり、見えなくなった。

「泣いてる？青山？」

あたしは指で頬に触れた。頬を伝う涙に驚いた。

「どうした？」

「あたし、きつと一生この景色を忘れる事ないと思う。」

「・・・青山？」

あたしはちよつと笑った。

「幸せなの、今、凄く。こうして穂積さんと居られるのが幸せ。」

又、同じ景色を見る事が出来るのかな・・・。

あたし達の想いも、いつか消えてなくなるのかな・・・。

あたしの小さな想いのカケラも、自分の中だけに納まりきれない程の大きな想いになるのかな。

雪が融けて、土へと還る。

寒さが深まれば、雪は降り積もるだろう。

穂積さんとあたしは此処に在る確かな体温を確かめ合うように、深く深く繋がっていた。

朝、目が覚めると居る筈の穂積さんが隣に居なかった。

あたしは浴衣の乱れを直し、上体を起こした。

「おはよう。」

浴衣に丹前を羽織い、窓を背に穂積さんが微笑んでいた。

「おはようございます。」

昨夜の事が思い出され、照れくさかった。

「雪、積もらなかったよ、青山。」

雪の命は、儂く切ない。

そして、あたし達の時間もそれと同じ。

「あたし、お風呂行ってこようっと。」

穂積さんとの時間はもう直ぐ終わる。困らせたくない。だから寂しそうな顔はしない。

チェックアウトの時間になり、あたし達は来た時と同じ様にリアシ

ートに小さなバッグを置き、車へと乗り込んだ。

そして、東京へと戻った。

13

帰宅して、一晩ひと気の無かったあたしの小さな部屋は冷蔵庫の動作音だけが響いていた。

静かで寒い部屋。

穂積さんは、美帆子さんの居る暖かい家に帰るのだろう。

そんな事を思っつて、あたしは頭を振った。

こんな風に思うなんて、自分が凄く嫌な人間に思えて仕方が無かつ

た。

穂積さんに奥さんが居る事は知ってた。知ってて好きになったんじゃない。

穂積さんがあたしを好きだと言った。それだけで幸せな筈でしょ。。。

月曜になって、又あたしは通勤電車に揺られ会社に向かう。

コンビニで購入した新聞に、岩根部長の裁判の記事が小さいが載っていた。

会社の売上げが最近減っているのは、この事件である事は否めない。

穂積さんのスケジュールに裁判所と記されていた。

「おはよう、青山さん。」

「山本さん、おはようございます。」

「今日からみたいだな。」

「……ですね。どうなるんでしょう。」

あたし達は重苦しい気持ちを抱えて、一日のスタートを切った。

「青山さん、悪いんだけど、これ開発に持って行ってくれない？」

「あ、はい、お預かりします。」

山本さんが出力した売上の推移表のファイルを片手にあたしは6階に下りた。

営業の人は誰もおらず、あたしは吉岡さんにファイルを手渡した。

「お願いします。」

「はい、ありがとうございます。……青山さん？」

「え？」

「……あたし、7階に居る訳じゃないから手助けとか出来る訳じゃないけど、あたしは穂積さんのやった事間違っていないと思うよ？」

「……吉岡さん。」

「今はさ苦しい時だと思うけど、あたしら開発も頑張ってるから青山さん達も頑張ってる。」

「ありがとうございます！」

あたしは心底嬉しくなった。解ってくれてる人も居るんだ！

その夜、ポストにエヴリイが投函されていた。

表紙に”今即買いの家具”と大きく書かれ、あたしは心が早って頁を捲る。

木下さんの顔写真が小さくだけど端に載っていた。

「協力・・・有限会社ウォーム・ファニチャー代表・・・木下響子・・・」

特集には、ワンルームに置いてコンパクト且つ機能的な輸入家具や、こだわりのアンティーク家具、匠の作る日本家具が掲載されていた。

木下さんのコメントの中で、以前いた会社つまり、うちの会社の事に触れていた。

「この会社で学んだ事の多くがあたしのインテリアに対する知識。プランナーになる様勧めてくれた同期には感謝。」

編集者の手記に、自分へのご褒美に暖かいファニチャーを手に入れてみようと思ったと記されている。

木下さんも、美帆子さんも、穂積さんのバックアップをしているのだと思った。

ただ言葉で”頑張ってる”でも”応援してる”でも無い。

それを形にして、穂積さんの背中を押してる。

じゃあ、あたしは？

あたしは与えられた仕事をこなして、メールで「頑張ってる」と言う。

理解してくれる人が居たとはしゃいである。

あたしが、穂積さん出来る事って何？

朝、通勤電車の中吊り広告でエヴリイを見上げた。

考えても考えても、あたしが穂積さんに来る事は仕事をきっちりやり遂げる事しか思いつかなかった。

眠れなかった。

自分が無力で、他力本願な人間な気がして仕方なかった。

今迄、勉強も部活も、恋愛だってそれなりに努力はしてきた。

それは報われてきて、あたし自身も納得が出来た。

でも今回は、違う。

不倫で云う特異な状況で、しかもその相手は地位も能力もあって、あたしなんか正に小娘。

穂積さんの奥さんはそれに釣り合うように完璧な女性で、穂積さんを想っていたと思われる木下さんも、穂積さんを自分の力で支えようとしてる。

あたしが穂積さんに来る事、何一つ無いんだって思い知らされた夜だった。

電車が池袋に到着し、あたしはホームに押し出される。

暫く動く事が出来なかった。

会社に行くのが怖かった。

不意に肩を叩かれて、あたしは勢いよく振り向いた。

そこには水嶋さんが居た。

「・・・おはよ、青山さん、どうしたの？死にそんな顔してるけど・・・」

「水嶋さん・・・」

知った顔にあたしは急に安心して、大きく息をした。

「おはようございます。」

「体調悪いんじゃないの、青山さん？」

「大丈夫です。」

あたしは笑って見せた。

「・・・あれ、推移表ありがとね、助かったよ。」

「作ったの山本さんです・・・あたしは持って行ったただけだから・・・。」

「やっぱり、あたし言われた事しか出来てないんだな・・・。駄目だな・・・。」

「今日、穂積、直帰でしょ？二人で飲み行かない？」

あたしは軽い返事をして、力なく歩き続けた。

又今日も仕事に追われ、あつという間に夜になり、あたしは水嶋さんと居酒屋で対面していた。

「お疲れー。何だか本当に。顔ヤバイよ？青山さん。」

あたしは”はあ”とか何とか答えた。

「想像がつくんで、突っ込んで聞くけど、そのモヤモヤしたオーラはエヴリーの一件？」

真芯に質問が刺さって、あたしは言葉を失った。

「やっぱり・・・。俺もこの前木下から連絡貰って吃驚したけどね。」

「穂積さん、知ってたんですかね？」

「知らないでしょ。知ってたら、美帆子さんの事止めるでしょ？雑誌にスポンサーだって居るんだから、悪く突かれてるインテリア会社に關係する記事なんか載せて欲しくないと思うのが当然でしょ。」

「・・・。」

美帆子さんも木下さんもマイナス覚悟でやった事なんだ・・・。

到底あたしには出来ない。真似すら出来ない事だよな。

あたしはサワーグラスを一気に空けた。

「焦ってる、青山さん？」

「・・・落ち込んでます。あたしは穂積さんに何もしてあげれてな

いなくて……。」

グラスの中の氷は、満たされるのを待っているかの様だった。

「穂積に想われてる、それだけじゃ駄目なの？」

あたしが顔を上げると、水嶋さんは煙草の煙を燻らせながら冷たく言い放った。

「穂積が君に、あの二人が出来るような事を望んでるとは思えないけどね。」

「……穂積さんの求めてるあたしって何ですか？」

水嶋さんの何時に無く冷たいあしらいにあたしは思わず語調を強めた。

「あんなに凄いい人に想われる程の人間じゃないですよ！」
答えは返ってこなかった。

水嶋さんはライターライターの火を点けたり消したりを繰り返した。

「……結構普通の女の子なんだな、青山さんも。」

「え？」

「そつだよな、未だ20歳はたちなんだもんな……。」

「どういう意味ですか？」

「俺の青山さんの心象つてさ、しつかり者、でも時々子供みたいな素振りを見せる、だからほっとけない、だつたんだよね。」

灰皿で煙草を揉み消して直ぐに新しいのに火を点ける水嶋さん。

「そんな風にオロオロしてみたりもするんだなって……。」

店員さんが戸を開け、新しいお酒をテーブルに置いた。

「いや悪い意味じゃないよ？……俺も、穂積と木下と同期で変に焦った時期もあつたんだよ、青山さん。」

水嶋さんはウーロンハイを一口飲んだ。

「二人はどんどん仕事覚えてさ、俺だけ置いてかれてるみたいな気がしてさ……。二人が俺を置いてつたって事無いんだけど、こっちが気後れしてるからそんなネガティブな気になるんだよね。」

水嶋さんのその話は、今のあたしの状況と似ていた。

「仕事も面白いとも思えなくて辞めようとも思ってたけど、二人に凄

い止められたの。むしろ怒られた。”一緒に会社大きくしようって
言っただろ”って。で思い留まって、今に至ったの。”

マルポロライト・・・穂積さんと煙草同じだ。

「不安も焦りも解るよ。でも青山さんは青山さんで良いと俺は思う
よ？」

寝不足と疲れで、あたしは水嶋さんの顔をぼんやり見てた。

水嶋さんは本当にあたしの事、理解してくれてる。

何でなのかと思ってたけど・・・水嶋さんとあたし似てるのかもし
れない・・・。

「・・・水嶋さん・・・ごめんなさい・・・。」

「え？え？」

「・・・眠い・・・。」

あたしは又しても水嶋さんの前で寝顔を披露する事になった。

心地良いあったかさの中であたしは目覚めた。

「ん……。」

体を起こす。見た事の無い室内。あたしは記憶を辿った。

ベッドから降り、閉じられたドアを静かに開けた。仄暗かった。

右手に玄関が見えた。あたしの靴と男物の革靴が並んでる。

左手に足を進めた。キッチンがあつて、その向こうにダイニング、リビング。

ダイニングテーブルの上に、見覚えのある携帯とマルボロライトの箱と財布。

「……そっか……。」

大きなテレビの前に置かれたレザーソファアの上で布団に包まれている水嶋さんを見つけた。

壁際にローチェストが置かれ、その上でデジタルの時計が1時を表示していた。

あたしは部屋の中を見回した。

男一人で暮らしてる割に綺麗だなあ。

窓際に立ち、カーテンを少し曳いた。日付は変わってるのに、街は眠っていなかった。

「此処、何処かなあ……。」

「大塚。」

振り向くと水嶋さんが、布団から顔を出した。

「ごめん、俺ん家連れ込んだじゃって。」

「何で水嶋さんが謝るんですか？。あたしこそ、又寝ちゃって……。」

「……本当だよな、どんだけ男の前で無防備なの、青山さん。」

ソファから立ち上がり、水嶋さんは冷蔵庫を開けた。

水嶋さんはしつかり、スウェットに着替えていた。

「何で笑ってんの？」

「穂積さんにもそんな風な注意された事あります。世の中には厭らしい事しか考えてない男も居るんだよって……。」

「本当だよ、青山さん。」

「……あれ？」

水嶋さんはペットボトルのお水を飲んでから、テーブルの上の財布を開いた。

「タクシー代、手持ち足りなさそうだったから俺ん家、来ちゃったんだけど、今からタクシー拾って帰るよね？」

「あ、はい。大丈夫です。大塚だったら中板迄近いですよね？お金足りると思います。」

「そう？」

あたしは椅子の上に置かれていたコートと鞆を手に取った。

テーブルの上の煙草が目についた。

「タクシーんどこまで行くよ。」

「大丈夫ですよ、水嶋さん、髪濡れてる。風邪引きますよ？」

「あ？ああ、じゃあ此処で。」

「はい、ありがとうございます。」

あたしは靴を履き、水嶋さんのマンションを後にした。

直ぐにタクシーに乗り込んで、あたしは思った。

水嶋さんは、好きだった人が死んで失くすのが怖くて、本気で人を好きにならない体質になったって言った。

でも、社内の噂では女をとつかえひっかえの軟派って。それはやっぱり噂に過ぎないんだ、とあたしは思った。

女っ気の無い部屋。

あの口癖。

同
じ
。 。 。

「山本さん、今日給与振込・・・やりました?」

「・・・やべえ・・・。」

24日の16時を回り、書類整理をしていたあたしは、ハタと思い出して山本さんに聞いた。

山本さんは手にしていた書類を隣の空きスペースに押しやり、給与台帳を引つ張り出した。

約100人程の振込予約をパソコンから行うこの作業は通常、給与振込の前日15時迄に完了させておくのがセオリーだった。

「今日中にやれば、明日には振り込まれるから焦んなくても大丈夫ですよ?」

顔面蒼白の山本さんを落ち着かせようとあたしはそう言った。

「確か大丈夫・・・。今日中なら明日の朝一にも着金出来ると思っ
た・・・。青山さん、悪いんだけど、こっちの仕入れ値のチェック
の続きやってくれる?」

「今日中ですか?」

「うん、そう。穂積さんに今日迄にやっておくように言われたんだ。」

「了解です。」

又、今日も残業決定だ。

穂積さんは今日は名古屋出張だった。昨夜水嶋さんのマンションに行つた事はメールには書かなかつた。

又”無理をさせてる”と思われなくなかつた。水嶋さんにも、言わないで欲しいと伝えた。

あたしは給湯室に行き、山本さんと自分用のコーヒーを淹れる。穂積さんのうさぎちゃんのカップは、奥に追いやられていた。

「山本さん、コーヒー此処に置いておきますね。」

「ああ有難う、青山さん。」

あたしも席についてコーヒーを啜った後、伝票と電卓を引き寄せた。
「間違ってたなら、どうするんですか？」

「ポストイット貼って、各営業所にPDFで送っておいて。事務長宛てで。開発は、吉岡さんね。」

「はい、有難うございます。」

山本さんが途中までチェック済みなので、あたしは開発と横浜を見るだけだった。

それでも取引先が多い部署なだけに時間はかかった。

他の人達は17時半に「お疲れ」と声を掛け合い、退社して行く。あたしの後ろで声がした。

「お疲れ様。」

西野さんが、あたしの机にチョコレートを二つ置いた。

岩根部長の件以来、ギクシヤクしていたあたし達。西野さんは少しバツが悪そうで、早々にこの場をやり過ぎしオフィスを後にした。あたしはチョコレートを見て、少し・・・嬉しくなった。

目が疲れて時々、窓の外を見る。

さつきまで燃えるような赤い夕陽が沈んでいる最中だったのに、今は既に夜の時間が始まっていた。

あたしのチェックが終わり、コピー機で伝票をPDFに落とす。山本さんは、疲労困憊の様子が窺えた。

パソコンのテンキーで、口座に給与が振り込める。便利な機能だけど、簡単が故に神経も使う仕事だと思った。

「あれー、水嶋さん来てない？」

吉岡さんが片手に携帯をブラブラさせながら、総務部に顔を出した。
「お疲れ様です。水嶋さんなら来てませんか……。どうしたんですか？」

「総務行ってから帰るって言って、さつき出て行ったんだけど、机の上に携帯忘れてたから持ってきたんだけど……。」

吉岡さんも帰り支度が済んでる様だったから、あたしはその受け渡しを引き受けた。

「ごめんね、残業中なのに。一応開発に戻ってきた用にメモは貼ってきたから！よろです。」

「了解です。」

あたしは水嶋さんの携帯を机の上に置いた。

伝票綴じをして、社内メールを送ろうと椅子に座り直すと、思いの外椅子を強く引き過ぎたようで、机が揺れ水嶋さんの携帯がタイルカーペットの上に落ちた。

「あ！」

落ちた衝撃で携帯が開いた。

あたしはそれを拾い上げる。

見てしまった。

あたしの突拍子もない想像は確信に変わった。

水嶋さんの「好きな人が死んだ」と言った時の横顔が思い出された。

「一体どんな想いで”駒”になると言ったんだろっ……。」

14

「おはようございます。」

オフィスに行くと、穂積さんがあたしの斜め前の指定席に座っていた。

ホツとする半面、あたしは複雑な気持ちを抱えていた。

穂積さんが笑顔で応えてくれた。

「山本さん、昨日はお疲れ様でした。」

あたしは昨夜の残業で山本さんより先に会社を出た。

吉岡さんに頼まれた、水嶋さんの携帯も山本さんに託した。

「あーお疲れした！あの後、水嶋さん差し入れ持って来てくれたんだよ。携帯も返しといたよ。」

「ありがとうございます。」

「それとコレ、青山さん分。」

コンビニのビニール袋をあたしへと差し出した。

中を覗くと、チョコレートやキャンディ、キャラメルが入っていた。

「・・・子供？」

「一回りも違うんだから、子供扱いだな、完全に。」

山本さんはそう言いながら笑った。

一回り・・・そう穂積さんともそれだけ違うってこと。20歳^{はたち}って、やっぱり子供かな。

「青山さん、これ今月の領収書、小口で入力しておいて。」

穂積さんの声がした。

「あ、はい。お預かりします。」

穂積さんが經理の仕事をした今日、山本さんもあたしも久しぶりに

定時に退社出来た。

ビルを出て、寒さに身を縮めた。

バッグの中で携帯が震えた。それを取り出しメールを確認する。穂積さんからのメール。

”水嶋と三人で飲みに行かない？”

暫く迷って、”帰宅します”と返信をする。

どんな顔したら良いの……。

又携帯が震える。今度は着信だった。

「もしもし……。」

「どうした？どっか具合悪いの？青山。」

「ううん違うんです。……今日、借りてたDVD返さないと延滞がかつちやうんで。」

「……そつか。今日あんまり元気無いみたいな感じでしたから、ちよっと気になってたんだ。」

「大丈夫です。すみません。明日は元気に頑張ります！」

「うん、じゃあ明日。」

電話を切ると直ぐにメールが届いた。

久しぶりの珠紀からのメールで、”今ブクロ。東口で待ってる”って、強引な奴だな。

直ぐに珠紀と合流し、あたし達は居酒屋で再会の乾杯をした。

あたしはお通しを口に運びながら、これまでの事と水嶋さんの事を打ち明けた。

「……やつちやったか、不倫。前に会った時、しないって言ったの誰だっけ？」

珠紀が、メニューを見ながら淡々と言った。

「苦しい想いしてんのは解った。いくらでも話は聞くよ。……今の問題は、その水嶋って人ね。」

「うん……。」

「まあ優衣の事もあるから、もう大抵の事では驚かないし、理解力もあるつもりだよね、あたしら。」

「うん……。」

優衣。確か本名は、優也。

高校卒業までは、その名前で生きてきましたって、専門の初めてのホームルームで堂々と話した優衣。

性同一性障害を抱えて十八年生きて、両親の為にも隠してきたって言うてた。

でも、それでもやっぱり辛くて孤独で、やっと吐き出して、両親にも理解が得られて性転換手術を受けて改名もしたって話をさらっと、珠紀とあたしに話してくれた。

さらっと短時間で話せる事でも無いけど、優衣はあたし達を信頼して、そう語ってくれた。

最近の世間の風潮から決して珍しくもない話かもしれないけど、やっぱり目の当たりにすると、その状況を好奇心な目で見る人も多いのも確かだった。

「どうなの？ゲイなの？」

「ゲイかバイだと思う。」

「水嶋が穂積を好きなのは間違いない訳？」

「……十中八九。」

「ご注文お決まりですかー。」

店員がハンディを開いて、片膝だった。

「オリジナルサラダともちもち明太子と、ポテトフライ、後軟骨の唐揚げね。」

「かしこまりましたー。」

店員が下がると、結論を急かすように珠紀が聞いてきた。

「で、奏はどうしたいと思ってるの？」

それを困ってるのに、珠紀はあたしに答えを求めた。

黙りこくるあたしに先回りして珠紀がスラスラと選択肢を挙げる。

「一つ。水嶋の事は目を瞑って穂積との関係が続け、駒のままで居させる。一つ。水嶋の気持ちを考え、穂積と別れる。一つ。穂積と水嶋と三人で・・・これは無いか。」

「珠紀！ふざけないでよっ。」

「へいへい。」

あたしはマドラーで、グラスの下に沈殿したグレープフルーツの果汁をサワーと混ぜた。

「選択肢二つしかないね、奏。」

「それしか無いのかな・・・。」

「え？どうしたい訳?!」

珠紀がメンソールの細い煙草に火を点けた。

「・・・一番やりたくないのは、水嶋さんに同情する事。あたしね、水嶋さんの気持ち知るまではただ本当に普通に水嶋さんが幸せになれば良いなって思ってた。けどさ、水嶋さんが自分の気持ちひた隠しにして穂積さんの気持ち尊重してきたんだとしたら、それが水嶋さんが選んだ幸せなのかなって・・・。そう思ったら、あたしは穂積さんへの気持ちを貫き通した方が良いんじゃないかって・・・。」

「じゃあ今の関係で行くって事でしょ？」

「・・・水嶋さんの気持ちは無視出来ない。しかも駒だなんて思いたくない。」

「何か言ってる事に無理が無い?!」

あたしは唇を噛んだ。

「青山さん？」

あたしが声のした方を向くと、穂積さんと水嶋さんが驚いた顔をし

て立っていた。

そして4人で卓を囲む事になってしまった。

「専門の時の同級の珠紀です。」

珠紀はにこにこ顔で応えた。むしろ傍観はしてられないタイプ・
。

「上司の穂積です。」

「先輩の水嶋です。」

付け加えて珠紀は直ぐに、こう言った。

「今、お二人の話をしてました。」

「珠紀！」

「良いじゃん、あたしが知らない振りしても仕方ない事ですよ。ね、穂積さん。」

あたしの横に座った穂積さんに同意を求める珠紀。

水嶋さんが笑った。

「確かに！面白いねー、タマちゃん。」

あたしは珠紀が水嶋さんの事を言い出さないかハラハラした。

穂積さんは小さく息を吐き、煙草を取り出した。

「何か変な汗かいた。」

「・・・すみません。」

「いや良いよ、全然。あれDVDどうしたの？」

「・・・DVD？あー・・・多分間に合わない・・・。」

「はい、そこ、オーラ出さないで下さい。」

珠紀の一言に水嶋さんは又笑った。

「ウケル。」

暫くは、専門の時のあたしの話をしたりとかで普通に盛り上がる飲み会だった。

穂積さんがトイレで席を離れた時に、珠紀は仕掛けた。

「二人共、マルボロライトなんですね？」

「え？ああ煙草？タマちゃんは、女子が好きそうなメンソールだね。」
「彼氏がマルメン吸ってて、であたしも煙草覚えちゃったんですよ。ねえ。」

あたしはそれ以上は何も言うなつて顔で珠紀を見つめた。珠紀は知つてか知らないか、素知らぬ顔だ。

「水嶋さんは、彼女居ないんですか？」

「一緒に遊ぶ女の子は居るけどねー。特別は居ないかな、今は。」

「・・・へえー、イケメンだから、もてそうですね。」

「いやいや穂積さん程じゃあないですよ。」

水嶋さんは、ウーロンハイを空けて、店員に声を掛けた。

「青山さんは？今日は飲み、悪くない？」

「あー・・・何かちよつと疲れてて。」

「穂積、心配してたよ、相当。」

「すみません・・・。」

胃がキリキリしてきた・・・。帰りた。

穂積さんがトイレから戻ると、あたしの肩を叩いた。

「帰ろう？」

「え？」

「悪いけど、先帰るね、タマちゃん。水嶋、領収書貰っておいて。」

「あ？ああ・・・はいはい。」

「又ねー、奏。」

珠紀が手を振った。

待って・・・珠紀と水嶋さんを二人つきりにしたら、珠紀絶対喋っちゃうって・・・。

穂積さんは、あたしの肩を引き寄せるようにした。

タクシーのリアシートで、穂積さんはあたしを直ぐ隣に座らせ、繋いだ左手をずっと離さなかった。

一言も発しないこの空気は重苦しかった。

穂積さんは水嶋さんの気持ちに気付いてるのかな……。
気付いてたら、あたし達の事に協力なんかしてもらわないか……。
幾ら穂積さんでも、そこは想定外ってところかな。

タクシーはあつと言う間にあたしのアパートに着いた。

穂積さんは

「おやすみ。」

とだけ言った。

穂積さんの神経が研ぎ澄まされてるのが手に取るように解った。

「おやすみなさい。」

あたしは笑顔でそう答えた。

水嶋さんが、穂積さんに伝える気が無いのなら穂積さんは知らないままで良い。

その夜、珠紀からメールが届いた。

奏は、一番やりたくないのは、水嶋さんに同情することだって言った。

”同情”なんて言葉が出てくる時点で、同情してるんだとあたしは思うよ。

……言い過ぎ？

水嶋さんが本当に良い人なのは解った。

おや耳3 たまちゃん

その画面を開いたまんま、あたしは布団の中で朝を迎えた。

水嶋さんが駒になると言ったんだ。

あたしも、貫こうと思った。

穂積さんを信じますって、水嶋さんに誓った自分の気持ちを貫こうと決めた。

15

師走に入り、クリスマスモード全開で下の階では忘年会も行われていた。

総務部では、岩根部長の件があつて表立っては開かれなかった。

親しい人だけで開いて後から領収書が回ってくると云う状態だった。山本さんとあたしの年忘れは未だ来そうにない……。

定時を過ぎた時、机の中の携帯が震えた。

あたしはこっそりとチェックする。

送信先のアドレスは神谷さんからだった。

珍しい人からのメールで、あたしは少し驚いた。スクロールし本文を読み始める。

桐生です。

穂積との事。

明日14時位に俺のマンションに来て。
来なければ、美帆子に話す。

体が硬直して動けなかった。

・・・どうして・・・桐生さんが？

土曜日の朝、鏡の中にやけに色の白いあたしの顔が在った。
コンシーラーを眼の下に馴染ませる。

気を付けては居たつもりだし、外で二人で会った事だって数えるほどしか無い。

どうして桐生さんに知り得る事が出来たのか。

綻びは無かった筈なのに、どこから漏れたのか。

今日、桐生さんはどんな事を仕掛けてくるのか・・・。

あたしは頭を振った。

どんな事を挑まれても、あたしは応える覚悟を決めていた。

入口のインターホンを押すとロックが解錠される音がした。最上階に着き、あたしはドアの前で深く息を吐いた。

ドアのインターホンをもう一度鳴らす。

桐生さんの話し声がどんどん近付いて聞こえて、ドアが少し開いた。誰かと携帯で話してる様だった。

「ああ今、ちよつと先客なんだ。1時間・・・んー30分位で良いや、待つてて。着いたら電話してよ。え？ああ地下の？あー大丈夫だと思う。来客用のがあったと思う。管理人に聞いてみて。ああじや。」

あたしはブーツを脱いで、室内に足を踏み入れた。

「久しぶり、奏ちゃん。」

リビングの方から、桐生さんの声がした。

「来ないかと思ったけど、よっぽど穂積が大切って事ね、来たって事は。」

リビングのドアの入口であたしは、桐生さんの言動を見落とさないように神経を張り詰めていた。

桐生さんはソファに座り、ウイスキーのロックを舐めていた。

効き過ぎる程の暖房が、気持ち悪かった。

「コート脱いで、バッグ置いて。」

抑揚の無い桐生さんの声。

あたしは桐生さんとは反対にあるキッチンカウンター前のテーブルの椅子にバッグを置き、背凭れにコートを掛けた。

「ふ・・・奏ちゃん、やつぱり面白い。で、穂積とは9月位から？」

「話す必要はありません。」

「・・・まあ確かに。」

桐生さんは立ちあがって、オーデイオ横に立てかけてあった茶色い封筒から何かを取り出した。

「この温泉、良かった？」

「?!」

「此処1泊3万近くすんだってね、流石高給取りだなあ穂積は。」
煙草を啜え、その中から写真らしきものをローテーブルの上に乱暴に置いた。

あたしは駆け寄ってしゃがみ込む。

「。。。。」

あたしのアパートの前に停まる穂積さんの車、赤城高原SAで手を繋ぐ穂積さんとあたし、旅館に入るあたし達。。。。
どれも隠し撮りをされたものだった。

「。。。。何が目的ですか。」

この人はやっぱり恐ろしい人間だった。

意識的に避けてきたが、あたしは桐生さんを見上げた。

「ああその顔やっぱり良い。そそるなあ。」

桐生さんはあたしに視線を合わせるようにしゃがんだ。

煙草臭い息があたしの鼻を突く。

「俺ね、DSだけど強姦とかは好きじゃないんだよね。」

「。。。。」

「そこ寝室。」

リビングのドアの方をちらっと見た。

「服脱いで、足広げて待つてな。」

コートを脱げと言った時と同じ様な口振りで、この男はあたしにセックスを強要した。

こうなる事を覚悟していた。

それでいてあたしは、この部屋にやってきたのだ。

あたしが穂積さんに来る事、これしかないんだもん。

あたしはローテーブルを支えにして立った。

後ろでウイスキーのグラスが空になる音が聞こえた。

リビングを抜け、直ぐ右手のドアを開ける。

カーテンは閉じられ、大きなベッドが主を待っている。
ここも逆上せる様な温度の暖房が効いていた。

あたしは言われた通りに、服を脱ぐ。

怖くはない。

こんな事大したことじゃない。目を瞑っていれば、きっと直ぐに終わる。

全てを剥いで、あたしはベッドの中に潜り込んだ。

そう・・・きつと直ぐに終わる。

少し擦るような特徴的な足音がして、男が掛け布団を捲った。

そしてあたしの腰を跨いで、あたしを見下ろす。

上半身だけ裸のこの男の左肩の付け根のタトゥーが目に入った。

あたしはそれを通り越して、天井のクロスデザインのデザインを目でなぞった。

片方の胸を強い力で鷲掴みされる。

男の顔が近付いて、首筋に唇が触れた。

線が途中で消えた。直ぐ隣にある線を又なぞり始める。

あたしの左膝を立たせ、内腿に指を這わせる。

男の指は、あたしの陰部へと触れた。

あたしは、又隣の線をなぞる。

「・・・つまんねー。」

男はあたしから降り、冷やかに言った。

「そんな覚悟した顔が見たいんじゃないよーんだよ。」

男はリビングへと戻った。

話し声が聞こえる。携帯を使用している様だ。

「あ俺。今何処？駐車場？じゃあ上、来て。もう用事済んだから。」

あたしは未だクロスデザインのデザインを追っていた。

ジョイント部分で、リターンする。

直ぐに終わるんだから……。

インターホンが聞こえる。

「！」

あたしは我に返った。

「開いてるー。」

桐生さんの声が応える。

あたしは上体を起こし、布団で胸元を隠した。

足音が聞こえて、桐生さんへの来客者と目が合った。

「……。」

相手も言葉を失くした様子だった。

「テーブルの上に、借りてた奴置いといた。勝手に持ってって。あと、その女、好きにして。」

来客者の後ろを桐生さんが擦り抜け、玄関のドアが開かれ大きな音で閉じられた。

急な恐怖と羞恥心と混乱があたしを襲う。

「……奏ちゃん……どうして……。」

あたしは耳を塞いだ。

あたし……あたし……。

「や……見ないで!!！」

胸の痛みと、首筋の湿った痕が更に恐怖心を煽る。

「オーナーと？」

「違う！あたし……あたしはただ、穂積さんを守りたかったの！」

「……。」

あの男から穂積さんを守りたかった。

あたしが穂積さんの為に出来る事はこれしかなかった。

「……洋服、着て？送って行くよ……あっちで待ってるから。」

庄司君は、優しい声で、ゆっくりとした口調でそう言った。

庄司君はあたしの為に車のドアを開けてくれた。

何も聞かず、何も発しなかった。

あたしは窓の外を流れゆくままに見ていた。

外は未だ明るいのに、急にあの寝室の暗さが蘇った。

あたしは上腕部のコートをぎゅっと掴んだ。

「家まで送ろうか？」

あたしは首を振った。

「そう・・・じゃあ池袋駅の近くで下ろすよ。」

あたしは小さく頷いた。

目白から池袋は直ぐだった。歩道に車が寄せられ、停車した。

「・・・穂積さんには・・・。」

「解ってるよ。」

庄司君は心得ている様に答えた。

「・・・大切な人の為に何かをしたいと思うのは当然の事だと僕は思うよ。」

あたしはシートベルトを外そうとした手を止めて庄司君を見た。

庄司君はあの真っ直ぐな目であたしを見て、こうも続けた。

「ただ・・・自分を大切にして欲しい・・・。」

シートベルトがあたしの前を走って定位置に納まった。

16

「おはようございます。」

あたしは笑顔でオフィスに入った。

穂積さんがあたしの顔を確かめるような視線を向けた。

「おはよう、青山。」

あたしは微笑んだ。

お昼になり、財布を持って階段を下っていると

「青山、コンビニ？」

声がして穂積さんがあたしの隣に並んだ。

「あ、はい。穂積さんは煙草ですか？買ってきます？」

「一緒にランチ行かない？」

あたしは断る理由を探す。

「あー居たー！」

後ろから大きな声がして、あたし達は振り返った。

水嶋さんがリズムカルに階段を下りて来ていた。

「ランチ？俺ね、今日肉食いたい、肉。」

あたしはこの成り行きに逆らえないまま、オムライスのデミソース
かけをオーダーしていた。

あたしはお冷を一口飲んだ。

ウエイトレスが次々とランチプレートを運んできた。

穂積さんは和風ハンバーグ、水嶋さんには和風スパゲッティを配膳
する。

あたしは言った。

「・・・肉つて言ったじゃないですか・・・しかも、きのこもつきじゃないですか、水嶋さん。」

「えへ？」

穂積さんが笑った。

「いつもの青山みたいだな。」

「え？あーもう元気モリモリですよ！土日死ぬほど寝ましたから。」

食事が終わると、二人は食後のコーヒーを飲みながら煙草を吸い始めた。

「あれ・・・。」

二人の煙草の箱の色が違った。

「え？」

穂積さんと水嶋さんの声が重なった。

あたしの視線の先に気付いてか水嶋さんが指先に煙草を挟んだ左手で、箱を持ち上げた。

「これ？」

「・・・あ、はい。」

「あれ水嶋、煙草変えたの？これウルトラでしょ？軽すぎない？」

「1ミリしか変わらないし、あんまり判んない。いる？」

「1本。」

水嶋さんが箱ごと、穂積さんの前に置いた。

「何時もの煙草屋のばーちゃんがさ、間違えて出したんだよ。急いでだから、そのまま買ったんだけど。」

「ふ、水嶋らしい。そのまま買うところが。じゃあコレ。」

そう言つて穂積さんは自分の煙草を水嶋さんに差し出した。

「サンキュ」と言つて、水嶋さんはそれを上着の内ポケットに仕舞う。

二人の一服が終わって、穂積さんは当たり前前の様に三人分の会計をレジで支払おうとしていた。

あたしは出しかけた財布を水嶋さんに押し留められて、店の外で穂積さんを待った。

「女の子は可愛く笑顔でご馳走様でしたーって言えば良いんだよ、青山さん。」

「あ……はい。」

「……バレない為の布石はしてきたつもりだったんだけどね。」

「……。」

「水嶋！」

お店のドアが開き、穂積さんが携帯を肩ほどに上げた。

客先からの電話の様だ。

「先行つてて。」

「了解。」

水嶋さんにあたしは促されて、お店を背に帰途へとついた。

「何で気付いたの？煙草？」

水嶋さんは話を続けた。

「……それも……あります。」

「他は？」

「口癖、部屋に女の人の痕跡が一つもない事……待ち受け……すみません。これは見ようと思って見たんじゃないですけど……。」

「そっか。」

水嶋さんは、穂積さんから譲り受けた煙草を口に啜えた。

「正直言うと、ホツとしてる。君にバレた事が。」

あたしが水嶋さんを見上げると、水嶋さんもあたしを見た。

「更に言えば、気付いて欲しかった、誰かに。」

あたしはキーボードを打つ手を止めた。

水嶋さんは、誰かに気付かれる事を望んでた。

報われないと知ってて、想いを止める事が出来なかった水嶋さん。
・・・想いが報われたあたしは、幸せ？
穂積さんの為に何が出来る訳でもないあたしの方が、幸せ？

「・・・ま？青山？」

あたしは声のする方を見た。穂積さんがあたしに書類を差し出して
いた。

「あ。すみません。何でしょうか。」

慌てて書類を受け取る。

「PDFで各営業所に送っておいて、所長宛てに。」

「はい、お預かりします。」

あたしはコピー機に向かった。

水嶋さんがあたしに言った。

「最初は試したよ、穂積がどんな女、好きになったのかと思ってね。
でも良い女だと思った。本当だよ。だから・・・穂積が幸せになれ
ば良いって思った。」

「気持ち悪い？俺。」

優衣の事が頭を過って首を横に振るあたしを見て、水嶋さんは

「性同一性の友達居るんだって？タマちゃん言ってた。それで冷静
に俺の事考えてくれたのね、青山さんは。」
そう言って、あたしの頭を撫でた。

原稿をフォルダに落として、席に戻った。
社内メールを送信する。

・・・水嶋さんの幸せって、穂積さんの幸せなのかな。

その夜、珠紀にメールを打った。

水嶋さんと色々話せた、アリガトって。

早々に返信が来た。

話すつもりはなかったんだけど・・・ボロっと思っちゃった。
ごめん。

でも、水嶋さんも奏達の関係を見守ってるみたい感じたから
だから

大丈夫かなと思ったの。

今回ばかりは珠紀の口の軽さに感謝・・・と言っべきだろうか。

あたしはウィスキーのボトルを取り出した。

100円ショップで買ったそれっぽいグラスに氷を入れて、ボトル
を傾ける。

お水で割ると、綺麗な黄金色になった。

小さなストープの前で、それに口を付ける。

こうこうと灯りを点け、観てもいないテレビを見つめた。

「にが・・・。」

美味しくもない、飲みたい訳でも酔いたい訳でもない。

暗くなるのが怖い。

布団に横になるのが怖い。

裸になる自分も怖い。

お酒が入ってからじゃないとシャワーすら浴びれない。

もうあれから毎日、ウイスキー（これ）が無いと眠りに就けないあたしが居た。

「・・・青山さん、聞いてる？」

「え？」

現実には引き戻されて、あたしは領収書の整理中だった事を思い出す。目の前で山本さんが心配そうな顔をしていた。

「あ・・・すみません、何ですか？」

「青山。」

あたしは穂積さんの方を見る。

岩根部長の裁判が終わり、穂積さんは会社に居る事が多くなった。

「体調悪いなら帰れ。倒れられても逆に迷惑だよ。」

尤もな意見だと思った。

思ったけど、穂積さんからそれを聞くのは痛みにはしかならない。

”仕事”でしか穂積さんの役に立てないあたしから仕事取ったら、何も残らない・・・。

「・・・すみません、帰ります・・・。」

あたしは領収書を封筒の中に押し込んで、デスクの中に仕舞った。

のろのろと着替え、下へ向かうEVを待っていると水嶋さんに声を掛けられた。

「どうした、早退？」

車のキーを口に咥え、スーツの袖を通す水嶋さん。

「はい・・・。」

EVにあたし達は乗り込んだ。

「顔色悪いな？歩ける？中板なら直ぐだから送って行くよ、青山さん？」

親切な申し入れを断ろうとした瞬間、EVの箱が降下して平衡感覚が鈍った。

あたしの頭の中で大きく何かが一周して、立っていらなかった。

「青山さん！」

水嶋さんの腕があたしを支えて、あたしは何とか持ち直した。

「大丈夫です。すみません、帰れます。」

「大丈夫じゃねーだろ。送ってく。」

水嶋さんは、あたしの左手首を掴んだまま離さなかった。

あたしはその力を頼りに何とか歩いた。

ビルから少し離れた駐車場に、水嶋さんの営業車があった。

白いライトバンで、あたしは助手席に押し込まれるようにして腰を下ろす。

車が走り出して、水嶋さんは最初の信号待ちであたしの顔を覗き込んだ。

「・・・俺のせい？」

「違います！・・・最近仕事大変で・・・疲れてるだけです。」

判り易い嘘だった。

穂積さんの出社率が高くなって仕事は落ち着いてきた。

「痩せたな、青山さん。」

「・・・その口癖、どっちが先なんですか？」

あたしは懸命に話題を変えた。

「・・・俺、かなあ？・・・てか良くね、そんな話。」

「水嶋さんもそういう口調するんですね？」

「これが本来の俺だから。」

「え？・・・今迄のは？」

車が発進する。

あたしはシートにくっついたりと体を任せた。体が重かった。

「・・・穂積に合わせてる。」

「え？」

水嶋さんは片手でハンドルを握って、遠くを見て運転していた。

「穂積と居ると、”しっかりした水嶋”を演じてるとでも言うのかな。」

あたしは直ぐに返す言葉が見つからなかった。

でも、それ解る気がする。

「・・・もしかして眠い？」

あたしは口を押さえて欠伸を一つした。

「どんだけ俺の前で寝るんだよ。」

「・・・すみません・・・睡魔が襲ってくるんです・・・。」
狭い車内でコートにくるまってマフラーをしてポカポカして、やっぱり車の振動が心地良くて・・・。

「中板、直ぐ着いちゃうって・・・ってオイ！」

すみません・・・水嶋さん・・・。寝てないんです・・・。

急に体が冷えてあたしは目を覚ました。

体に何かが掛けられていた。社名の入った紺の作業着だった。

車のシートはいつのまにか倒されていて、車は何処かに停車中、しかも水嶋さんは居なかった。

辺りも少し暗くなっていて、あたしは急に怖くなった。

「水嶋さん!!」

慌ててドアに手を掛ける。するとそのドアの向こうに水嶋さんが見えた。

「どうした?!」

あたしの必死の形相に、逆に水嶋さんが慌てていた。

ドアを開けると、あたしのアパートが見えた。

「・・・れ、此処・・・。」

「どんだけ寝んだよ。」

水嶋さんが時計を見た。

「・・・あれ営業は・・・。」

「予定変更したから、それは良いんだけど。大丈夫?あ、ちょっと顔色良くなった。」

あたしは車を降りた。

「本当にすみません。」

「穂積からも頼まれてるんでね。あ携帯鳴ってたよ、穂積じゃねーの?」

水嶋さんが煙草の吸殻を足で揉み消した。

「じゃ俺行くわ。無理すんなよ。」

「はい。」

水嶋さんの携帯が鳴って、水嶋さんは携帯に出た。

あたしを追っ払うように掌を振った。

あたしは一礼してアパートの1階にある集合ポストの202号のポ

ストを開ける。

見慣れない茶色い封筒がポツンと置いてあった。
あたしは恐る恐るそれに手を伸ばす。

・・・嘘でしょう。

封筒は閉じられておらず、中に手を滑り込ませると少し硬い材質の
何かに手が触れた。
それは写真。

桐生さんが持っていたあの写真だ。

あれで終わりじゃなかったんだ・・・。

あたしは頭を打ち付けられるような痛みを覚えて、ポストへと体が
倒れ込む。

そして、そのまま其処へ崩れた。

・・・あの男はあたしの家にまで来たんだ。

何が目的なの？！

あたしは体さえ差し出した。

一体どうしたいの？！

「おい！」

急に腕を掴まれてあたしは驚愕した。

「きゃあー!!」

「青山さん、俺だよ！」

あたしは肩で息をしながら目の前の水嶋さんを確認する。

「・・・水嶋さん、助けて・・・！」

あたしは水嶋さんの腕に縋った。

こんな部屋見られなくなかった、誰にもでも外で話せる内容でも無かった。

外は暗くなり始め、車内で話すのもあたしは躊躇われた。

部屋がお酒臭く、水嶋さんが一瞬顔を顰めたのをあたしは見逃さなかった。

昨夜の残骸がローテーブルの上に、留まっていた。

「・・・この写真、誰が撮ったの？」

水嶋さんは、ソファに腰を掛けた。

「桐生さんが頼んだ、探偵の人だと思う。」

「コレの原因が、コレ？」

右手でウイスキーの空のボトル、左手で写真を順に持ち上げた。

あたしは頷いた。

水嶋さんは写真をテーブルの上に置き、ボトルとグラスを台所の流しへと運んでくれた。

「美帆子さんにバラすとか言われた？」

もう一度あたしは頷いた。

「・・・他には？」

あたしは、一気に心を閉ざした。

「美帆子さんにバラすって言われただけで、君がこんなボロボロになるとは思えないけど。」

あたしは首を横に振った。

「俺は桐生って男が大っ嫌いでね、あいつの考えそんな事も、君がやった事も想像出来る。」

あたしは更に激しく頭を振った。

「寝たの？」

「寝てない!!」

「・・・体を強要された。要求を飲もうとした。それで罪悪感に苛まされてるって事？」

あたしは又押し黙った。

水嶋さんがあたしの傍へ歩み寄り、あたしを優しく抱き締めた。

「辛かったな。」

そうだった一言、あたしにくれた。

罵られたっておかしくない浅はかな行動だった。

幼稚で愚かしい行為だったと今では思う。

自分が汚いモノになった様に思えた。

水嶋さんの大きな手があたしの背中を撫でてくれた。

水嶋さんは、どうしてかやっぱり、あたしの欲しいと思う言葉をくれる人だった。

桐生さんの事を、水嶋さんに話せた事であたしは幾らか気が軽くなった。

・・・穂積さんに知られてはいけない。

水嶋さんもそれは同調していた。

「本当なら、穂積に正直に話してあいつに桐生の事を何とかして貰うのが妥当だと思う。・・・だけど、今の穂積の会社での立場とか、君達が不倫の関係にある以上、こっちは何もしない方が賢明だと思う。」

一番嘘をつきたくない相手に、あたしは嘘をつかなければならない。

翌朝会社に行くと穂積さんからの社内メール。

経理3人で飲みに行きませんか。

山本さんは早々に”行きます！”フォローを入れていた。断る術は無い。ただ、行きたくはない。

山本さんが帰った後、二人になるのが怖かった。

穂積さんに射抜かれたら、全てが明らかに真相がボロボロと丸裸にされそうだから・・・。

「おはよう、青山、調子はどう？」

「・・・はい、大丈夫みたいです。でも今日はお酒は止めておきます。」

最近この笑った顔が上手になってきた気がする。

「今日じゃなくても良いんだよ、来週でも。」

「来週は駄目じゃないですか、給与振込とか支払の準備で忙しいし、穂積さんも出張じゃなかったでしたっけ？」

「うん、そうなんだけどさ。」

「あたし”食べる”専門で。山本さん、楽しみにしてるっばいし。今日行きましよう。」

山本さんが予約した居酒屋で経理課の忘年会は開かれた。あたしと穂積さんが隣同士に、あたしに直面する形で山本さんが卓を囲んでいた。

穂積さんの膝があたしの右膝をかすめる。

あたしはウーロン茶を飲みながら、二人の話を聞いていた。

穂積さんの携帯が鳴って「水嶋からだ。」と言った。

あたしは鼓動を速めた。

「水嶋が今から来るって。」

携帯を折り畳み、穂積さんがそう言った。

暫くして、水嶋さんがやって来た。

美帆子さんと一緒に。

「きゃー奏ちゃーん、久しぶりー！」

相も変わらない無邪気な笑顔で、本当に眩しい女性ひとだった。

「・・・どうして・・・。」

穂積さんも吃驚している様子だった。

「近くに来たから智志、驚かそうと思って会社行ったら水嶋君しか居ないんだもん。」

水嶋さんはバツの悪そうな顔をしている。

「やだー此処四人掛けじゃない。あたし座れない、お店変えようよ！あたし行きたいところなんだ。」

「美帆子、ちよつと待って・・・。」

「あ自分、もう帰りますから良いっすよ！」

美帆子さんと初対面らしい山本さんが恐縮して腰を上げる。

あたしこそ、この場から逃げたくて腰を浮かせる。

「良いよ良いよ、皆で行こうよ。ちょっと遠いけど。」

山本さんは帰ると聞かず、誰も美帆子さんを止められずにあたし達4人でタクシーに乗る事になった。

タクシーの中であたしと水嶋さんは無言で、話し続ける美帆子さんに穂積さんが時折相槌を打つ程度だった。

「あたし、奏ちゃんに聞きたい事あったんだわ！」

助手席から顔を覗かせて、美帆子さんは言った。

「・・・何ですか？」

「それはお店に着いてから二人に聞くー！」

二人に、聞く？

カウンターにあたし達4人は並んで座った。

目の前には、シェーカーを振る庄司君が居た。

庄司君の新しい赤坂のお店は、P A U S Aの客層より少し年齢が高めで落ち着いた雰囲気だった。

あたしは俯く事しか出来なかった。

「皆何飲む？庄司君、あたしウーロン茶、智志はジンライムで良いの？水嶋君と奏ちゃんは？」

「・・・ウイスキーの水割りダブルで・・・二つ。」

「かしこまりました。」

美帆子さん以外の人間が困惑していると言って良かった。

庄司君が手際良く、お酒を差し出す。

あたしは水嶋さんがオーダーしてくれた水割りに口をつけた。飲まずにこの場をやり過ごせそうになかった。

水嶋さんもそれが解っててオーダーしてくれたのだろう。

「ねえねえ、庄司君と奏ちゃんって付き合ってるの？」

「え？」

美帆子さんの突然の問いに、穂積さんがそう発した。

庄司君が、リネンで手元を拭いているのが目に入った。

「この前あたし仕事で目白行ってたの。そしたら二人で車、乗ってたよね？デートかなあつて。」

あたしは震える手を膝に押し付けた。

待つて・・・その話は、待つて・・・やだ。その話はやだよ・・・。

「それ俺と待ち合わせてた時じゃないの？」

水嶋さんがあたしの方を向いたのを感じた。あたしは顔を上げる。

「タマちゃんと会った後、俺と会った日だよ、覚えてないの？」

水嶋さんの目があたしに訴えてる。

「え？あ・・・うん、あの日・・・？」

「池袋の改札で待ち合わせたのに、外から来たじゃん。あれ庄司君が送ってきたの？」

水嶋さんが庄司君に質問を投げた。

庄司君がああ口角を少し上げる笑みを浮かべてそれに答える。

「偶然、会ったんですよ。P A U S Aに行く途中だったんで車にお乗せしただけです。」

「え?! てか・・・奏ちゃんの彼氏、水嶋君なの?!」

美帆さんが身を乗り出していた。

穂積さんはジンライムの中の氷を指で転がしてる。

「温かく見守って下さいね。」

水嶋さんが美帆さんに向かって茶目つけたつぶりに言う。

「えー・・・そうなんだ!。あたしてつきりー、お店の名前も奏ちゃんのアナグラムかと思ってたのにい。」

「Amadeus^{アマデウス}。神に愛でられし者って意味ですよ。何ですかアナグラムって。」

「違うんなら良いけど。何だ、水嶋君か。どっちでも良いけど人が幸せなのって何かこっちもハッピー! 乾ばーい!」

純真さと云うか・・・天真爛漫と云うのか、時に罪だとあたしは思った。

「美帆子さん、申し訳ないんだけど彼女ちょっと体調良くないんで先、帰らせて貰うね。」

「え? そうなの?! ごめんね無理に連れてきちゃって。」

「行くうか。」

あたしは水嶋さんに促されて、庄司君のお店を後にした。

「・・・誰が見てるか判んないな。」

水嶋さんの言った一言が胸に突き刺さった。

「Amadeus・・・ふーん・・・。」

「・・・水嶋さん、有難うございました。」

「タクシー拾おうか、青山さん。」

水嶋さんが公道に歩み出て、手を挙げる。

「青山！」

タクシーが直ぐそこで減速していた。

水嶋さんが、あたしの後ろの穂積さんを見ているのが、見て取れる。穂積さんの手があたしの左手首を捉えた。

「・・・さっきの、どういう事？」

「・・・。」

「水嶋。」

「・・・タクシー来た。」

あたしの左手は自由になり、

あたしの想いは雁字搦めになった・・・。

「メール、来た？」

水嶋さんがあたしに携帯の画面を見せた。

あたしもバッグの中の携帯を確かめる。

CCで水嶋さんとあたしの名前、勿論、送信者は穂積さん。

さっきの件で、明日話したい。

池袋の cafe garden で14時に。

タクシートの運転手が信号待ちの間、乗車記録をつけている。

「穂積へのクリスマスプレゼントを買う為に、俺に相談したってのが妥当かと？」

「・・・水嶋さんは、穂積さんをどんな風に好きなんですか？」

一度、聞いてみたいと思っていた。

「・・・唐突だな。」

水嶋さんはちよつと笑って、窓の外を見た。そして又、あたしに視線を戻す。

「前に好きだった人が死んだって言ったの、覚えてる？あれは本当だよ。」

水嶋さんは過去の記憶に哀しそうな表情を見せた。

「中学までは普通な男のつもりで居ただけだね、初めても女だったしね。でも何か違和感があったんだ。高校入って興味があつたら弓道部に入部したんだけど・・・望^{のぞむ}、1コ上の先輩。俺、初めて見た時、息が止まったよ。そうだな、身長は穂積と同じ位。弓道、間近で見た事ある？正しい姿勢、的に集中する眼差し・・・そういう

うの全部、憧れたんだ。少しでも近くに居たい、同じ様に弓道が巧くなりた。ああなりたい。その思いが触れたいとか、抱き締めたいとか、そんな気持ちに変化した。望もそう思ってくれた。だからそういう関係になった。」

水嶋さんは、ノゾムさんの話をして心が落ち着かなくなったのか、禁煙車の中で煙草の箱を開けたり閉じたりしていた。

「男子校だったから珍しくもなかったし、例えどう見られても良いと思ってた。望と居られればそれで良いって思った。それから半ปีかな、部活終わって”又、明日”って、事故に遭って、二度と声が聞けなくなった。」

今にも泣き出しそうな水嶋さんの手を、あたしは咄嗟に包んだ。

「・・・心に穴が空くって、ああいう事を言うんだと思った。スカスカの毎日だったよ・・・でも怖いから自分から死ぬ事も出来なかった。」

あたしは首を横に振る。

「高校出て、この会社に入って穂積に逢った。入社式であいつ見た時に、望と被ったんだ。凜とした立ち姿が。」

水嶋さんがあたしを見る。

あたしの目から零れ落ちた滴を、左手の甲で拭い取ってくれた。

「優しくて強くて、やっぱり憧れてるんだよね、穂積に。だけど、それ以上には思わない。・・・うん、あいつとやりたいと思った事は無いな。」

自分の気持ちを確かめるように、最後に少しオドケタ口調で、穂積さんに対する気持ちを語ってくれた。

「・・・でも、今一番大事にしたいのはって聞かれたら、間違いない穂積って答えるよ、青山さん。」

胸が苦しくって、涙も止まらなくて、あたしは唇を噛んで嗚咽を漏らした。

あたしが泣き止むまでの間、水嶋さんがあたしの背中を擦っていて

くれた。

「穂積と青山さん、見てるとき。俺、思うんだ。伝えられない思い抱えて傍に居ると、通じ合ってるのに直ぐ傍に居られないの……どっちが辛いんだろうって。」

タクシーが又、信号で止まった。

「まあ俺は……辛いのがヤダから踏み込まないだけで……。」

「水嶋さんは、偉いよ……。穂積さんの幸せ、本当に、一番に願ってるんだもん。」

あたしがそう言うと、水嶋さんは何時もの笑顔でこう言った。

「穂積が好きになったのが青山さんで良かった。」

今、一番大事にしたいのは

浮かんでくるのは、たった一人。

今日も明日も紡ぐのは、この思いだけ。

それが頼りがいのない想いの糸だって良い。

その先にある眩しい程の道標を辿りたい。

タクシーのドアが開いて、あたしは降りた。

「・・・今日も、飲むの？」

車内から水嶋さんの声が聞こえて、あたしは上半身を倒して覗きこむ。

心配そうな顔が見えて、あたしは小さく口角を上げる。

「おやすみなさい。」

あたしがタクシーから離れるとドアは閉まった。

タクシーのテールランプが見えなくなるまで見送ってあたしは階段を昇り始めた。

コートを脱ぎマフラーを外し、あたしは流しの中のグラスに目をやった。

その夜あたしは、電気を点け、CDを流し、ソファアの上で毛布を体に巻きつけて体育座りをしていた。

ちよつとして、あたしはCDを消した。

心がざわつく度に、穂積さんの顔を思い浮かべた。

又暫くして、あたしはロフトに上がって横になった。

次に、水嶋さんの言葉を思い出す。

電気のリモコンの”消灯”を押して、体を丸くして目を閉じた。

東京は良いな・・・。

夜が更けても静寂が訪れない。あたしは感謝した。

14時丁度にあたしは会社の裏手にあるcafe gardenのドアを開けた。

お店の奥の方に、穂積さんと水嶋さんの姿を見つけ、そこに足を進める。

「すみません、遅くなって……。」

二人の前には、湯気の立つカップが置かれていた。

「今、来たところだよ。」

壁際に座る水嶋さんの前に、穂積さんが座っている。

あたしは穂積さんの横に腰を下ろした。

暫くの沈黙。店員がオーダーを取りに来た。

「……庄司君と水嶋と会ったの？」

お互いが目を見る事も無く、ただ目の前の天板一点を見て話をしていた。

水嶋さんがカップに砂糖を入れて、ティースプーンでかき混ぜる音がある。

「ごめんなさい……。」

「いや謝らなくて良いんだけど……。」

「うん……。」

あたしの前に届けられた紅茶が良い香りを放った。

ふと視線の先で、水嶋さんがカップに砂糖を追加しているのが見えた。

「……何杯入れるんだよ。」

と突っ込んだのは穂積さんだった。

「え？だって甘くねーんだもん。」

あたしは笑った。

「てか俺、今日此処に必要なだったの？」

「……うん、ごめん。」

あの穂積さんが、水嶋さんに謝ってる。

「穂積さん。」

あたしは穂積さんを見上げた。

「あの日、珠紀と一緒にランチしたの。その後水嶋さんと約束してて、それで偶然庄司君と会って池袋迄送って貰う事になって……。」

「何で……水嶋と……？」

「あの……もう直ぐクリスマスでしょ。穂積さんに何かプレゼントしたいって思ったんだけど……思いつかなくて、水嶋さんに相談して……。」

「そーゆー事だよ、穂積。」

水嶋さんが煙草を口に咥えて火を点ける。

「……そっか……プレゼントなんて良かったのに……。」

穂積さんが表情を和らげて、やっとコーヒーに口をつけた。

暫くの沈黙の後、水嶋さんが煙を吐き出して呆れ顔で言った。

「お前ら、中学生かよっ。」

穂積さんとあたしは顔を見合わせて笑った。

「水嶋、23日暇？」

お店を出ると、穂積さんが水嶋さんに肩を並べて話を始めた。

あたしは二人を見上げるような感じで、その直ぐ後ろを歩いていた。

「イヴィヴじゃないですか、穂積さん。」

「やっぱ予定ある？」

「……無いですよ、一人身ですから。」

「ああ良かった。俺さ、午前中社長とゴルフ行かないといけないんだけど、夕方から水嶋んところでクリスマスパーティーみたいなの、やんない？って思ってる。」

「何だよ、パーティーって……。」

「……一人にしたいくないんだ、青山の事。俺が居ない間、出来たら一緒に待っていてくれたらと思って……。」

穂積さんがちよっと、後ろを向いた。

それに倅い、水嶋さんも振り返る。

「え・・・あ、大丈夫ですよ・・・。」

と言いつつ、穂積さんが23日にあたしに会う気で居てくれた事に顔が綻んだ。

「はいはい、良いですよ。」

水嶋さんが呆れ声で、答える。

「サンキュ！水嶋！」

穂積さんが水嶋さんの肩に手を乗せた。

・・・罪作りな人だな、穂積さんって・・・。

あたしは苦笑いした。

アスファルトの上にイチヨウの葉が積もり、舞っていた。

その上を歩くと、カサカサと鳴った。

空を見上げて、凄く高い事に気付く。

あたしは思わず、両手を広げて、この澄んだ空気を大きく吸い込んだ。

肺いっぱい満たされて、あたしは満足感でいっぱいだった。

「どうした、青山？」

二人が”大丈夫か？”みたいな微妙な顔付きであたしを見ていて、あたしは少し笑う。

「ふふ、こんな感覚ちよつと忘れてた。・・・もう直ぐ冬ですね。」

心がいっぱいであたしは、本当の笑った顔を二人に向ける事が出来た。

水嶋さんと別れた後、あたしは穂積さんの車に乗り込んだ。

「この後、横浜行かない？」

穂積さんがシートベルトを締めながら言った。

「これからですか？・・・大丈夫なの？」

「うん。・・・出張で暫く留守なんだ。」

「・・・ん、そうなんだ。じゃあ行きたいな横浜。」

穂積さんの車は、横浜に向かって走り出す。

色んな所で、モミの木が目に入った。

ラヂオからも甘いラブソングが何曲も流れてる。

穂積さんの口振りから、クリスマスまでの2日間は過ごせそうにも無かったけど23日に会えるのが、嬉しかった。

会おうとしていてくれた事が、心を震わせた。

「穂積さん、ありがとう。」

「ん？」

「良いの、言いたかったの。」

「・・・変なの。」

穂積さんもちよつと笑った。

池袋から横浜に着いた頃、すっかり陽も暮れてネオンやクリスマス
のライトアップがまばゆかった。

「綺麗、ね、凄く綺麗。」

路駐の車内、あたしは同意を求めるように穂積さんの方に体を向け
た。

運転席から穂積さんの体があたしを覆うように近付き、唇が重なっ
た。

穂積さんの右手があたしの頬に触れて、あたし達は至極近い距離で
見つめ合った。

穂積さんの香水の匂いに胸が苦しくなった。

「愛してる。」

あたしは一瞬瞑っていた目を開けた。

穂積さんの長い睫毛が直ぐ傍に見える。

言葉に詰まってあたしは左手を、穂積さんの右手に添える。

”アイシテル”

と言った穂積さんの方が震えてる、そんな気がしてあたしは自分か
ら穂積さんの唇にキスをした。

車を横浜ランドマークタワーの駐車場に入れ、あたし達はタワー内
でイタリアンのお店に入った。

窓が大きく、ライトアップされた横浜の街並みが眼前に広がった。これだけでも充分だったのだが、69Fのスカイガーデンからの夜景は圧巻だった。

あたし達はただ黙って手を繋いで、それに魅入っていた。

「そろそろ行こうか。」

そう穂積さんに言われて、あたしは頷いた。

スカイガーデンからエレベーターは数階下へと下がり、あたし達はホテル室内へと足を踏み入れた。

ここからもベイブリッジが見えた。

「今日は夜景満喫ですね。」

入って早々言うあたしの手を、穂積さんは離そうとしなかった。

引き寄せられ、あたしはすっぱりと穂積さんの胸の中に抱き締められる。

あたしは、体が強張って穂積さんを抱き締め返してあげる事が出来ないでいた。

それを察してかどうか、体を離すとあたしの手を引いてベッドの近くのソファに座る様促した。

持参していたバッグから穂積さんは、赤い小箱を取り出した。

小箱と言っても、10センチ程はあるだろうか。

「ちよつと早いけど、クリスマスプレゼント。」

「え？」

あたしは差し出された小箱を開ける。

「・・・これ・・・駄目です、こんな高価な物貰えない。」

そこにはフランスの有名宝飾ブランドの時計が高貴な輝きを放っていた。

「俺もお揃いにしちゃったから、してね、青山が。」

そう言い穂積さんは左腕の袖を少し引いて、あたしに見せた。

本当だ・・・時計変わってる・・・。

「・・・前の時計、良かったんですか・・・？」

自分が探る様な質問をしてしまった事を後悔した。

「あ、ごめんなさい。・・・あの有難う。嬉しいの。嬉しいんだけど身分相応じゃない気がして・・・。」

「俺がどうしても青山と同じ物を着けたかったの。」

「・・・あたしプレゼント出しくくなっちゃった・・・。」

「持ってるの？」

今日、穂積さん達に会う前に買いに行ったプレゼントはあたしのバッグの中に身を隠していた。

「うん。も、持つてる。」

「見たい。」

無邪気な笑顔を向けられて、あたしはそれを取り出した。

一応ブランド物にしたけど、この時計の10分の1にも及ばない代物だった。

それでもあたし的には奮発なプレゼントのつもりだったんだけど……。

「ライターだ。ああ有難う。大事にする。」

「ごめんなさい……。」

「俺の為に選んで買ってくれたんでしょ、何でも嬉しいよ。」

その微笑みに嘘は無い気がして、あたしも微笑んだ。

「ミニバーあるし、お酒でも飲みながら今日はいっぱい話そうよ、青山。」

穂積さんは着ていたジャケットを脱ぎ、椅子に掛けた。そしてミニバーからお酒を取り出す。

「ストレートで良いよね?」

「え、あ、はい。」

あたしは自分のコートと穂積さんのジャケットをクローゼットにかけて、直ぐソファに戻る。

ミニボトルからウィスキーがコップに注がれた。

「23日、ターキー買ってこいって水嶋に言われたんだけど、3人で食べきれるもん?」

「ターキーって……普通にチキン3本で良いかと……。」

あたし達は、今迄にないくらい話しこんだ。

そして、あたしはいつの間にか、眠りに落ちていた。

朝目が覚めると、あたしは昨夜の服のままベッドの中にいた。

起きると、パウダールームの方で水が流れる音がした。

「穂積さん？」

穂積さんはタオルで顔を拭いていた。

「あ、おはよう。」

穂積さんも昨夜の服のままだった。

「すみません・・・あたし何時の間にか寝ちゃったみたいで・・・」

「

「俺もだよ。寝てる青山見てたら寝てた。服、皺ついちゃったなあ。車で帰るから良い？」

穂積さんが自分のパンツの皺を気にしたので、あたしもスカートの裾を見た。

「大丈夫。」

「そっか。」

あたしは昨夜、何もなかった事に感謝した。

本当は・・・ちょっと怖かった。

穂積さんは好きだけど、もし穂積さんに求められた時に体が拒絶したら・・・そう思っていた。

12月23日クリスマス・イヴイヴ。

あたしは今夜のパーティの為に、15時に大塚駅で水嶋さんと待ち合わせをした。

「穂積、18時位には来れるって？青山さん。」

「うん、そんな事言っていました。」

「ターキー買ってくるかな・・・。」

「・・・本気だったんですか？」

「・・・さ、酒買いに行こうか、ちょっと歩くけど。」

小さな酒屋でシャンパンやウィスキーを買いこみ、水嶋さんのマンションへと帰った。

「あ、ハンガーそこにあるからコート掛けて。」

「ありがとうございます。」

「・・・あれから、桐生アイツ・・・大丈夫？」

「うん。何にも無いです。」

「そっか。」

あたしのコートを水嶋さんは、受け取って、寝室へと片付けに行った。

「帰る時は言っつて、出すから。」

そう言い後ろ手に寝室のドアを閉める。

桐生さんの一件があつて、あたしが敏感になつている事への配慮なのだと思つた。

「ねえそのツリー飾り付けしてくれない？」

「デカっつ！」

あたしの背丈より少し小さいサイズのクリスマスツリーが貧弱に窓際に立っていた。

こんな大きなツリーは初めてで、あたしは童心に帰り夢中で飾り付

けをした。

「電飾点けようか。」

ローテーブルの上に、温かいコーヒーが置かれた。

水嶋さんがスイッチを入れる。何色もの色が一斉に光を放つ。

「綺麗！飾り付けも完璧！」

とあたしが言うと、水嶋さんが

「横浜には負けるけど？」

とニヤニヤして聞いてきた。

「ああ横浜も綺麗でしたよ。鳥肌が立つ位……でもこっちは、あつたかい綺麗かな。心が安らぐって感じ？」

あたしがコーヒーに手を伸ばすと、水嶋さんのコーヒーがカフェオレなのに気付く。

「……これってミルク？」

「ううん牛乳。俺、ブラックとか基本無理なんだよね。」

「あたしも牛乳貰って良いですか？」

「冷蔵庫ん中、勝手に取って。」

「はい。もしかして、それに砂糖も入れてるの？」

「……何か？」

あたしは冷蔵庫から牛乳を取り出し、コーヒーカップに注ぐ。

水嶋さんのと同じ色になった。

「ケーキ、食べなくなっちゃった。」

「その中のプリンだったら食って良いよ、青山さん。」

冷蔵庫の中には、「スイーツ」の棚があった。

「んふふ。」

あたしはプリン二つとスプーンを二つ持って、ツリーの所へ戻った。

「今夜、何作ります？」

「ちよつと待って。」

水嶋さんが立ち上がり、あたしの置き忘れたカフェオレとレシピ本を持って来た。

「チキンに合うのって何？無難にパスタかなあ。か、ビーフシチュ
ーとか？何食べたい？」

「じゃあスパゲッティじゃなくて、ニョッキとかどうです？トマト
ソースで。」

「おおー良いかも。じゃそれ作ろう。後はサラダ……。」

「水嶋さんって料理出来るんですね？」

「一人暮らし長いしね。」

「穂積さんは、全然って言うってた。」

「あいつ、食に興味ねーじゃん？食べれば良い位じゃねーの？美帆
子さん超料理上手いのにな。」

水嶋さんは頁を捲りながら、さらっと言った。

「……美帆子さん、料理上手いんだ……。」

かなり前、こんな関係になる前の話。

穂積さんに奥さんお弁当とか作ってくれないんですかって聞いたたら、
”俺より忙しいからねー”なんて答えだったから、あんまり上手じ
やないのかと勝手に思ってた……。

「うあっ！ゴメン、青山さん……。」

「……ううん平気。」

完璧な女性^{ひつ}って、居るもんなんだな……。

19

二ヨツキを作る事になったあたし達は、近くのスーパーにじゃが芋と強力粉を買い出しに出掛けた。

そのスーパーで偶然にも、営業開発部の吉岡さんに会った。

「あ、あのあたし、実家がこの辺で・・・部長、お住まい大塚って言っていましたもんね・・・あ、すみません。じゃあ・・・。」

吉岡さんはそそくさとスーパーを後にした。

「・・・完全に誤解してますよね？」

あたし達は、自分達の姿を再確認した。

二人並んで、仲良くお買い物。・・・これじゃあ良い雰囲気にはか見えないよね・・・。

「ま・・・良いんじゃないの？」

「良いんですか？水嶋さん、困りませんか？」

「困んねーよ。」

水嶋さんは笑った。

穂積さんの言いつけでこうして二人で居るんだから、困る事もないのだが。

「近くにケーキ屋あるから、買って帰ろうか。」

あたしは少し迷って首を振る。

「うっん、穂積さん食べないし。」

「俺、食うし。」

会計を済ませると、あたし達はケーキ屋さんで小さなホルルのケーキを買った。

「おーお疲れー。スコアはどうだった？」

「ただいま。90は切った。あ良い匂い。」

「おかえりなさい。」

あたしは水嶋さんと二人でキッチンに立ち、ゴルフ帰りの穂積さんを出迎えた。

「ただいま。」

「・・・ただいま、だって。」

「はい、チキン。」

「おーサンキュ。そこ置いといて、皿に乗っけるから。青山さん、玉葱微塵切りして？」

「了解です。」

普段家で使う包丁よりも少し重くて、使いづらいなあと思って切り始めたら、あたしはサクツと指を切った。

「いつ・・・。」

「切った？見せて。」

あたしが左手の人差し指を差し出すと、水嶋さんは何の躊躇もなく、それを自分の口に入れ血を吸った。

「！」

口から出して、切れた部分を確認する。

「そんなに深くいつてないと思うよ？・・・って、あ・・・。」

水嶋さんがあたしの手を落として、あたしは手を引っ込めた。

穂積さんを見ると、穂積さんも驚きの顔であたし達を見ていた。

「ごめんっ。これ・・・うちのばーちゃんが、血出たら舐めときゃ治る！みたいな事いっつも言う人で・・・悪い、本当にゴメン。っい癖で・・・。」

必死にあたしと穂積さんに謝る水嶋さん。

その内、穂積さんが笑い出した。

「水嶋、これ初犯じゃないからな！」

「え？あ？・・・あー・・・。」

「絆創膏何処にあるの？水嶋。」

「え？あ無いかも。」

「大丈夫です、もう血出てないから、すみません。料理出来なくて・・・。」

「あ、後俺やるよ、この包丁切りづらいんだ、まぢで！ほら穂積と座ってて。」

水嶋さんが焦ってるから、こっちも調子狂っちゃっよ・・・。

ツリーも綺麗で、ニヨッキも上手くいって、穂積さんが買ってきたチキンも美味しかった。

久しぶりに美味しいお酒を飲んだあたしは、何時もは酔うような量じゃないのに

気分が高揚してフワフワした感覚の中に居た。

「あー水嶋さん、ケーキはああ？」

「あ、そうだそうだ、ケーキ買ったんだよ、穂積。」

「あたし用意しまーす。」

「・・・無理でしょ。」

穂積さんにそう言われて、あたしは立ち上がった。

「青山は、デキル子です！」

立ったら、何処がキッチンだったっけ・・・？位に、お酒は回って、あたしはしゃがみ込んだ。

「・・・すみません、酔ってる・・・。」

「見れば判るから！」

何か今、二人に突っ込まれた気がするう・・・。

「立てる？」

「ふあい・・・。」

眠いなあ・・・。

「寝かせる？」

「そうしようか？」

今日は楽しかったなあ。

「煙草・・・ってくる・・・。」

「・・・った。気をつ・・・。」

二人の声も遠くなってきた。
ボタンっ・・・。

あれ、水嶋さん、何処が行ったのかな。

あたしは、穂積さんの首に腕を回した。穂積さんがあたしを抱っこしてベッドに運んでくれた。

ベッドに寝かされても、あたしは穂積さんから離れられなかった。

「きよお・・・楽しかったねえ。」

「・・・ん。」

穂積さんの腕が、あたしを寝かせようと首に回した手を引き剥がす力の入らないあたしの体は、あっさりとしてベッドの上に横たえる。

ふぁー・・・ベッドだと思ったら穂積さんの唇が、あたしに重なった。

あたしの少し開いた口の中に、穂積さんの舌が入ってきた。

穂積さんとこんなキスをしたのは初めてだった。

・・・さっきの水嶋さんの事、妬いてたのかなぁ・・・。

あたしは、又、両腕を穂積さんの首に回した。

怖くないや・・・。

お酒のお陰かな・・・。

もっとシタイかも・・・。

穂積さんの舌が、あたしの舌と絡み合って、厭らしい音を立てる。

暫くお互いを求め合うようなキスをして、最後にあたしの額に軽い

キスをした穂積さん。

あたしは安心して、眠りについた。

目覚めると、未だ朝ではなかった。

枕元のルームライトを灯すと、あたしの横には穂積さんが寝息を立てている。

コンタクトレンズをしたまま、眠ってしまい、あたしは何度か瞬きをした。

「痛い……。」

バッグに目薬入れてたんだ。

あたしはベッドから下り、寝室のドアを開けた。

水嶋さんがソファの上で眠っていた。

あたしはその横のローテーブルの下に置いてある自分のバッグを静かに開けた。

「……寝れないの？」

「起こしちゃいました？」

「いや、そういう訳じゃないんだけど。」

「コンタクトつけたまま寝ちゃって。」

あたしは目薬を差し、コンタクトを外した。

それをじっと見ていた水嶋さんが一言こう言った。

「……怖くねーの？」

「怖くはないかな……。水嶋さん、目良いんですか？」

「相当良いよ。穂積も眼鏡止めてコンタクトにすれば良いのにな？」

「無くてもそんなに困らないって前に言ってた気がする。」

「美帆子さんの趣味かな。」

「……水嶋さん、今日やけに突っ込んできますね、そこ。」

「……え？」

あたしは外した2枚のレンズを手で弄んだ。

「悪い……。」

水嶋さんがソファに座り、膝の上に掛けてある毛布に顔を埋めた。

「……水嶋さんから見た、美帆子さんってどんな女性？」

あたしが水嶋さんを見ると、困惑気味な顔を覗かせた。

「はつきり言つて良いですよ。」

「……美人で仕事も出来て性格も良くて……非の打ちどころは無いよ。」

あたしはちよつと笑つた。

「あたし今迄、穂積さんに美帆子さんの事聞こうとしなかった。手の中のレンズは乾き始めて、重なり合つて剥がれなくなった。」

「桐生さんのところで会つてからは尚更、聞きたくなかった。」

穂積さんがあたしに”アイシテル”と言つた時の事を思い返す。

あの時あの瞬間、穂積さんの目には他の誰でもなく、あたししか映つてなかった。

「水嶋さん、伝えられない想い抱えて傍に居ると、通じ合つてるのに傍に居られないの、どっちが辛いんだろうって聞いたけど、あたしは、水嶋さんの方が辛いと思うよ。」

あたしは真つ直ぐに水嶋さんを見てそう言つた。

超えられないものは在る。

だけど、ほんの一瞬でも通じ合えたつて思えたんなら、凄く幸せな事なんじゃないのかな。

会社が年末年始の休みに入った。

穂積さんからは毎日、電話とメールが来る。

会話は他愛も無かったけど、あたしを気に掛けてくれてるのが良く解った。

一度電話の向こうで美帆子さんの声が聞こえた。

その声に胸が痛まない訳じゃない。

2日に穂積さんと会う約束をした。

恐らく、美帆子さんが仕事か何かで不在になるのだろう。

あたしはお昼を買いにコンビニに行こうと、部屋を出た。

1階の集合ポストを開ける。

年賀状が数十枚入っていた。その中に、白い洋封筒があった。

封はしてない。

あたしはその場で中身を確認した。

桐生は執拗だった。

横浜に行った時の、穂積さんとあたしの写真だった。

ホテルの室内に入る瞬間の物もあった。

あたしはその場に立ち尽くした。

美帆子さんにバラすぞと脅して、あたしの体を求めておきながら結局手は出さなかった。

次に、写真をあたしの元へと届けた。

未だ、美帆子さんは穂積さんとあたしの事を知らない。

桐生の目的は何なの？

昔、庄司君が「オーナーは人生を面白おかしく生きたいと思ってる」と言っていた事が思い出される。

あたしを脅して、オロオロする姿を見たいだけ？

それだけで、こんな手間暇かかる事をするのだろうか……。

もしかして……あたしじゃなくて、穂積さんの失墜を……？

「どっか出掛けなくて良かったの？」

穂積さんがあたしの部屋に入ってくるなり、そう言った。

「うん、何処行っても人いっぱいだし。」

「ま、それはそうだね。」

穂積さんがコートを脱いで小さなソファに腰を下ろした。

「コーヒーでも？」

「うん、貰おうかな。」

あたしはドリップコーヒーを用意して、灰皿と一緒にローテーブルの上に置いた。

話をして、あたしの作った夕御飯を食べて、穂積さんは家に帰る為に立ちあがった。

靴を履こうとする一歩手前で振り返り、あたしを強く抱き締めた。

穂積さんの腕の中で、あたしが顔を上げると優しいキスが降ってきた。

「じゃあ、又、会社で。」

「・・・はい。」

部屋の中が穂積さんの匂いでいっぱいになった。

さっきまで穂積さんが座っていた場所にあたしも座った。

未だそこには、ぬくもりが在った。

・・・水嶋さん、穂積さんに言ったのかな・・・。

例えば、半月前に横浜に行った時から、穂積さんはあたしを抱こうとはしなかった。

今日も久しぶりに会ったのに、キス一つであたしの前から居なくなつてしまった。

あたしを硝子細工の様に、穂積さんは扱ってる。

桐生に、体を差し出そうとした事を、穂積さんはきつと知ってる。

確信は無い。

だけど、庄司君が穂積さんに言うのは有り得ないと思った。

「・・・。」

穂積さんにその情報を伝えられる人、もう一人居た。

桐生だ。

水嶋さんは、穂積さんの立場を考えてるし、穂積さんを苦しむ姿を見たくない人だ。

あたしがあんな事をしたと知れば、自責の念にかられるに決まってる。

だから水嶋さんが言う訳が無い。

やっぱり桐生しか考えられなかった。

桐生の悪意が、もう穂積さんの所まで来ているという事なの？

「今年も宜しくお願いします。」

あたしは目の前の山本さんに新年の挨拶をする。

「宜しくー。来年度も二人で経理盛り上げような！」

「はい！」

来年度は、総務部に人が入ってくる予定は無いようだった。

新年が始まり、穂積さんは人事課長達と来春の新卒者についての準備を始めていた。

あたしは年末に残っていた小口精算の仕事を再開した。

「おはよう。今年も宜しくね。」

あたしが声の方に顔を上げると、金田さんが郵便物を持って立っていた。

あたしは立ち上がって、挨拶をした。

「こちらこそ宜しくお願います。」

岩根部長の件で、わだかまりがあつたが月日が経つにつれて緩和しつつはあつた。

・・・それにこんな事で、穂積さんに心配を掛ける訳にはいかない。あたしは経理部宛ての郵便物を受け取り、多くの年賀状の中に、白い封筒を見付けた。

宛名が、あたし宛てだった。

通常では有り得ない事。

外からの感触で、何なのか容易に想像が出来た。

あたしはそれを持って女子更衣室に駆け込む。

あたしの部屋に入る穂積さんと帰り際の穂積さんの写真。

たった2枚の写真が、あたしの心を握り潰すようだった。

- 59 - (後書き)

キョウアスを読んで頂きまして有難うございます。
又、登録をして頂いている方にも感動と感謝の気持ちでいっぱい
です。。。

キョウアスも終盤に入っております。

最後まで読んで頂けると、嬉しいですっっ!!

他の連載作品も同時進行中ですので、新年も頑張ります。

皆様、お身体ご自愛のほど。。。

*** 壬生一葉 ***

軽い頭痛を覚えながら、あたしは席へと戻った。

穂積さんが山本さんに仕事の指示を出していた所だった。

「青山、年賀状はフォルダに入れて保管しておいて。あと、その精算終わったら売掛けの入力しておいて。」

「あ、はい、かしこまりました。あ……あの穂積さん。」
「ん？」

「……何か最近変わった事とかありました？」

「え？特に無いけど……何で？青山こそ何かあったの？」

穂積さんは即答で、嘘はないと思った。

あたしは右手を大きく振って「何も無いです」と答えた。

「すみません、急に。」

穂積さんには、届いてない。

桐生が、あたしに仕掛けてる最大の目的は、”あたし”。

あたしを穂積さんから引き離したいんだ。

何の為。

穂積さんとあたしが別れて、桐生が得をする訳じゃない。

桐生は、美帆子さんの為に動いてるんだ。

桐生は美帆子さんを愛してるんだ、きつとずっと昔から。

「そっか……。」

美帆子さんの為かあ……。美帆子さんかあ……。

「あのさ、今度美帆子の会社の謝恩パーティがあるんだけど、二人で参加出来る？って美帆子が言ってるんだ。」

金曜の夜、穂積さんと水嶋さんとあたしは居酒屋に居た。

「って話を俺は、した。でこの話は終わり。」

穂積さんが話を急転直下で完結させた。

水嶋さんが吹き出したように笑う。

「何だよ。それ。」

「・・・誘えって言われたんだ。忙しいから無理だろうって言うたら、誘うだけ誘って・・・いや来なくて良いんだ、むしろ来ないで欲しい。」

「・・・コレですよね？」

あたしはバッグの中から、美帆子さんから届いた招待状を取り出した。

「あ、それ俺んところにも届いてたよ。」

穂積さんは大きな溜め息をつき、片手で顔を覆った。

「言ったら聞かないんだ・・・すまない。忙しいから来ないって言つとくから。」

「話はその事だった訳ね。んじゃ、俺は先帰るから、二人でゆっくり。」

穂積さんの要件が終わると気を利かせて水嶋さんは席を立った。

「凄いですね、謝恩パーティなんて・・・。」

「エヴリイがね、売り上げが結構良いみたいで。」

「美帆子さん・・・何でも持ってるみたい。」

「……。」

穂積さんの返答が無い事で、あたしは口にしちゃいけない事を言った事にハツとする。

「ご、ごめんなさい……あたし。すみません。」

穂積さんを恐る恐る見上げると、悲しそうな笑顔を向けていた。

「らしくないな、青山がそんな事言うなんて。」

穂積さんの視線に耐えられなくなって、あたしは膝の上で重ねた手に目を落とした。

「今日はもう帰ろうか。」

穂積さんが伝票を持って立ち上がる。

あたしをタクシーに乗せると、運転手に「中板まで」と告げてドアを閉める穂積さん。

窓の向こうの穂積さんが、遠くに見えた。

「又っ?!」

あたしは携帯電話のクリアボタンを連打した。

珠紀に映画に行こうと誘われ、銀座に出てきた。

又も珠紀は「彼氏が会いたいって、ハート」みたいなメールを送ってきて、ドタキャンをした。

有楽町マリオン前で、待ち合わせの多い中こんな凹んだ顔してるのは、あたしだけだった。

昨夜、穂積さんと嫌な別れ方をしてしまった。

何度かメールをしようと、送信先に”うさぎ”と入れてもタイトルにも本文にも何て書いていいか解らなかった。

何を言っても言い訳にしかない気がした。

今日珠紀に会ったら色々話を聞いて貰おうと思ったのにな。

JRの駅に向かって歩き出した時、名前を呼ばれた。

「奏ちやーん!!」

顔を上げると、美帆子さんが片腕をブンブン振っていた。

は・・・恥ずかしくないのかな。

あたしは小走りで近寄って行って挨拶をした。

「どうしたの? 買い物?」

「友達と映画の約束してたんですけど、ドタキャンされちゃって。」

「ええそうなんだあ。残念だったね。じゃ今一人? 水嶋君後から来たりするの?」

美帆子さんは、あたしの彼氏を水嶋さんだと思ってるんだっ・・・。

「ううん、一人です・・・けど、今から帰ろうかと。」

「じゃあー買い物付き合って? 智志誘ったら、今日ちよっと機嫌悪

いみたいで生返事だったから一人で来たんだけど、洋服とかどれも可愛くて迷っちゃうんだよねえ。」

機嫌悪いんだ……。

あたしのせいかな。

「あ、そうだ、パーティのドレスさあ、あたし買ってあげようか？」

「え?! 駄目です! てかパーティは……。」

「良いじゃない! お年玉って感じ?」

そう言い美帆子さんはあたしの右腕に腕を絡めて引っ張り、先ずはデパートに入った。

フォーマルなフロアで、何着かドレスを見て美帆子さんは「違うなあ」と言う。

「み、美帆子さん、パーティは……。」

「ドレス買ったら、来てくれるでしょ?」

う。

確かに。買って貰ったら行かない訳にはいかない。
……駄目だ、美帆子さんと居るとこのペースから逃れる事は出来ないらしい。

「堅苦しくないの、パーティっても。あ、ほらお決まりの挨拶とかはあるけどさ、料理も美味しいホテルだし、是非楽しんでいって?」
美帆子さんは人が幸せなのを見るのが嬉しいのかなあ。

美帆子さんに連れ回され、試着もさせられ、あたしは着せ替え人形みたいな状態になっていた。

「……美帆子さん、今日美帆子さんお買い物に来たんじゃないんですか?」

「え、あ、そうだった! 忘れてた!」

美帆子さんがキラキラの笑顔を見せた。

「お腹空いたねえ。ランチにしよう。ソニービルに美味しいイタリ

アンのお店あるんだけど、そこ行けっ？」

やっぱり……。

ソニービルのイタリアンって言えば、此処ですか。

穂積さんも美帆子さんも、こういう所が好きなんだなあ。

と言うか、やっぱり美帆子さんの趣味って事か。

白いテーブルクロスに、アンティークな創りのスツール。

窓際の席を案内されると、銀座の街を見下ろせた。

「アフタヌーンランチでお願い。」

あたしはメニューを開くことすら出来なかった。

バッグの中に1万円札あつたかなあ。

美帆子さんが笑った。

「可愛い奏ちゃん、ランチ4千円ね。ちょっと高いけど、クオリティは間違いないから。」

ランチで4千円って……。

「ネイルとかエステ、サロンも自分への投資でしょ？食事だって同じだと思わない？美味しい物食べて心も満足して、体にも良かったら最高じゃない！」

「……そうかも。」

「でしよう？」

テーブルに食事が運ばれてきた頃には、あたしはお金の心配を止めていた。

「奏ちゃんって美味しいって顔して食べるのねえ。」

「え？あ……美味しいんで。」

「あたしも美味しいと思つて食べてるけど、そんな風に思いつきり顔には出ないかも。見習おうつと。」

そう言いペンネを口に運び、にこつと笑う。

「あ、あたしもね絶対心掛けてる事あるのよ？」駄目な時でも駄目な顔しない”。仕事でもプライベートでもね。」
「良いですね、それ。駄目な顔したら、本当に駄目になっちゃいますもんね？」
「そう！そうなの、溜め息ついたら幸せが逃げるって言うのと同じ感覚じゃない?!」
「そうかもそうかも！」

前菜からドルチェ迄、目でも楽しませて貰ってお腹も満足、そしてやっぱりプロのサービスにも大感激だった。

お店を出てから、あたしは美帆子さんに4千円を差し出す。

「こんな素敵なお店連れて来て下さって有難うございました。美味しかったです！」

「いえいえ、又一緒にご飯でも食べよう、あたしも楽しかった。じやあこのお金は頂いておくね。」

夕方近く迄あたしは美帆子さんと銀座の街を歩き回っていた。
美帆子さん曰く、あたしにピッタリのドレスが無いんだとか。

「奏ちゃん！あたしが責任持ってドレス探しとくから！」

「え、良いですって。」

あたしは慌てて断る。

「自分で綺麗めワンピース探しますから・・・。」

「駄目！女の子はこういう時にもきっちり、お洒落頑張らないと！」

！あ、ちよつと待つて電話だ。」

バッグの中から携帯を取り出す美帆子さん。

「智志からだわ。もしもし？」

あたしは聞いちゃいけない気がして、意味も無く周りを見回した。

「あ、今ね奏ちゃんと銀座で一緒に買い物とかしてたんだけど、智志これから来る？3人でご飯でも食べる？」

聞こえてきた台詞にあたしは、顔の前で手を振った。

”無理です!”

「え？そうなの？薬は飲んだ？じゃあ今から帰るから、寝てて？うん、うん。じゃあね。」

薬？寝てて？

美帆子さんが携帯を折り畳むのを確認してからあたしは聞いた。

「穂積さん、具合悪いですか？」

「うん何か熱っぽいって。じゃああたし帰るね？ドレスは金曜迄に届くようにするから必ず！」

美帆子さんは、コートの裾を翻して颯爽と駅へと向かう道を歩いて行った。

通じ合ってるのに、直ぐ傍に居られない。

具合が悪いと連絡が来るのは、あたし宛てじゃない。

あたしは唇を噛み、下を向きかけた顔を上げた。

”駄目な顔はしない”

あたしは大きく息を吐いた。

息は白く、頬を涙が伝った。

月曜日、穂積さんはマスク着用で入社した。

「おはようございます。」

メールも電話もしなかったから、本当に金曜の夜以来の穂積さんだった。

穂積さんはパソコンの電源を入れながら、あたしの方を向いてゆっくりと瞬きをした。

「穂積さん、どうしたんスか？風邪っスか？」

穂積さんが頷く。

「何か嫌な風邪流行ってますからねえ。」

あたしは、ソフトを起動させ自分宛てのメールや掲示板をチェックする。

社外からメールが一通届いていた。

タイトル：アイツに取入るつもり？

あたしはダブルクリックをしてメールを開く。

土曜日は銀座で美帆子と買い物してたみたいだな。

何処まで図々しい女なんだ。

そうだ、来週の火曜日、穂積は会社を休むだろ？

毎年この日は休むんだよ。理由を聞いてみたら？

まあ教える訳も無いから、俺が親切に教えてやるよ、奏ちゃん。

2月2日は、

穂積と美帆子の子供の命日だ。

あたしはメールの最後の文章を何度も何度も目でなぞった。

子供の命日……。

命日？

「青山さん？」

あたしは肩を叩かれ、そちらを振り返る。

水嶋さんが、あたしの反応に逆に吃驚している様子だった。

あたしは慌ててメールを最小化する。

「は、はい。何ですか。」

「穂積は？」

「え？」

あたしは左斜め前の席に目をやる。不在だった。

山本さんも居なかった。

「あ……すみません、ちょっと判らないです……。」

あたしの心臓はこれまでに無い程に、速く動いていた。

「……そつか。てか顔色悪いけど？」

あたしは右手をこめかみの辺りに当て下を向いた。

指が震えてるのに自分でも気付く。

「……青山さん？」

「大丈夫です。」

あたしは水嶋さんの追求から逃れる為、席を立ちトイレへと歩いた。

大きな鏡に映るあたしの顔は青白かった。

「めえ……に……ち。」

予想だにしない言葉の刃が、あたしを貫いた。

重い瞼を開けると、何時ものラヂオのDJの声が聞こえてきた。顔を左に傾けると、ライトと窓が見えた。

何時、自分の家に帰ってきたんだろぅ……。

両手を使って重たい体を起こす。

ロフトの下に珠紀の姿が見えた。

「たま……き？」

あたしの声に反応して珠紀が顔を上げる。

少し潤んだ瞳を携えて、ロフトの上に向かって来てくれた。

そして痛い位に抱き締めた。

「奏！」

何で珠紀が家に居るのかな……。

「奏、会社で倒れたんだよ?!水嶋さんがあたしに連絡くれてね……。

」

そっか……。

やっぱり、あれは本当にあつた事なのか。

穂積さんと美帆子さんの子供の命曰って……。

ドアが開いた。

「水嶋さん帰ってきたみたい。」

珠紀が下に下りた。

「……奏、今、目が覚めました。色々有難うございました。」

水嶋さんがあたしを連れて来てくれたんだな……。

「……うん。じゃあ帰るから……。」

ロフトの上から、あたしは水嶋さんの声だけを聞いていた。

本当なら顔見てお礼を言った方が良いんだろうけど、今はそんな力が湧きあがってこない。

その夜、どうしてもあたしの傍に居ると言って聞かなかった珠紀があたしの隣で寝息を立てていた。

あたしは静かにロフトを下りる。

冷蔵庫からペットボトルのお水を出そうと扉を開ける。

水嶋さんが買って来てくれた物らしい、プリンとかゼリーとか栄養補助食品が目に入った。

お水を取って扉を閉める。

子供か……。

今はデインクスの夫婦も多い。それに不妊の女性も多い。

だから穂積さんに子供が居ない事も、然程珍しい事じゃないと安易に思ってた。

美帆子さんもバリバリ仕事してるし、恰好良くなって、羨ましいなあって……。

「何でも持ってる」

あの言葉を、穂積さんはどんな思いで聞いたのかな。

あたしはソファに座り、カーテンの隙間から見える月の明かりを見ていた。

此処まで聞いて、あたしはこの先の真実に目を瞑る事は出来ないと思っただ。

翌朝、珠紀を会社へと送り出した後、会社に休む旨を伝える。

陽が高くなった頃、あたしは電車に乗り目白へと向かった。

行先は勿論、桐生のマンションだった。

インターホンで名を名乗ると直ぐにロックが解錠される。

EVで最上階へと運ばれて、あたしは桐生の部屋へと足を踏み入れた。

桐生はテラスで、植木や花に水やりをしていた。

「奥さんはいらっしやらないんですか？」

「此処、本宅じゃないんでね。カミさんと子供は江戸川に住んでる。」

「・・・お子さん、いらっしやるんですか。」

「俺の子供の話、聞きに来た訳じゃねーだろ。」

桐生さんが薄っぺらく笑う。

「何時亡くなったんですか。」

あたしは勝手に大きなソファの上に腰を下ろした。

今日も鬱陶しい程の暖房が効いていた。

「美帆子が妊娠6ヶ月の時。」

あたしは衝撃のあまり、言葉を失う。

子供の命日って言うから、1歳とか2歳とか・・・そんな感じだと思っていた。

「あいつらデキ婚なんだよ、高校卒業して別の道歩いて20歳の時に同窓会で再会して気持ち盛り上がってセックスしたらデキたの、子供が。」

桐生がテラスから中に入り、あたしの前に座った。

直ぐに煙草を取り出す。

「まあ気持ちも盛り上がってるし、二人がもう社会人だったし結婚した訳よ。美帆子はギリギリ迄働くつつって仕事を続けてて・・・まあまだ入社仕立てのペーパーだったからシンドイ事もやらされてた。で無理が祟って流産した。」

ライターの花が上がり、煙草の先が赤々と燃え出した。

「奏ちゃん、知ってる？何かねある一定の期間過ぎて流産すると”死産届”ってのを出さなきゃいけないんだってよ。酷じゃねえ？子供が流れたってだけでキツイのに、届けって。穂積、どんな思いでそれ役所に出しに行ったんだろうなあ。」

どんな思いで……。

「美帆子はどんな思いで居たと思う？」

桐生の吐き出した煙草の煙があたしの鼻先に届いた。

「子供が死んで一番辛いのは母親の美帆子でしょう？穂積はね、どうして良いか解らなくて美帆子の事を腫れものに触るように接してたんだよ。アイツは、優しいんじゃない、臆病なだけだ。」
あたしは黙って桐生の話を聞く事しか出来なかった。

「美帆子はそれでも穂積を愛してる。」

泣きたくない、この人の前だけでは泣きたくない。

「一生添い遂げるって神の前で誓ったんだ、穂積が美帆子以外の女と生きてくなんて許されない。美帆子と逝く事が、子供と美帆子に対する贖罪なんだよ。」

自分の爪が掌に突き刺さるほど、ぎゅうっと握った。

「別れる。さもなきゃ、この前の続きだ。穂積の前に平然と立てない女にしてやるよ。」

あたしは一つの決意を固めて、やっと言葉を声にした。

「・・・美帆子さんの事本当に愛してるんですね・・・。」

「お前だって穂積の役に立ちたいと思うんだろ。俺だって美帆子を守る為だったら、何だってやるよ、何だってね。」

” そんなに愛してるなら貴方が美帆子さんと”

そんな思いが過って、あたしは又自分勝手な心を恥じる。

美帆子さんが愛してるのは、穂積さんなんだ。

あたしは立ち上がり、桐生に頭を深々と下げた。

桐生は何も言わなかった。

追いかけて問い質す事もなかった。

あたしの決意を察したのだろう。

その夜、久しぶりに穂積さんから電話が来た。

「具合どう？」

「もう、大丈夫です。」

「この前はごめん。」

「・・・あたしが悪かったんです、すみません。本当に。」

「今から行って良い？」

「ごめんなさい、今もう寝るとこなんで、明日会社で。」

「うん・・・そうか、じゃあ、明日。」

水曜日。

「おはよう。」

あたしよりも先に来ていた穂積さんがあたしの席で書類を整理していた。

「おはようございます。」

「本当に大丈夫？」

あたしは頷く。

「今日一緒にランチしようか、青山。」

あたしは静かに首を横に振った。

「お弁当持ってきて来たんです。すみません。」

「・・・そうか。」

家に帰ると宅配便の不在票が入っていた。

差出人は美帆子さんからで、品名が”衣類”となっていた。

本当にドレスをあたしの為に送ってくれたんだな。

玄関のチャイムが鳴る。

ドアスコープの先に水嶋さんが居た。

「どうしたんですか？」

「いや・・・大丈夫かなと思って。」

手にビニール袋を持っていたのに気付き、あたしは部屋に招き入れた。

「どうぞ入って下さい。丁度良かった、水嶋さんに話があったんですよ。」

あたしは水嶋さんが買ってきてくれたサンドイッチやおにぎり、サラダをテーブルの上に広げた。

「水嶋さんも食べますよね？」

「・・・穂積が心配してた。今日何かおかしいって・・・。」
電気ケトルに水を注ぎ、セットする。

「あはは一応病み上がりですから。カフェオレ淹れますね？」

コートを脱ぎ水嶋さんがソファへと座る。

あたしもフローリングの上に座り込み、サラダを開けたりする。

「水嶋さん、土曜のパーティなんですけど、エスコートして下さいね？」

「行くつもりなの？」

「美帆子さんがドレス、用意してくれたみたいで。今から届くんですけど……。」

「……。」

信じられないと言った顔を見せる水嶋さん。

「……あたしは大丈夫、水嶋さん。」

美帆子さんからのお年玉のドレスを着て、サロンで髪をアップにし、メイクも何時もより華やかに。

履き慣れないピンヒールを履いて、あたしはホテルの会場に到着した。

パーティ会場の入り口で何時もより上等なスーツに身を包んだ水嶋さんが待っていてくれた。

あたしのコートを背後から脱がせて、クロークに預けに行く水嶋さん。

「ドレス似合ってる。」

美帆子さんがあたしの為を選んでくれたドレスは、淡い水色で左胸に少し大きめのコサージュがあしらわれている、Aラインのシフォンドレスだった。

「穂積も喜ぶんじゃない？」

水嶋さんの言葉にあたしは、小さく頷き少しだけ笑った。

会場に入ると、大勢の紳士淑女がグラスを片手に談笑していた。

あたし達の前にボーイがトレイを差し出す。シャンパングラスを手にとった。

会場の端が壇上になっていて、その近くに穂積さんと美帆子さんを見付ける。

眩しい程の輝きを見た気がした。

あたし達に気付いた美帆子さんが、穂積さんの手を引いて傍に来た。美帆子さんは長身に合った黒のロングドレスで、ホルターネックのその大きく開いた胸の部分にはダイヤのペンダントが光っていた。

穂積さんも正装だった。

「きゃー奏ちゃん、やっぱり似合う！！ね、智志言ったでしょ？絶対似合うと思ってたの！智志はピンクの方が良いんじゃないかって言ったんだけど、奏ちゃん色、白いからどうかなって思ったのよね。」

「穂積さんと選んだんだ。ふふ、変な感じ……。」

「ありがとうございます。美帆子さんもドレスとっても素敵。」「ありがとお！これからうちの社長とあたしの挨拶とかあるけど、楽しんでね！あ、ごめん、ちょっと挨拶してくる。都築さん！」「あたし達3人は美帆子さんのパワフルな背中を見送った。」

「……感じ違うな、青山。」「髪アップにしてるからじゃないですか？馬子にも衣装って奴ですね。」

あたしはシャンパンに口をつける。

「二人も正装素敵ですね！イケメン二人の間で、あたし幸せ。」

「青山？」

「あ、穂積さん、美帆子さんが手招きしてますよ？」

「え？あ……うん。」
穂積さんは未だ何かを言いたそうにしていたけど、あたしは踵を返しグラスを持って食事のテーブルに向かった。

「うわー何食べます？」

豪華な料理がテーブルいっぱいに並べられていた。

あたしが意気揚々とお皿に料理を取っている間、水嶋さんは黙ってあたしの後ろに立っていた。

「食べないんですかあ？美味しそうですよ？」

振り返りもせず、あたしが言うとお水嶋さんが堰を切った様に話し出しました。

「……会社に来た桐生からのメール見たよ。お前の部屋で、穂積との隠し撮りの写真が何枚もあるのも見た。タマちゃんが見付けたんだけど……。」

「……。」

「何で俺に言わないんだよ。」

「言ったら、穂積さんに言うでしょ？」

あたしはトングを置いて、水嶋さんに向き直した。

「あたしが桐生の家に行った事、穂積さんに話しましたよね？水嶋さんが。」

返答に詰まる水嶋さんの横を擦り抜けて、あたしは壁際に身を寄せた。

「・・・穂積さんが苦しむ姿見たくない筈の水嶋さんが言うとは思ってなかったな。桐生がバラしたのかと思ってただけど・・・色々考えた結果、水嶋さんが言ったんだらうなつてここに落ち着きました。」

あたしはテリーヌを口に運ぶ。

「美味しっ。」

水嶋さんも壁に寄り掛かった。

料理もお酒も美味しかった。煌びやかな世界は美しかった。

あたしは空いたお皿をボーイのトレイに乗せる。

壇上に恰幅の良い社長さんが立ち、変な笑い方をしながら挨拶をしていた。

その直ぐ傍に、美帆子さんが穂積さんと並んで立っていた。

あの笑顔の奥に、あんな傷みがあったなんて誰が思うだろう。

完璧な人間なんて居ないんだ。

”駄目な時に駄目な顔をしない”強さを持ち合わせたんじゃない。

そうなる努力をしたから、今の美帆子さんが在るんだ。

今日も明日も。 - 最終話 -

「・・・疲れたなあ。」

あたしはその場で、頑張つて履き続けたヒールを脱いだ。

好きだけで、どうにかなる恋もあれば、それだけでは、どうにもならない恋が在る事をあたしは知った。

もう少し、美帆子さんが性格が悪かったら、穂積さんを完全に独占したいと思つたかもしれない。

もう少し、穂積さんがあたしを都合の良い女として扱つたんなら、あたしも醜態を見せたかもしれない。

もう少し、あたしがズル賢い女だったら、穂積さんを巧く利用したのかもしれない。

そんな事も思つけど、それは無意味な思考でしかない。

あの美帆子さんだから、穂積さんは選んだのだし、あの穂積さんだから、あたしは憧れ想つたのだし、このあたしだから、穂積さんは愛してると言ってくれたのだ。

添い遂げられない思いがある事を、あたしは水嶋さんから教わった。それでも前を向いて歩いていけるんだって、今、自分で思える。

好きになつた事を後悔もしないし、さようならを決めた事も後悔しない。

あたしは会場のドアを開け、裸足でクロークに向かった。片手に小さなパーティバッグとヒールのあたしは少し異様に見えたかもしれない。

「青山！」

あたしがコートを受け取って、声のした方を向く。

ドアが開いていて、穂積さんが見えた。

その直ぐ後ろに美帆子さん、そして又その後ろに水嶋さんが立っていた。

「智志？」

・・・水嶋さん、又言わなくても良い事を言ったな・・・。

穂積さんは、美帆子さんを一人には出来ない。

あたしはペコッと小さく頭を下げて、思いつきり口角を上げた。

タクシーに乗ろうと、ホテルを出る。

東京に初雪が降った。

ホテルの植え込みに雪が舞い降り、そして消えた。

この土はこの日この時、雪が降った事を記憶し、忘れないだろう。

あたしの心もそれに同じ。

穂積さんを好きだった事を心は記憶する。

あの日、二人で見たあの白雪を忘れない。

人の気配があつて振り返ると水嶋さんが哀しそうな顔をして立っていた。

「あたし、頑張った！」

「・・・うん。」

「貫いたよ？」

「・・・送つてく。」

あたしは首を振る。

「一人で歩けます。」

あたしは水嶋さんに笑い掛けた。

T H E E N D * * *

*
*
*

今日も明日も。 - 最終話 - (後書き)

長々とお付き合い下さいまして有難うございました。

この作品に關しまして想うところも有り(意味深長)、お気に入りになつてしまつたキャラも有り(再意味深長)、今日此処に最終話を迎へられた事は一先ず安堵でございます。

読んで下さつた方、

お気に入りに登録して頂いた方、大変励みになります!!

今後も別の作品で読んで頂ける様に精進して参ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3833i/>

今日も明日も。

2010年10月17日03時21分発行